

ISSN 0910-7282

大阪府立図書館紀要

第37号

2008年3月

Bulletin of Osaka Prefectural Library No. 37

大阪府立中之島図書館

大阪府立中央図書館

目 次

中之島図書館所蔵の絵画について	鳴澤 成泰	p 1
中之島図書館ビジネス支援サービス経過など	藤井 兼芳	p 23
盲ろう者へのパソコン支援	杉田 正幸	p 35
大阪府立図書館における政策立案支援サービスの現状について	日置 将之	p 44
白崎禮三と瀬川健一郎 - 『織田文庫』蔵、作之助宛書簡をめぐって	高松 敏男	p 50
中之島図書館所蔵 一枚摺物仮目録 2	佐藤 敏江	p 53
翻刻『梅屋敷の記 - 一名 このはな』	安達 明子 宇円田 陽子 小笠原 弘之 北川 敬子 佐久間 素子 高崎 秀美 日置 将之 佐藤 敏江 八木 美恵	p 73
翻刻『松島紀行』	小笠原 弘之 山田 瑞穂 佐藤 敏江 高萩 綾子	
梁元帝『金樓子』にみる魏晋南北朝時代の集書と整理	光田 雅男	p 85
編集後記		

中之島図書館所蔵の絵画について

鳴澤 成泰（中之島図書館）

1. はじめに

図書館が保有する資料に関する規定としては、図書館法(昭和 25 年法律第 108 号)第 3 条(図書館奉仕)第 1 号に「郷土資料、地方行政資料、美術品、レコード、フィルム収集にも十分留意して、図書、記録、視覚聴覚教育の資料その他必要な資料(以下「図書館資料」という。)を収集し、一般公衆の利用に供すること。」と書かれている。

図書館では挿絵入りの図書や浮世絵、絵巻物など美術品的価値が高いものも多く所蔵しているが、それはあくまでも書物あるいは書物の付属物という形で、絵そのものを見るというよりは、その中に盛り込まれている様々な情報、例えばかつての風俗であるとか、物の形であるとかを文字よりもはるかに雄弁に物語るものとして、図書館として整理し、利用に供している。基本的に芸術作品としての絵画や彫刻は収集対象ではない。それにもかかわらず多くの絵画を所蔵している。

中之島図書館では、重要文化財としての重厚な建物とともに、長崎市の平和祈念像で有名な西村西望作の 2 対の彫像や明治の大画家浅井忠の 3 枚の絵画などすぐれた芸術作品が館内に展示されている。浅井忠の絵画は記念室に掲示されているため、年に一、二度しか見ていただく機会がないが、彫像は正面のホールにどっしりと据えられており、図書館に集う人々を落ち着いた芸術的雰囲気包み込んでいる。

その他にも、多くの絵画を所蔵しており、かつては郷土資料室(現:マイクロフィルム閲覧室)に菅楯彦や生田花朝の絵が掲示されていたり、時には展示会を行うなど様々な形で展示されていたようである。ただ現在では管理上の問題もあり、しまいこんであってあまり見ていただく機会がない。今年芦屋市立美術博物館で開催された「菅楯彦の世界」展に日記や図書の表紙絵などとともに 6 枚の絵が出品されたり、昨年当館で谷崎潤一郎の『盲目物語』の講演をされた際、その口絵に使われた北野恒富の「茶々殿」をお見せしたりといった形で活用している程度である。

絵画の取得記録を調べてみるとすべて寄贈である。画家本人からの寄贈もあるが、寄贈者が画家とどのような関係にあったのか、また図書館とのかかわりはどうであったのか、記録が残されていないため探すことができず、よくわからない点もあるが、何かの経緯で

特に「中之島図書館へ」と寄贈していただいたものであるに違いない。

中之島図書館は 100 年以上の歳月の中で様々な変化を遂げてきた。最近の十数年をとってみても中央図書館の完成とともに機能を大阪・古典籍資料を特色とする一般的な図書館として、図書類を大幅に中央図書館に移し、閲覧室の構成も変え、現在の文芸ホールを設置している。そして 2004（平成 16）年から図書館の目指すところにあわせ一般資料室をビジネス資料室に変え、部屋の模様替えや図書類の重点化を行った。このような大きな変化のなかで、いつしか絵画の存在が希薄になってしまったのではないかと思う。

本稿では中之島図書館が所蔵する絵画（屏風や色紙類については除外した。）について整理し、紹介しようと考えた。作家については良く知られる大家から今日ではあまり知られていない方もおられる。実際資料を調べても現時点では情報が得られない方もある。寄贈者についても申し訳ないことながらお名前以外はほとんど情報が残されていない。作家ご本人以外の方については作家の身寄りや友人知人の方であろうと語り伝えられている。このような限界はあるが、わかる範囲で記録として整理しておきたいと思う。適宜区分して整理したが、それぞれの区分の中では作家の生年順に配列し、最後に情報が不明なものを配置した。絵画のスナップ写真は紙数の関係から数枚に絞って挿入した。なお文中敬称は省略した。

2. 大阪、京都、奈良を描いた浅井 忠の 3 枚の絵画

中之島図書館は 1904(明治 37)年に住友家の寄付により本館が建設され、その後利用者の増加、蔵書数の増加により手狭になったため、住友家の寄付により 1922(大正 11)年に両翼の拡張工事を行っている。その際、現在のホールに彫像が設置されたり、記念室も再整備され今日の姿になった。3 枚の絵もその際、記念室の室内を飾るものとして寄贈されている。

浅井 忠（あさい・ちゅう）は 1856（安政 3）年佐倉藩江戸屋敷に生まれた。幼いときから絵を好み、1864（元治元）年佐倉藩の絵師黒沼槐山について花鳥画を学んだ。1873（明治 6）年に上京し、はじめは英語の塾で学んでいたが、1876（明治 9）年国沢新九郎の画塾彰技堂に入門し、西洋画研究を開始、同年工部美術学校創設とともに入学し、同校画学教師フォンタネージに指導を受けた。1889（明治 22）年明治美術会を創立し、同年第一回展に「春畝」、翌年第二回展に「収穫」など明治洋画を代表する秀作を発表するなど活躍し、1898（明治 31）年には東京美術学校教授に就任している。1900（明治 33）年から 2 年間にわたるフランス留学から帰国後、東京美術学校教授を辞して、1902（明治 35）年新設の京都

高等工芸学校教授として京都に赴任している。翌 1903 (明治 36) 年自宅に聖護院洋画研究所を創設、1905 (明治 38) 年関西美術院が創設されると初代院長に就任するなど、関西画壇の指導者として活躍したが、1907 (明治 40) 年に京都で没している(1)。

寄贈されている作品は 1922 (大正 11) 年 10 月 21 日受け入れたもので

(1)「大阪港(安治川)」89.0×153.5 洋画 キャンバス油彩 1904 (明治 37) 年頃制作



(2)「牛」93.0×63.0 洋画 キャンバス油彩

(3)「奈良」93.0×63.0 洋画 キャンバス油彩

である。「牛」は京都を「奈良」は鹿が描かれており奈良をイメージするものであるという。

住友家の当主住友春翠は著名な美術品の収集家であり、内外の絵画を収集していた。『住友春翠』(4)によると、浅井忠が京都に移ってつくった聖護院洋画研究所が研究生の増えるに従い新教場新築の儀がおこり、京都の個人の画塾を糾合し、資金として一般からの寄付金も募って関西美術院を作ろうとした。その際、ともに作る事となる鹿子木孟郎が住友家に働きかけ、1000 円を贈られている。資金としてはこの 1000 円を含め 1588 円 70 銭集まったという。ともあれこの資金で関西美術院は建ちあがり、浅井忠が初代の院長となっている。

鹿子木孟郎は外遊中に住友家の顧問川上謹一から手紙をもらい、西洋画の買い付けを頼

まれたが、自身の留学の方が住友家にとってプラスであると返事を送り、3年間の留学をすることができるようになった。帰国後さらに1906(明治39)年から2年間住友家の命を受けパリの留学し、住友家のコレクションとなる絵画をもたらしている。須磨別邸にはフランスの名画とともに日本の洋画家の作品も多く収集され、浅井忠のものも数点あったという。このような浅井忠と住友家の関係から収集された作品の一部が寄贈されたのであろう(5)、(6)。

3. 大阪府文芸懇話会に集う芸術家達

中之島図書館はかつて単なる図書館という以上に大阪の文化センターという役割を担っていた。それが大阪府文芸懇話会である。1950(昭和25)年に大阪府立図書館(現在の中之島図書館)に事務所をおいて発足している。大阪文化賞、大阪芸術賞の各受賞者及びその審査関係者をもって組織されており、大阪における文化政策の一環として、文学芸術面の振興と発展を図り、会員相互の親睦と啓発に資することを目的としていた。当初の世話人の中に、当時の図書館長中村祐吉とともに鍋井克之、菅楯彦の名がある。中村祐吉の言によれば「この会が一番華やかだったのは昭和37年。今は亡き菅楯彦画伯他数十名の会員諸氏が大阪府の文化振興のため、はるばる東京から賓客久保田万太郎氏の応援を得て、府下9市・町で文芸講演会をブッテ廻ったときだ」(7)という。このような図書館を舞台とした活動もあって作品を寄せられたのであろう。

3.1 須磨對水(すま・たいすい)

1968(明治元)年大阪市東区北浜一丁目に生まれる。生粋の大阪人で義理の父の久保田桃水に絵を学んだ。京の職画(着物の絵や襖絵など職人としての絵描きのこと)を30年もするなど苦労している。大正から昭和にわたり大阪画壇を代表した画家。1948(昭和23)年大阪府文芸賞(翌年から大阪府芸術賞に名称変更された)を受賞した。1955(昭和30)年没(8)。

次の絵を所蔵している。

「侘び助椿」30.5×44.0 日本画 絹本淡彩

1952(昭和27)年5月12日受け入れ。大館正夫寄贈。

『あしかび第二集』(9)に絵と須磨對水のコラム「大阪や」が掲載されている。

3.2 菅 楯彦（すが・たてひこ）

1878（明治11）年現在の鳥取市に日本画家菅盛南の長男として生まれた。幼時に大阪に移り、1889（明治22）年父の病気のため、高台小学校高等科第二年を中退し、一家を支えるため絵事に専念することになる。以後独学を通じ、大和絵をはじめ円山四条派、狩野派、宋元画、浮世絵など幅広い研究を行う。また本居派の鎌垣春岡に国学や有職故実、山本憲に漢学を学び、仏教美術史、宗教史等の研究も進めた。大和絵的な歴史画や大阪の風物を好んでテーマとした。浪速御民と称して四条流を独自に発展させた瀟洒な筆致で大阪の風物を描き続けた。1949（昭和24）年大阪府文芸賞、1951（昭和26）年大阪市文化賞、1958（昭和33）年日本画家としてはじめて日本芸術院恩賜賞を受賞し、1962（昭和37）年大阪市名誉市民に選ばれた。1963（昭和38）年没⁽¹⁾。

多くの作品を書いている。小説家の表紙絵や口絵なども書いているが、昭和26年の毎日新聞のコラムに次のような記載がある⁽¹⁰⁾。「画伯が戦時中郷里鳥取県に疎開していたとき、当時岡山県勝山に疎開中だった谷崎潤一郎氏が「細雪」の装幀依頼のためはるばる山をこえて訪れ、画伯はすぐさま玄関先での有名な表紙の絵と「細雪」の字を書いたという挿話がある。谷崎氏の画伯に対する敬慕はすでにふかい。「聞書抄」をはじめ多くの挿絵をえがいたことにもよるが単に作品と挿絵画の関係だけでなく谷崎氏を傾倒させる偉大さが菅画伯にはあるのである。」

菅楯彦は文芸懇話会発足時からの世話人であり、昭和27年5月天王寺分館が竣工し、6月に開館式を迎えたとき、招待状の文及び字を書いていたなど、図書館との縁故も深いものがある⁽¹¹⁾。死後多くの蔵書を受け入れている。幕末の大阪の姿を彷彿させる貴重な歴史・風俗資料である浪速百景も菅楯彦の旧蔵品である。

次の6点を所蔵している。

(1)「天王寺舞楽」29.0×61.0 日本画 紙本淡彩 扇面額装
1951（昭和26）年1月10日受け入れ。梶川真人寄贈。

(2)「町人講学」33.0×55.0 日本画 紙本淡彩 扇面額装
1951（昭和26）年1月10日受け入れ。梶川真人寄贈。

(3)「浪速文人図」70.0×213.0 日本画 絹本墨に淡彩 額装 昭和14年頃
『菅 楯彦・生田花朝女名作展』⁽¹²⁾に掲載されている。
1951（昭和26）年5月16日受け入れ。吉川重三寄贈。

(4)「木津川の秋雨」37.5×56.5 日本画 紙本淡彩 扇面額装

1951（昭和26）年5月16日受け入れ。梶川真人寄贈。

（5）「尻無川の沙魚釣」28.2×55.0 日本画 紙本淡彩 扇面額装

1951（昭和26）年5月16日受け入れ。梶川真人寄贈。

（6）「住吉御田」52.0×58.0 日本画 絹本彩色 額装 昭和10年代

『菅 楯彦・生田花朝女名作展』（12）に掲載されている。

1951（昭和26）年5月16日受け入れ。梶川真人寄贈。

なお梶川真人は菅楯彦の甥であり、後に菅楯彦の養子となって菅真人と称した



菅楯彦 「住吉御田」

3.3 北野恒富（きたの・つねとみ）

1880（明治13）年金沢市に生まれる。小学校を卒業後の1892（明治25）年、版下業西田助太郎に入門し、版下技術習得のかたわら南画を学んだ。1897（明治30）年、彫刻師中

山駒太郎に伴い北国新報彫刻部に勤務したが、画家となる志を持ち、大阪に出て、翌年浮世絵の流れをくむ稲野年恒に師事した。1901（明治34）年大阪新報社に入社し新聞小説挿絵を描いている。1910（明治43）年第4回文展に「すだく虫」が初入選し、翌年第5回文展「日照雨」が三等賞を受賞、出世作となった。また1912（明治45）年「浴後」などを発表し、当時恒富風の美人画をはやらせた。1912（大正元）年の大正美術会、1915（大正4）年大阪美術会、1918（大正7）年茶話会の設立に関与し、1914（大正3）年日本美術院再興後これに参加し、1917（大正6）年同人となった。明治末年から大正にかけては、デカダンので濃厚な美人画を描いたが、その後次第に清澄な画風に転じ、情感豊かな美人画を残した。画塾白耀社を主宰し、大阪画壇の重鎮として活躍した。1947（昭和22）年没⁽¹⁾。

鍋井克之の『大阪繁盛記』⁽¹³⁾によれば、「高津宮の境内に、今春恒富庵の筆塚が建設された。昔、ここに北野恒富が住んでいた由緒の地である。題字は碧梧桐の筆跡になる。」とのことである。

次の2点を所蔵している。2003（平成15）年開催された北野恒富展に出品されている。橋爪節也による作品解説があるので引用しておく⁽¹⁴⁾。

(1)「茶々殿」179.0×84.5 日本画 絹本彩色 額装 大正10年（再興第8回院展）

1955（昭和30）年1月17日受け入れ。森本徳太郎寄贈。

「淀君の連作の一つで、簡潔な構図に桃山らしい衣装を着た茶々を描く。着物の模様にある咲きはじめての山桜のように、花開く直前の娘姿であろう。豊臣の桐の家紋がなく、秀吉の庇護を受ける以前の北ノ庄時代かもしれない。顔は根津清太郎の夫人松子を参考に書いたというが、色彩も抑制されて表情には寂寥感がただよい、運命に翻弄される若き茶々の不幸な境遇を匂わせている。大正10年の院展に出品され、前年の《淀君》に続けて一人の女性の生涯を描き分けようと試みたのだろう。昭和7年、お市や茶々が登場する谷崎潤一郎『盲目物語』の口絵にもこの絵は用いられた。」

(2)「宝恵籠」62.0×74.0 日本画 絹本彩色 額装 昭和6年頃

1956（昭和31）年8月15日受け入れ。内田稲菜寄贈。

「大阪の新年最初の祭が今宮戎神社の十日戎である。」「その本戎に登場するのが芸妓をのせた宝恵籠である。美しく着飾ったハレの日、見物の視線にさらされながら「ほえかごほいほい」と揺られ、やんちゃな芸妓もこのときばかりは神妙な顔つきである。それが面白かったのか恒富はスナップ写真のように宝恵籠を画面一杯に拡大し、その狭い空間に芸妓を詰めこんでしまった。前年の院展の《阿波踊り》につづく郷土色豊かな祭のシリーズ

で、出品作は所在不明だが、同じ構図で宝恵籠を描いた作品が何点も残されている。」

3.4 山口艸平（やまぐち・そうへい）

1882（明治 15）年大阪難波新地生まれ。国学院専門部卒業、独学で日本画を習得した。挿絵画家として活躍した。1955（昭和 30）年大阪府芸術賞を受賞。1961（昭和 36）年没（15）。

収蔵作品としては次の 1 点がある。

「筍市」42.0×45.0 日本画 紙本淡彩 額装

1958（昭和 33）年 1 月 25 日受け入れ。藤枝春月寄贈。

3.5 鍋井克之（なべい・かつゆき）

1888(明治 21)年大阪市生まれ。大阪府立天王寺中学校(現天王寺高等学校)在籍中から日本画を学び始めるが、のちに洋画に転じ、中学校卒業後、東京美術学校(現・東京芸術大学)西洋画科に進み、在学中に第 1 回二科展に出品し、翌年の第 2 回二科展では出品した卒業制作の「秋の連山」が二科賞を受けるなど早くから才能を開花させた。以後の二科展に出品を続け、第 5 回二科展で再度二科賞を受賞するほか、1922(大正 3)年には小出権重、黒田重太郎、国枝金三とともに信濃橋洋画研究所(後に中之島洋画研究所)を設立して後進の指導に当るなど、精力的に活動した。

戦後は第二紀会(現社団法人二紀会)の創立に参加し、1950 年(昭和 25 年)には前年の第 3 回二紀展出品作「朝の勝浦港」などにより日本芸術院賞を受けた。また同年には大阪府芸術賞を受賞している。1958（昭和 33）年大阪市民文化賞受賞。1959 年(昭和 34 年)からは浪速短期大学、1964 年(昭和 39 年)よりは浪速芸術大学(現・大阪芸術大学)教授として指導にあたるなど常に洋画界で大きな存在感を示した。制作の中心であった風景画は、油彩画による日本の風景の表現を代表する作品として高く評価されている。1969 年(昭和 44 年)没(16)。身近に見られるものとして JR 天王寺駅にある 1962（昭和 37）年に完成した壁画「熊野詣絵巻」がある。その他、小説や絵画に関する書物の他、随筆を多く書いており、随筆集として「和服の人」、「富貴の人」、「閑中忙人」、「大阪繁盛記」、「大阪ざらい物語」などがある。

所蔵作品としては次の 2 点がある。

(1)「湖上晴曇」59.5×72.0 洋画 キャンバス油彩 1948(昭和 23)年 第二回二紀展に

出品。

1952（昭和27）年5月12日受け入れ。土井日出男寄贈。

『生誕百年記念「鍋井克之」と旧制天王寺中学の画家たち』(17)の図版20に掲載(モノクロ)されている。

(2)「中之島図書館デッサン」19.0×24.7 洋画 紙本鉛筆

1956（昭和31）年9月28日受け入れ。本人寄贈。

3.6 生田花朝女（いくた・かちょうじょ）

生田花朝とも号する。本名はミノリ。1889（明治22）年大阪市天王寺区上之宮町に生田南水を父に生まれる。1896（明治29）年大阪師範学校附属小学校に入学。このころより家学であった俳句を父に、また藤沢黄波に漢学、近藤尺天に国学を学ぶ。1905（明治38）年四条派の画家喜多暉月に師事し絵を学び始め、1913（大正2）年菅楯彦に入門、大和絵のほか万葉集や国学、有職故実を学ぶ。また美人画家北野恒富にも学んだ。1925（大正14）年第6回帝展に「春日」が初入選、翌年第7回帝展で「浪速天神祭」が女性で初の特選を受賞する。1927（昭和2）年帝展無鑑査、新文展にも出品し、戦後は日展に出品、大阪の風物を大和絵風に綴り続けた。1952（昭和27）年大阪市民文化賞、1958（昭和33）年大阪府芸術賞を受賞。1978（昭和53）年没(1)。

次の4点を所蔵している。

(1)「天神祭」51.5×70.7 日本画 絹本彩色 額装 昭和10年頃

1952（昭和27）年6月19日受け入れ。梶川真人寄贈。

『菅 楯彦・生田花朝女名作展』(12)に掲載されている。

(2)「鑑真和上来朝図」166.0×113.0 日本画 紙本彩色 額装

1960（昭和35）年5月17日受け入れ。本人寄贈。

(3)「だいがく」190.0×101.5 日本画 絹本彩色 額装

1963（昭和38）年9月14日受け入れ。本人寄贈。

『菅 楯彦・生田花朝女名作展』(12)に掲載されている。

(4)「住吉大社御田植」96.0×129.5 日本画 紙本彩色 額装

1965（昭和40）年5月20日受け入れ。本人寄贈。

3.7 矢野橋村（やの・きょうそん）

1890（明治 23）年愛媛県越智郡波止浜町（現在の今治市）に生まれる。砲兵工廠で勤務中に左手切断という事故に遭遇するが、1906（明治 39）年南画家永松春洋に入門し、以来右手一本で創作活動に精進した。1913（大正 2）年第 7 回文展に「湖山清暁」が初入選し褒状を受賞、翌年、翌々年と 3 年連続して褒状を受賞した。1921（大正 10）年日本南画院創設に参加し、同人となった。また 1924（大正 13）年私立大阪美術学校を創設する。1928（昭和 3）年第 9 回帝展で「暮色蒼々」が特選を受賞、1930（昭和 5）年以後たびたび審査員をつとめた。戦後 1958（昭和 33）年日展評議員に就任、1961（昭和 36）年には前年の第 3 回新日展出品作「錦楓」により日本芸術院賞を受賞した。また 1950（昭和 25）年大阪府芸術賞、1959（昭和 34）年大阪市民文化賞を受賞した。1960（昭和 35）年日本南画院創立に参加し副会長、1964（昭和 39）年には会長に就任している。南画の伝統を守り、水墨山水を得意とした。「宮本武蔵」、「大菩薩峠」などの新聞連載の挿絵を手がけるなど幅広い活動をした。1965（昭和 40）年没⁽¹⁾、⁽¹⁸⁾。

次の絵が収蔵されている。

「豊秋」縦 52.0cm×横 57.5cm 日本画 紙本彩色 額装 昭和 30 年

1955（昭和 30）年 5 月 12 日受け入れ。藤枝春月寄贈。

1955（昭和 30）年関西総合美術展で発表された作品。矢野橋村 65 歳の作品。画像としては『企画展「矢野橋村展 - 近代水墨画の精粹 - 」図録』⁽¹⁸⁾の 54 頁に掲載されている。

3.8 中村貞以（なかむら・ていいい）

1900（明治 33）年大阪船場に生まれた。幼い頃の両手のやけどで指の自由を欠くという障害をもっていた。9 歳の頃、浮世絵師二世長谷川貞信のもとで写し物を学び、のち 1919（大正 8）年、19 歳のとき、当時大阪画壇の重鎮であり、日本美術院同人の美人画家として盛名をはせていた北野恒富に師事した。1923（大正 12）年日本美術院展に初入選し、春の試作展では受賞している。以後、院展を中心に活躍、爽やかで気品のある作品を発表し、文部大臣賞、日本芸術院賞を受賞、戦後の美人画の最もすぐれた画家の一人として高い評価を得た。1951（昭和 26）年大阪府芸術賞、1960（昭和 35）年大阪市民文化賞を受賞。また横山大観を心と芸術の拠り所として深く尊敬し、横山大観記念館理事長、日本美術院理事を歴任、後進の育成につとめた。1982（昭和 57）年没⁽¹⁹⁾、⁽²⁰⁾。

次の絵を所蔵している

「歌かるた」143.5×59.5 日本画 絹本彩色 額装 1941（昭和 16）年

1952（昭和27）年9月15日受け入れ。本人寄贈。

『モダニズムに香る、高雅な女性美。没後十周年 中村貞井展』(19)に作品の紹介がされている。解説では、「大きな縞の対の銘仙を着た少女は、かるた取りに余念がない。かつての日本のお正月の風景である。モデルは愛嬢青子さんという。小林古径の昭和2年（1927）の作《琴》も愛嬢つうさんの少女時代の姿を写した佳作であるが、この作品も《琴》と同様、古典的な静けさを持つ作品である。」と述べられている。

3.9 平野長彦（ひらの・ながひこ）

1903（明治36）年鹿児島県に生まれる。大阪に出、矢野橋村に師事。1928（昭和5）年第11回帝展に《薄夜》で初入選、以後帝展に入選を重ね、1936（昭和11）年秋の文展鑑査展に《高原》、新文展にも1942（昭和17）年《子夜呉歌》、1943（昭和18）年《肅條》で入選する。戦後は1946（昭和21）年春の第1回日展に《静寂》、秋の第2回日展に《高原》で入選、また日本画院展に出品、大阪美術協会理事をつとめる。1947（昭和22）年大阪府文芸賞受賞、1975（昭和50）年没(3)。

所蔵しているのは次の1点である。

「川口」53.0×73.0 日本画 絹本彩色 額装

1954（昭和29）年9月13日受け入れ。本人寄贈。

4. 大阪ゆかりの画家

図書館と特に関係の深かった3のジャンルに属する人の他に大阪にゆかりの深い人をこの項では取り上げる。

4.1 久保田耕民（くぼた・こうみん）

1890（明治23）年岡山県日生町生まれ。郵便局に勤めるかたわら大阪美術学校に学び、松永春洋に師事して、南画を学ぶ。号を香雲、香芸と称した。「秋糖」が帝展に入選。号を耕民と改めた。大阪画家協会を設立するとともに、日本南画協会理事、大阪有秋会会長として後輩の指導に当たり、日本画の普及に努めた。1969（昭和44）年没(21)。

所蔵作品として次の2点がある。

(1)「山路」96.0×92.0 日本画 紙本彩色 額装

1955（昭和30）年5月12日受け入れ。本人寄贈。

(2)「ヨセミテ溪谷」183.5×98.0 日本画 紙本水墨 額装

1965(昭和40)年3月22日受け入れ。本人寄贈。

4.2 池田遥邨(いけだ・ようそん)

1895(明治28)年岡山県浅口郡玉島町乙島(現倉敷市)に生まれた。1910(明治43)年福山尋常高等小学校を卒業し、翌年単身大阪に出て松原三五郎の天彩画塾に入塾し、洋画を学び、1914(大正3)年第8回文展に水彩画「みなとの曇り日」が初入選した。その一方日本画に興味を持つようになり、1919(大正8)年、京都に出て竹内栖鳳の画塾竹杖会に入門。1921(大正10)年26歳で京都市立絵画専門学校に入学、ムンク、ゴヤらの影響を受けながら新しい日本画を模索し、卒業後研究科へ進み、1926(大正15)年卒業した。1928(昭和3)年第9回帝展で「雪の大阪」が特選となり、1930(昭和5)年第11回帝展で「烏城」が再び特選を受賞。その後独特の鳥瞰図法による明るい色彩の画風へと移行する。戦後、1951(昭和26)年第7回日展「戦後の大阪」など一時抽象風の作品を制作。ついで1955(昭和30)年第11回日展「銀砂灘」、1957(昭和32)年第13回「石」など単純化した画面構成の象徴的作品を発表したのち、1960(昭和35)年、前年の第二回新日展出品作「波」により日本芸術院賞を受賞した。その後童謡的な風景や縹渺とした絵画世界を展開する。1952(昭和27)年日展評議員、1974(昭和49)年参与、1977(昭和52)年顧問に就任。1976(昭和51)年日本芸術院会員、1984(昭和59)年文化功労者となり、1987(昭和62)年文化勲章受章。1988(昭和63)年没(1)。

所蔵している作品は次の1点である。

「砂丘」92.0×69.0 日本画 紙本彩色 額装

1958(昭和33)年3月27日受け入れ。沢田富夫寄贈。

4.3 梶川真人(かじかわ・まひと)

1860(明治29)年鳥取県倉吉市に生まれる。菅楯彦の甥で菅家を継ぎ、菅真人(すがまひと)となった。やまと絵や歴史画を本領とし、楯彦風の風景画や有職故実の主題ですぐれた絵画を制作した。1983(昭和58)年没(22)。

所蔵しているのは次の2点である。

(1)「いかだし」44.5×50.0 日本画 紙本淡彩 額装

1963(昭和38)年9月14日受け入れ。本人寄贈。

(2)「いおり」45.0×49.5 日本画 紙本淡彩 額装

1963(昭和38)年10月29日受け入れ。本人寄贈。

4.4 山川 清(やまかわ・きよし)

1903(明治36)年大阪市生まれ。甲陽中学校卒。川端画学校に学ぶ。1923(大正12)年の大震災後は京都、1925(大正14)年より奈良に転居。1928(昭和3)年から6年間渡欧。帰国後春陽会展に出品。1948(昭和23)年春陽会会員。1969(昭和44)年没(2)。

1951(昭和26)年の毎日新聞には挿絵として山川清の絵が描かれているものがあった。裸婦とゆりの花が線画で描かれているものである。またカットも採用されている(23)、(24)。

所蔵しているのは次の2点である。

(1)「古い机」73.0×91.0 洋画 キャンバス油彩

1956(昭和31)年5月30日受け入れ。藤枝春月寄贈。

(2)「屋根」130.0×161.5 洋画 キャンバス油彩

1957(昭和32)年4月30日受け入れ。本人寄贈。

4.5 小出三郎(こいでさぶろう)

1908(明治41)年大阪東区に生まれる。小出卓二の弟。1925(大正14)年大阪府立天王寺中学校卒業(28回生)。大阪美術学校に入学後、退学して信濃橋洋画研究所に学ぶ。1937(昭和12)年独立美術協会展に初入選。以後毎年出品。1940(昭和15)年独立美術賞を受ける。

1947(昭和22)年独立美術協会会員となる。全関西美術協会会員。1967(昭和42)年没(17)。

所蔵している作品は次の1点である。

「八瀬の夕暮」92.0×117.0 洋画 キャンバス油彩

1952(昭和27)年10月22日受け入れ。本人寄贈。

4.6 田川勤次(たがわ・きんじ)

1909(明治42)年大阪に生まれる。赤松麟作塾の田川寛一の指導を受ける。1926(大正15)年第4回春陽会展に入選。1936(昭和11)年第14回春陽展にて春陽会賞受賞。

1942(昭和17)年と翌年、文部省主催「新文展」に入選。1947(昭和22)年春陽会会員となる。1948(昭和23)年汎美術協会を関西中心に創立して活動。1981(昭和56)年文化功労者として大阪府より表彰される。また文化功労者として大阪市より市民表彰を受賞

した。2004（平成16）年没(25)、(26)。

所蔵しているのは次の2点である。

(1)「花と果実」33.3×23.0 洋画 キャンバス油彩

1951（昭和26）年12月11日受け入れ。小谷茂寄贈。

(2)「静物(ボンカン)」20.5×27.0 洋画 キャンバス油彩

1952（昭和27）年6月9日受け入れ。小谷茂子寄贈。

なお1951(昭和26)年の毎日新聞の学芸欄にボンカンのカットがある(27)。

4.7 光岡 亮(みつおか・りょう)

1918(大正7)年 中国大連生まれ。京都市立絵画専門学校を卒業し、研究科を1936(昭和11)年修了後、1940(昭和15)年奉祝展に初入選。1946(昭和21)年日美展入選以来10回入選。1957(昭和32)年「春塔社」池田遥邨に師事。1968(昭和43)年から日春展連続3回入選、1969(昭和44)年から改組日展に連続3回入選。1971(昭和46)年関西展審査員、京展で活躍した。大阪在住(28)。

所蔵しているのは次の2点である。

(1)「少女」66.0×41.0 日本画 紙本淡彩 額装

1954(昭和29)年10月7日受け入れ。本人寄贈。

(2)「暮れ行く」53.5×65.5 日本画 紙本淡彩 額装

1957(昭和32)年11月30日受け入れ。本人寄贈。

4.8 三橋義澄

作家に関する情報はない。作品はかつて児童室にかけられていた。

「母と子 勉強」70.0×79.5 洋画 キャンバス油彩

1956(昭和31)年7月3日受け入れ。本人寄贈

5. 図書館の風景を描いた画家

重要文化財の中之島図書館は中之島周辺の環境と調和し、絵画の対象としても描かれている。当館に寄贈されたものにも図書館やその周辺を描いたものがある。

5.1 鈴木武志(すずき・たけし)

1895（明治 28）年福島県生まれ。太平洋画会研究所、アカデミー・ジュリアンに学ぶ。中村不折に師事。太平洋美術会参与。1978（昭和 53）年没(2)。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「中之島風景」45.5×53.0 洋画 キャンバス油彩

1954（昭和 29）年 1 月 17 日受け入れ。本人寄贈。

5.2 大泉米吉（おおいずみ・よねきち）

個展について報道する毎日新聞の記事(29)によると、1979（昭和 54）年 7 月の記事の時点で 69 歳なので、1910（明治 43）年生まれということになる。宮城県に生まれ、埼玉県浦和市育ち。1931（昭和 6 年）年東京美術学校を卒業後和歌山県、新潟県、東京都、鹿児島県の旧制中学で 1948（昭和 23）年まで美術の教師として勤務し、東京に帰る途中に大阪で途中下車し、大阪が気に入って住み着いたという。府庁に勤務し、府のポスターや出版物にカットや挿絵を描いていた。10 数年前に府庁を退職し、画家として独立したということである。

風景画家で 1979（昭和 54）年に大阪百景展を開いた。毎日新聞がこれを機に十景を選び紙面化した。1980（昭和 55）年、毎日新聞社大阪社会部が「大泉米吉作品集 大阪十二景」（絵葉書）(30)を発行している。その中には所蔵作品とは違う作品であるが、中之島図書館が描かれている。

所蔵している作品は次の 1 点である。

「府立図書館」31.0×39.0 洋画 キャンバス油彩

1972（昭和 47）年 4 月 24 日受け入れ。本人寄贈。

5.3 深谷 徹（ふかや・てつ）

1913（大正 2）年群馬県前橋市生まれ。本名は徹（とおる）。群馬師範学校卒。1953（昭和 28）年から 2 年間渡仏し、アカデミー・グラン・シュミエール、スペインのマドリッド美術学校に学ぶ。帰国後、創元会展に出品、同会常任委員。1952（昭和 27）年日展で《鳥かごのある静物》が特選。1965（昭和 40）年《集落》が菊華賞。日展評議員。国際具象派美術展にも出品。1992（平成 4）年没(2)。

所蔵しているのは次の 2 作品である。このほか商工資料館落成の際に描かれたペン画と思われるものが現物は所在不明であるが、写真として残されている。

(1)「中之島図書館」24.4×34.7 洋画 紙本水彩

受け入れ時期不明。本人寄贈。

(2)「マドリッドの街角」90.8×116.8 洋画 キャンバス油彩

1960(昭和35)年5月21日受け入れ。本人寄贈。

5.4 萩森久朗(はぎもり・ひさお)

1913(大正2)年三重県生まれ。大阪美術学校卒。カンサス美大卒業。斎藤与里に師事する。元律動美創立会員。二紀賞2回受賞。他に4回受賞(31)。

所蔵しているのは次の1点である。

「図書館付近」37.5×45.0 洋画 キャンバス油彩

1954(昭和29)年3月2日受け入れ。本人寄贈。

6. 肖像画を描いた画家

肖像画は注文によりかかれる場合が多い。その他、画家と描かれる対象の人物の間に何らかの関係があることが多い。

6.1 伊藤快彦(いとう・よしひこ)

1867(慶応3)年京都洛東若王子の神官の家に生まれた。1884(明治14)年田村宗立に師事。1888(明治21)年京都府画学校を卒業する。同年上京し小山正太郎につくが原田直次郎の画塾鐘美館に転じる。初期明治美術会展に出品。1892(明治25)年京都に帰り、家塾鐘美会を起す。1897(明治30)年京都美術協会に入り、以後京都の新古美術展に出品し、同年「農家蓄馬図」で三等賞を得たのをはじめ、しばしば受賞、審査員も勤める。1901(明治34)年関西美術会の結成に発起人として参加、同会の主要作家として出品を続ける。1905(明治38)年関西美術院創設発起人となり、翌年開院後教授となる。浅井忠没後、中沢岩太、鹿子木孟郎について関西美術院長に就任。1936(昭和11)年までその職にあった。早くから風俗画を中心とした人物表現を得意とし、代表作に「少女」、「鷹匠図」等がある。関西洋画壇振興に尽力した功績は大きい。1942(昭和17)年没(1)。

次の1点を所蔵している。

「今井館長」65.0×55.0 洋画 キャンバス油彩 1928(昭和3)年

1928(昭和3)年5月20日受け入れ

館長就任 25 周年を記念して製作された。『中之島百年 大阪府立図書館のあゆみ』(32)によると創立 25 周年記念式典と同じ日に大阪ビルディング 8 階ホールで今井館長在職 25 周年記念会が開催されている。この会は経費の関係で創立 25 周年の記念祝賀会が見合わせられると聞いた有志が発起人をつのり、681 人の賛同者を得、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社からそれぞれ 300 円の寄付を得て開催に至っている。伊藤快彦の手による油絵肖像画を本人及び当館用に二部製作することが決まり、祝賀会当日贈呈されている。

6.2 矢野彩仙(やの・さいせん)

1899(明治 32)年に鹿児島城下に生まれ、本名は盛経という。矢野氏の祖先は藤原姓で、のち薩摩の島津家に仕えて 3 万石といわれる矢野出羽守の直系の後裔。母方の関家は備中国新見城主の分家で、その子孫には島津斉彬の信望厚かった学者関勇助があり、西郷隆盛や大久保利通などがその門人であった。若くして徳富蘇峰について国史と国文学を修め、歴史学者として知られ、著者には「日羅上人伝」や「芦北郡史」などがあり、また九州における古い石橋の研究者としてその数千枚の原稿も残っている。油絵については、鹿児島の洋画家大牟礼南涛氏について学び、特に肖像画が得意であった。1969(昭和 44)年没(33)。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「日羅公」197.0×134.0 洋画 キャンバス油彩

1958(昭和 33)年 5 月 11 日受け入れ。日羅公薫績顕彰会会長 吉房一雄寄贈。

『大阪府史』(34)によると、日本書紀に記載があると記述されており、その内容は次のとおりである。日羅は 583(敏達 12)年、朝廷の招きにより百済から来日した。肥後の葦北の国造の子であるが、百済の朝廷に仕えて高官(百済の官位 16 階の第 2 位の達率)となった人物であり、新羅に滅ぼされた任那復興の方策をたてるためであったとされる。百済の政略について述べたことから百済人の徳爾らにより暗殺された。

日羅公之碑が大阪市北区天満橋 2 丁目に建てられている。

6.3 竹中 郁(たけなか・いく)

1904(明治 37)年神戸市に生まれる。兵庫県立第二神戸中学(現兵庫高校)在学中に北原白秋主催の「言葉と音楽」誌に初めて詩が掲載され、関西学院在学中に詩集「黄蜂と花粉」を刊行した。1928(昭和 3 年)から 2 年間ヨーロッパ各地を歩き、「詩と詩論」、「四季」な

どに作品を発表。戦後は児童詩誌「きりん」に力を注いだ。1982（昭和 57）年没⁽³⁵⁾。神戸二中では洋画家小磯良平と同級になり、画家を志すも父の反対にあい、詩作に転じている。鍋井克之とも交流があり、1951（昭和 26）年に彼が座長をした風流座に竹中郁が参加している⁽³⁶⁾。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「ブランデン氏の肖像」35.3×24.5 紙本パステル

1980（昭和 55）年 12 月 3 日受け入れ。本人寄贈。

ブランデン氏は、エドモンド・C・ブランデン（Edmund C. Blunden）で中村祐吉館長が東京帝国大学在学中の 1924（大正 13）年に教授として来日し教鞭をとった。1927（昭和 2）年に帰英、戦後の 1948（昭和 23）年、イギリス文化使節として来日。当時イギリスの一流の詩人で、批評家としてもタイムズ文芸欄の論説委員であった。日本各地で二年間に 600 回という講演を行っている。大阪では 1948（昭和 23）年 4 月 26 日大手前会館で「英文学の成長について」と題する講演を行っている。翌 27 日四天王寺本坊にて文人墨客 30 人あまりと交流。その中に竹中郁の名前もみえる。1959（昭和 34）年にも日本英文学会と英国文化振興会に招かれ、来日し、6 月 15 日大阪府文芸懇話会の主催で懇親会が新大阪ホテルで行われている。6 月 16 日付けの朝日新聞にも「大阪で語るブランデン氏」という記事があり、そのなかで、「かつての教え子大阪府立図書館長の中村祐吉氏や詩人の小野十三郎氏、竹中郁氏らとなごやかに握手をかわし、早くもなごやかな空気がみなぎりはじめた」との記述がみられる。ブランデン氏については中村祐吉著の『うらなり日記』上巻 27～29 章⁽³⁷⁾にくわしい。なお「図書館長の欧米旅日記」⁽³⁸⁾にはブランデン氏の写真も掲載されている。

6.4 千葉 緑

絵画の裏にフランス サロン・ドートンヌ会と書かれている。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「人物像（中村館長）」60.5×50.2 洋画 キャンバス油彩 1959（昭和 34）年

1959（昭和 34）年 5 月 11 日受け入れ。本人寄贈。

7. その他

大阪とのかかわりや作家本人に関することが現時点ではよくわからない作家に関するも

のをこの項に記載した。

7.1 奥田正治朗（おくだ・しょうじろう）

1901（明治 34）年三重県宇治山田市河崎町（現伊勢市）に生まれる。京都市立絵画専門学校に学び、1930（昭和 5）年同校研究科を修了。都路華香、西村五雲らに師事し、1938（昭和 13）年師が没した後、門下生の山口華楊が引き継いだ晨鳥（しんちょう）社に所属する。1926（大正 15）年の第 7 回帝展に「花園養蜂」が初入選して以後、帝展、日展に 24 回入選。「蒼苑」（昭和 30 年第 11 回日展）、「青柿」（昭和 33 年第 1 回新日展）などの代表作を出品し、日展会友となる。雅号正治良。1981（昭和 56）年没⁽³⁾。

所蔵しているのは次の 4 点である。

(1) 「青柿」 72.7×91.0 日本画 紙本彩色 額装 1958（昭和 33）年

第 1 回日展出品。同図録 113 頁に絵が掲載されている。

1959（昭和 34）年 7 月 28 日受け入れ。本人寄贈。

(2) 「花の図（蘭）1 本」 46.5×40.5 日本画 紙本彩色

1961（昭和 36）年 2 月 20 日受け入れ。本人寄贈。

(3) 「花の図（蘭）2 本」 38.0×44.0 日本画 紙本彩色

1961（昭和 36）年 2 月 20 日受け入れ。本人寄贈。

(4) 「花の図（紫陽花）」 40.5×46.5 日本画 紙本彩色

1961（昭和 36）年 2 月 20 日受け入れ。本人寄贈。

7.2 高橋惟一（たかはし・ゆういち）

1904（明治 37）年宮城県仙台市生まれ。流派はサロン・ドートンヌ、選抜秀作美術展。ヨーロッパ滞在 20 年に及び、成果をまとめて三越で作品展を開催した。個展により多くの作品を発表。1989（昭和 64）年没⁽³⁹⁾、⁽⁴⁰⁾。

所蔵しているのは次の 1 点である。

「山間風景」 38.0×45.5 洋画 キャンバス油彩

1956（昭和 31）年 8 月 22 日受け入れ。本人寄贈。

7.3 永井雨村

（不明）

所蔵しているのは次の1点である。

「山」88.0×94.0 日本画 紙本彩色 額装

1953(昭和28)年5月14日受け入れ。永井与吉寄贈。

参考文献

- (1) 『近代日本美術事典』講談社 1989年
- (2) 『20世紀物故洋画家事典』岩瀬/行雄・油井/一人編 美術年鑑社 1997年
- (3) 『20世紀物故日本画家事典』油井/一人編 美術年鑑社 1998年
- (4) 『住友春翠』 「住友春翠」編纂委員会編纂 1955年
- (5) 『浅井忠と関西美術院展』 府中市美術館、京都市美術館、京都新聞社 2006年
- (6) 『京都近代美術の継承 浅井忠からいざよいの人々へ』前川公秀著 京都新聞社 1996年 282頁～283頁
- (7) 『なにわづ 28号』 1966年8月3-4頁
- (8) 池田市歴史民俗資料館ホームページ
(<http://www.city.ikeda.osaka.jp/sisetu/rekisi/kaiga/ptaisui.htm>) 2007年10月24日
- (9) 『あしかび第二集』 大阪府文芸懇話会 1952年 32頁
- (10) 毎日新聞大阪版夕刊 昭和26年6月9日1面 「老兵は死なず 風俗画家 菅橋彦」(写真あり 一休の絵を前にして菅画伯)
- (11) 中村祐吉館長「お別れに当って」 『なにわづ 26号』 1966年4月 1、4頁
- (12) 『菅橋彦・生田花朝女名作展』 倉吉博物館 1979年
- (13) 『大阪繁盛記』新装・新訂版 鍋井克之著 東京布井出版 1994年 56頁挿絵解説
- (14) 『北野恒富展』 橋爪節也監修 東京ステーションギャラリー等 2003年
- (15) 『全国名前辞典』(http://fine-vn.com/cat_51/ent_9.html) 2007年10月31日
- (16) 『鍋井克之展』 田辺市立博物館 学芸員 三谷 渉編集、田辺市立博物館 2001年
- (17) 『生誕百年記念「鍋井克之」と旧制天王寺中学の画家たち』 産経新聞社 1989年の
図版20、巻末の旧制天王寺中学の画家たち 略歴
- (18) 『企画展「矢野橋村展 近代水墨画の精粹」図録』 枚方市教育委員会 2002年
- (19) 『モダニズムに香る、高雅な女性美。没後十周年 中村貞以展』 朝日新聞社 1991年
- (20) 『中村貞以 現代日本美人画全集 愛蔵普及版6』 関 千代執筆 集英社 1979年

(21) 備前市のホームページ

(<http://www.city.bizen.okayama.jp/kankou/guide/hinase/spot/hondo/kakonoura3.jsp>)

2007年10月24日

(22) 『大坂の書と絵と本 関西大学図書館所蔵』 関西大学図書館 1997年 61頁

(23) 毎日新聞大阪版 1951(昭和26)年5月22日夕刊4頁 「コント 花粉の役目」の挿絵
裸婦とゆりの花が描かれている。線画。

(24) 毎日新聞朝刊7版 1951(昭和26)年7月6日2頁 学藝「自立教育への道 下程勇吉」
のカット 帽子をかぶった男性が描かれている。

(25) 梅田画廊のホームページ (<http://www.umeda-garou.jp/artists/tagawakinnji.htm>)

2007年10月25日

(26) 毎日新聞大阪版 2004年8月29日号

(27) 毎日新聞大阪版昭和26年5月12日号7版2頁

(28) Yahooオークション - M10光岡亮作 画題 金魚

(<http://page8.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/h51517690>) 2008年1月4日

(29) 毎日新聞大阪版夕刊10面 1979年7月7日号

(30) 『大泉米吉作品集 大阪十二景』 アトリエ泉会 1980年

(31) 『芸術家年鑑1992』 日本美術出版 1992年

(32) 『中之島百年 大阪府立図書館のあゆみ』 大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行
委員会 2004年 127頁~128頁

(33) 鹿児島県立図書館の貴重書の紹介ホームページ

(<http://www.pref.kagoshima.jp/kentosh/shiryo/kityouitiran16-7.html>)

2007年10月25日

(34) 『大阪府史』第2巻 大阪府 1990年 237-242頁

(35) 毎日新聞大阪版夕刊 2003年3月7日号

(36) 『鍋井克之』 1966年 美術出版社発行

(37) 『うらなり日記』上巻 中村祐吉著 1982年 245-247頁、260-261頁

(38) 『図書館長の欧米旅日記(1950年代の国際交流)』 中村祐吉著 (社)日本図書館協
会内 『図書館長の欧米旅日記』刊行会 1985年 62頁

(39) 愛知県美術館コレクション検索ホームページ

(<http://search-art.aac.pref.aichi.jp/p/seisaku.php?AI=ART19970010>) (2007.12.26)

(40) 『日本美術家事典 1990年版』 オーアンドエムリミテッド 1989年

中之島図書館ビジネス支援サービス経過など（年表）

藤井 兼芳（中之島図書館）

はじめに

1996（平成8）年5月、蔵書約90万冊の総合図書館であった中之島図書館は、大阪府立中央図書館の開館を機に、大阪の地域資料、和漢の古典籍と人文・自然・社会科学等の一般図書を加えた約35万冊を所蔵する図書館としてリニューアルオープンした。当初から中央図書館との間に毎日連絡車を運行し、資料の取り寄せを行い、中之島図書館が窓口となって中央図書館の資料が利用できる体制を整えた。所蔵資料に加え中央図書館から資料の取り寄せることで、ある程度は蔵書の薄さをカバーできたが、図書館利用者にとっては魅力に欠けるところがあったようである。

2005（平成15）年、リニューアルオープンから8年が経過し中之島図書館は内外の要因から課題に直面した。内部では中之島図書館自体の予算面、建物からの制約、ビジネス街にある中之島という立地条件等であり、外部では府立中央図書館のサービス体制の定着、府内の公共図書館、図書室の充実、更には類縁機関の新設・廃止等の変化であり、社会経済的变化もこれに加えることができる。この内外の要因を受けてあるべき図書館サービスとは何かについて、検討を迫られたのである。この年、従来のサービス体制を検討するため、利用者アンケートを実施し利用者の要望を聞くこととなった。その結果館内の検討委員会を踏まえた決定は、一般資料を廃止し、新たにビジネス支援を立ち上げ、大阪資料・古典籍とビジネス支援の2つのサービスに特化するという運営方針の変更であった。

ビジネス支援サービスを始めるに際し、資料関係の整備（収集方針の決定・中央図書館への移管・寄贈依頼）、場所の整備（排架変更、改装工事）などがあり、サービス開始後はビジネスセミナー・講演会・フェア開催、研修・ホームページメンテナンス・メールマガジン発行・ビジネス支援案内のパンフレット・ちらし作成等、その都度試行と模索の連続であった。またレファレンスサービスについては、益々高度化する質問に対応するため職員の自己研鑽は言うまでもないが、レファレンスツールの更新・整備を続けている。

ビジネス支援サービスを開始して、3年11ヶ月が経過した。中之島図書館100余年の歴史から見るとほんのわずかな期間であるが、この間の変化は激しく、大きい。図書館におけるビジネス支援サービスについての評価等は今より長いスパンで考えるとして、この間実践してきた様々な事柄を、このサービスに当初から関わった者として総括しておきたいとの気持ちから纏めてみたのが今回の年表である。

ビジネス支援サービス開始時点の館長始め事務職全員が異動で変わり、比較的異動の少ない専門職（司書）も、3年11ヶ月の間に部長、課長とも各3人目、課員も何人かが異動している。ビジネス支援サービス開始に賭けた課員たちの熱い思いや、日々努力してきたことが記録や記憶に残り、受け継がれ、後輩たちがビジネス支援への方針変更を確かなものとしてくれることを願っている。

凡例

ビジネス支援サービス関連を年代順に記した。 印は利用者配布物。
 移管については平成 15 年度からの書類上の日付を記し、ビジネス支援関連と限定していない。
 ホームページ更新、メールマガジン各号については省いた。マスコミに取り上げられた事項は別表とした。

年	月	事 項
2002 (平成 14)	2	利用者アンケート調査 2002/2/5～2/10
	10	中之島図書館のビジネス支援機能あり方検討会 第 1 回 2002/10/18
	11	大阪府立中之島図書館の社会人ニーズに対応した機能充実に関するアンケート調査 インターネットアンケート インテリジェントアレー協議会参加企業社員対象
	12	利用者公開用インターネット端末に関するアンケート 都道府県立図書館対象 インターネットガイドライン検討委員会 2002/12/8
	12	中之島図書館のビジネス支援機能あり方検討会 第 2 回 2002/12/17
2003 (平成 15)	1	中之島図書館のビジネス支援機能あり方検討会 第 3 回 2003/1/24
	2	報道提供「中之島図書館に平成 16 年度当初ビジネス支援室(仮称)を開設 15 年度予算案額 47,484 千円うち資料費 1200 万円
	3	大阪商工会議所 商工図書館閉館
	3	フィルタリングソフト導入に関する資料 2003/3/19
	3	中之島図書館のビジネス支援機能あり方検討調査報告書 大阪府政策室 (調査委託:(株)ダン計画研究所)
	4	(当初予算)ビジネス支援図書館機能整備事業費 47,484 千円
	4	大阪府立中之島図書館ビジネス支援構想館長説明会 2回にわけ司書部全員 2003/4/11
	4	日経テレコン((レファレンス用 相談カウンターで利用))
	5	ビジネス支援機能実現化プロジェクトチーム(仮称)発足
	5	蔵書点検 2003/5/12～5/22
	5	(第 3 期)デジタルライブラリアン講習会 1 名参加
	5	大阪日日新聞(S23～58)同社より寄贈受
	6	寄贈担当者の話し合い 2003/6/27 業界新聞寄贈依頼作業(以後随時) ビジネス関係雑誌寄贈依頼作業(以後随時)
	7	大阪府立中之島図書館におけるビジネス支援機能に関する指針およびサービス要綱(試案) ビジネス支援機能プロジェクトチーム (同 8、9 月、試案修正し発行)
	7	大阪府立中之島図書館拡大司書部連絡会 平成 16 年度ビジネス支援サービス開始にむけての説明 2003/7/31
	8	大阪府立図書館インターネット端末の設置及び利用に関する方針 2003/8/1
	8	中央から中之島へ移管希望資料(案) 約 9000 冊
	9	ビジネス資料の本格的購入開始 1200 万円分発注リスト作成
	9	「大阪府立中之島図書館におけるビジネス支援機能に関する指針およびサービス要綱」
	9	朝日 DNA 3 ヶ月限定テスト

年	月	事 項
	9	中之島図書館周辺のビジネス環境現況調査の方法と資料作成イメージ ダン計画研究所 2003/9/19
	9	移管 中之島から中央へ 6750 冊 洋書遡及分 2003/9/26
	10	～11 ビジネス支援機能の充実に向けての司書部ヒアリング
	10	ビジネス関係資料選択基準ならびに実務要領(案) ビジネス支援非参考図書収集資料詳細(案)
	11	図書館別館 大学院サテライト教室工事開始 2003/11/10～2004/3/10
	11	ビジネス支援機能充実にむけての計画 2003/11/20 案
	11	平成 15 年度に移管を希望する資料リスト 約 5000 冊 中之島から中央へ約 5000 冊
	11	参考事務取扱要領改定案
	11	16 年度逐次刊行物のみなおし ビジネス雑誌購入候補一覧(案)
	11	「中之島図書館のあり方を考える」ワークショップ第1回 2003/11/20
	11	ビジネス調査ガイドについて(案) 2003/11/25
	12	移管前作業 書庫内移動
	12	デジタル情報室の利用に関する方針(案)
	12	「中之島図書館のあり方を考える」ワークショップ第2回 2003/12/18
	12	「大阪府立中之島図書館におけるビジネス支援機能のための調査報告書」ダン計画研究所
2004 (平成 16)	1	一般資料室(一般2,3,よみもの)休室 ビジネス支援準備作業 2004/1/14～17
	1	自習室改修工事 (デジタル情報室設置)
	2	ビジネス関係資料選択基準ならびに実務要領類縁機関調査(16 機関訪問)2004/1/28～2/19
	2	近畿地区 図書館地区別研修 講演「今なぜビジネス支援か」 講演「図書館におけるビジネス支援」・ワークショップ 参加
	2	ビジネス支援サービスホームページ(案) 2004/2/25
	2	開館百周年記念式典を開催 2004/2/29
	3	移管 中央から中之島へ 2800 冊 2004/3/12
	3	大阪府立中之島図書館資料収集方針改定 2004/3/16
	3	ビジネス資料室準備作業 閲覧室配置換え 2004/3/16～31 一般資料室1をビジネス資料室1に名称変更 雑誌架の撤去、参考書架の増設、OPACの移動、カウンター整備 (登録・相談カウンター新設) 一般資料室2をビジネス資料室2に名称変更 (0～4 門が排架されていた) 雑誌コーナー設置、3・5・6 門の変更。0～2 門書庫入れ 007,3・5・6、アジア開発銀行(ADBレポート)、現行法規総覧、雑誌を設置 寄託(中央から中之島に変更移動、以後継続) 一般資料室3をビジネス資料室3に名称変更 (5～9 門、現行法規総覧が排架されていた) 社史コーナー設置 0～2、4、7～9 の変更書庫入れ 中央より社史移管 一般資料室4をビジネス資料室4に名称変更

年	月	事 項
	3	小説書庫入れ 官報、住宅地図排架 デジタル情報室設置、設定作業 ノートンゴースト ファイアーウォール設定
	3	移管 中之島から中央へ 5200 冊 2004/3/19
	3	移管 中央から中之島へ 244 冊 金融ビジネスなど 2004/3/23
	3	移管 中央から中之島へ 2173 冊 ADB 寄託資料など 2004/3/23
	3	移管 中之島から中央へ 112 冊 テアトロなど 2004/3/26
	4	(当初予算)ビジネス支援図書館機能整備事業費 22,666 千円
	4	大阪府立中之島図書館資料収集方針施行 2004/4/1
	4	大阪府立中之島図書館ビジネス関係資料選択基準ならびに実務要領施行 2004/4/1
		大阪府立中之島図書館デジタル情報室利用規程施行 2004/4/1
		大阪府立中之島図書館インターネット端末利用要綱施行 2004/4/1
	4	ビジネス支援サービスを開始 ビジネス支援関連資料費(計画額)15,782 千円 デジタル情報室(利用者提供の主なデータベース) 日経テレコン 21 聞蔵朝日DNA ヨミダス文書館 NICHIGAI/WEBサービス 国際ビジネスサポートサービス 判例体系CD-ROM
	4	TKC 経営指標 CD-ROM 寄贈受(デジタル情報室で提供)
	4	官報情報検索サービス(レファレンス用 相談カウンターで利用)
	4	中之島図書館所蔵住宅地図一覧発行(以後随時) 中之島図書館所蔵ブルーマップ発行(以後随時) なかのしまとしょかんのしんぶん発行(以後随時) 調査ガイド発行(以後随時) 企業情報をしらべるには 2004.4.1 法令のしらべ方 2004.4.1 大阪の名簿・名鑑 2004.4.1 府内市町村の広報・市勢要覧・統計書リスト 2004.4.1
	4	別館にサテライト大学院(神戸大学・関西大学)開講
	4	移管 中央から中之島へ 96 冊 旬刊商事法務など 2004/4/20
	4	移管 中之島から中央へ 1052 冊 Japan Times など 2004/4/23
	5	「中小企業庁政策情報提供事業」に登録(以後、中小企業庁発行の冊子、パンフレット受)
	5	(第4期)デジタルライブラリアン講習会1名参加
	5	証券図書室 雑誌、新聞過去分寄贈受(以後継続)
	6	業務用ファイルサーバー導入(中央、中之島)
	6	調査ガイド デジタル情報室のオンラインデータベースの使い方 附:『判例体系』の使い方 2004.6.11 大阪の企業情報 2004.6.11
	7	第1回ビジネスセミナー「大阪の中小企業だからこそ。今！」 2004/7/28 佐藤修氏(大阪府中小企業支援センタープロジェクトマネージャー) 28 名

年	月	事 項
	8	調査ガイド 大阪の名簿 2004.8.13 大阪の商工名鑑・商工会議所名簿 2004.8.13
	9	蔵書点検 9/28～10/12 デジタル情報室 ノートパソコン 20 台入れ替え デスクトップタイプへ ドライブシールド導入
	9	中之島図書館利用者アンケート 2004/9/14～19
	10	(利用者登録時、証明不十分時)次回証明シール貼り付け開始
	10	移管 中之島から中央へ 159 冊 2004/10/12
	10	第 2 回ビジネスセミナー「対中国ビジネス実践の智慧」 2004/10/14 38 名 加納勲氏(旭東電気株式会社代表取締役副社長) 石川正氏(大江橋法律事務所弁護士)
	10	兵庫県立図書館 図書館・公民館職員等研修会 2004/10/15 「ビジネス支援を始めて」報告
	10	調査ガイド 統計情報を調べるには(基礎統計編) 2004.10.22 新聞記事を検索する 2004.10.22
	11	日本図書館研究会 図書館奉仕 & 情報システム研究グループ合同例会 2004/11/23 「動きだした中之島図書館のビジネス支援サービス」発表
	11	大阪公共図書館協会大会記念講演 「公共図書館におけるビジネス支援(竹内利明)」 2004/11/30
	12	大証寄贈マイクロ(有価証券マイクロフィルム S24～H13)運び込み 2004/12/7
	12	第 3 回ビジネスセミナー「知的財産の活用で事業に活力を！」 2004/12/7 久保浩三氏(奈良先端科学技術大学院大学教授) 25 名
2005 (平成 17)	1	移管 中央から中之島へ 830 冊 2004/1/4 日経文庫など
	1	レクシスネクシス試行 2005/1/6～3/31
	1	調査ガイド 判例を調べる 2005.1.18 大阪のビジネス雑誌 経済・商業編 2005.1.18
	1	平成 16 年度第 2 回 OLA 研修「中之島図書館におけるビジネス支援 その経過と課題」 29 館 31 名参加 2005/1/28
	2	第 4 回ビジネスセミナー「ベンチャーで起業する」 2005/2/2 文能照之氏(近畿大学経営学部助教授) 34 名
	3	調査ガイド 大阪の雑誌 トレンディ情報編 2005.3.1
	3	移管 中央から中之島へ 107 冊 株価総覧など 2004/3/4
	3	移管 中之島から中央へ 258 冊 弥生土器の様式と編年ほか 2005/3/10
	3	デジタル情報室利用 2 万人越え
	3	第 5 回ビジネスセミナー「企業経営と B/S[貸借対照表]、P/L[損益計算書]」 2005/3/24 小島浄氏(新日本監査法人顧問) 38 名

年	月	事 項
	3	利用者用食堂廃止
	4	ビジネス支援図書館機能推進事業費 17,849 千円
	4	課名変更 一般資料課をビジネス支援課 大阪資料課を大阪資料・古典籍課
	4	利用者用休憩室に自販機追加 職員会議室(旧職員食堂)を利用者用休憩室に変更 工事等 2005/3/31～4/18
	4	デジタル情報室 日経テレコン 21 聞蔵朝日DNA ヨミダス文書館 MAGAZINEPLUS JRS経営情報サービス(国際ビジネスサポートサービスの提供を終了、変更) レクシス・ネクシス 判例体系CD-ROM
	6	移管 中之島から中央へ 2424 冊 洋書遡及 2005/6/8
	6	蔵書点検 2005/6/21～7/5 図書館システムリプレース デジタル情報室 ノートパソコンからデスクトップに 17 台変更 アジア開発銀行(ADBレポート)ビジネス資料室2から3へ移動(排架変更) 新聞室2の業界新聞を新聞室3(旧他館目録室)に移動 他館目録、書誌類は書庫入れ等 有価証券マイクロフィルムS24～H13 蔵書点検明け提供開始
	7	デジタル室PCのword、excel削除、同ビューアインストール。
	7	「Web 複写サービス」(インターネットからの複写申込サービス)開始 2005/7/6
	7	調査ガイド 大阪の条例 2005.7.20
	7	第1回ビジネスセミナー 「ベトナム投資を成功させるには - 中国・ASEAN から見たベトナム」 2005/7/21 中矢一虎氏(国際経営法務コンサルタント事務所代表・大阪市立大学商学部講師) 26 名
	8	中之島図書館百周年記念事業 ビジネス基礎講座 39 名 2005/8/20～21 ・会社の仕組み 設立手続きから会社運営まで 渡辺隆文氏(ウイン総合法律事務所 弁護士・公認会計士) ・ビジネスプランの立て方 鈴木邦明氏((株)イーサーブ代表取締役 公認会計士) ・ベンチャー企業のマーケティング入門 岡本充智氏((株)パワー・インタラクティブ代表取締役) ・創業時の管理の基礎知識 経理事務、計数管理 梅田浩章氏((株)イーサーブ 公認会計士)
	8	持ち込み PC 電源席(デジタル情報室に5席)設置 2005/8/2
	9	調査ガイド 大阪の航空写真 2005.9.3
	9	聞蔵 DNAforL リニューアル 2005/9/6 設定
	9	調査ガイド アジア開発銀行(ADB:Asian Development Bank)寄託資料 2005.9.11
	9	中之島メールマガジン発行(以後随時) 2005/9/13
	9	新聞室1、3資料入れ替え (8月にMJ等切取多発。新聞1に業界新聞、新聞3に当日分5大紙を排架変更)
	10	開館日・開館時間の変更 2005/10/1

年	月	事 項
	10	(毎週の休館日の日曜日への変更、平日の開館時間の1時間延長等) 書庫出納、マイクロフィルム出納、デジタル情報室利用受付、複写申込み等を 閉館30分前を確保
	10	第2回ビジネスセミナー「私の開店物語 ～20代30代でお店をもとう～」 2005/10/4 小西信行氏(鮎処こに志店主) 山田悦央氏(商い繁盛館総合アドバイザー) 28名
	10	館内 OPAC からの予約受付開始(2005/10/11)
	11	調査ガイド 文献を探す(基礎篇) 2005.11.10
	11	デジタル室PCバイオスチューニング(FD, USB, DVD/CD利用不可とする)2005/11/16
	11	神戸医療経営学研究会(神戸医療経営学研究会と共催) 2005/11/12
	11	第3回ビジネスセミナー「夢をかたちに! ～熱い思いが仕事を創る～」 2005/11/22 松田壽美子氏((株)ジェイセクション) 25名
2006	1	インターネットからのセルフ予約サービス開始(2006/1/5)
(平成18)	1	調査ガイド 地図のしらべかた(基本編) 2006.1.5 業界・市場動向のしらべかた 2006.1.20 地価を知る資料 2006.1.30
	2	ブルーマップ書庫出納方式に変更(1月中央区ブルーマップ行方不明)
	2	日経テレコン操作研修(職員対象) (OLA 参考業務基本研修を兼ねる) 2006/2/9
	2	持ち込み PC 電源席(デジタル情報室)3席増設 2006/2/10
	2	移管 中之島から中央へ 2350冊 考えるためになど 2006/2/14
	2	移管 中央から中之島へ 689冊 全国地方銀行協会五十年史など 2006/2/16
	2	第4回ビジネスセミナー「ネットショップをはじめてみませんか」 2006/2/23 原田 奈美子氏(ウエディングドレス工房 てくまりんぼ取締役社長) 北口 祐規子氏(大阪府中小企業支援センター サブマネージャー) 67名
	3	移管 中之島から中央へ 8883冊 洋書データ入力済分 2006/3/6
	3	移管 中央から中之島へ 261冊 国勢調査など 2004/3/6
	3	移管 中之島から中央へ 10553冊 年次別論文集など 2006/3/8
	3	調査ガイド ビジネス関連の人物情報を探す 2006.3.27
	4	政策立案支援サービス(府立図書館)開始 窓口:中央図書館
	4	ビジネス支援図書館機能推進事業費 19,662千円
	4	課名変更 資料情報課を企画情報課
	4	デジタル情報室 日経テレコン 21 聞蔵 ビジュアル ヨミダス文書館 毎日Newsパック MAGAZINE PLUS レクシス・ネクシス レクシス・ネクシスJP法情報 (判例体系CD-ROMの提供を終了、変更) 朝日中央インターネット総合ライブラリー (JRS経営情報サービスの提供を終了、変更)

年	月	事 項
	5	調査ガイド 大阪の地名を調べるには 2006.5.25
	5	蔵書点検(5/11～24) CSRコーナー設置 企業の社会的責任 corporate social responsibility (職員、嘱託向等)図書館ツアー実施
	6	(国立国会図書館)全国新聞総合目録データベースへ追加修正データを送付 2006/6/22
	7	図書館雑誌 2006年7月号 「れふぁれんす三題噺・131 商売繁盛のお手伝い-商都大阪のビジネス支援」事例報告
	7	CD-EYES50 導入 相談カウンター前のPCで提供
	7	第1回ビジネスセミナー「ネットショップをはじめてみませんか・2」 48名 2006/7/26 中西光司氏(手芸屋ドットコム店主) 北口 祐規子氏(大阪府中小企業支援センター サブマネージャー)
	8	現行法規総覧ビジネス3から4へ移動(あとに雑誌)、S30年代官報を書庫へ
	8	メールマガジアンケート2006/8/15～9/15
	9	中之島図書館百周年記念ビジネス講座 82名 「大阪経済の現況と今後 - 阪急・阪神統合の効果と阪神タイガース - 」 2006/9/2 國定浩一氏(大阪学院大学企業情報学部 教授)
	9	調査ガイド 中之島図書館について調べるには 2006.9.15
	9	労働情報センターより官報(製本済み)寄贈受(以後、確認・差し替え作業) 2006/9/22
	9	大阪経済・労働白書説明会(大阪府立産業開発研究所と共催 2006/9/26)
	9	大阪府立中之島図書館の利用に関するアンケート(2006/9/25～30) 大阪市立大学と共同調査
	9	第2回ビジネスセミナー「創業に知って得する法律」 67名 2006/9/27 関根幹雄氏(関根法律事務所弁護士)
	10	調査ガイド 白書を使って調べる 2006.10.1
	11	府立図書館蔵書目録(累積版冊子体)移動 相談カウンターから蔵書検索室へ 2007/11/9
	11	中之島図書館百周年記念ビジネス講座 42名 2006/11/18 「集客観光都市大阪 - 地域独自の生活文化に根ざした大阪ブランドの創出を！」 野杓育郎(のいりいくろう)氏(「なにわ名物開発研究会」代表幹事)
	12	(第3回ビジネスセミナー)ビジネスサポートフェア in 中之島図書館 385名 2006/12/7～9
	12	住宅地図昭和30～40年代複製分排架(書庫出納方式から変更)
2007 (平成19)	1	地方新聞閲覧開始(於新聞室3)(府文化情報センターで利用後、再利用 地方新聞48種)
	1	ビジネスセミナー等主催事業に使用するPC購入(事業等で利用)2007/1/15
	1	日本図書館研究会図書館奉仕&情報システム研究グループ合同例会 2007/1/21 「大阪府立中之島図書館におけるビジネス支援の現状について」報告

年	月	事 項
	2	レクシスネクシスJP法情報操作研修(職員対象) (OLA 参考業務実務研修を兼ねる) 2007/2/8
	3	デジタル情報室 満席で青少年用端末が空いている場合の運用 2007/3/26
	3	ビジネス支援パンフレット作成 20000部(一部14円) ビジネス支援3年経過し、初めての業者印刷によるパンフレット作成
	3	第4回ビジネスセミナー「フィルムコミッショナーの仕事」 79名 2007/3/17 田中まこ氏(神戸フィルムオフィス 代表) 大野聡氏(大阪ロケーションサービス協議会)
	4	ビジネス支援図書館機能推進事業費 17,530千円
	4	寄贈依頼事務(含欠号依頼)分担変更(企画情報課から各課担当)
	4	(ダイヤモンド社より)社史寄贈受 ダンボール 120箱分届く 2007/4/12
	5	蔵書点検(2007/5/10~23) (新聞室2)マイクロキャビネットレイアウト変更、有価証券閲覧専用PC廃止 (デジタル情報室)利用者用インターネット用PC1台増設 (職員対象)間蔵 操作研修 (4月転入職員、4月からの新規嘱託等対象)図書館ツアー実施 開架雑誌タイトル数を増やす CSR、ADBレポート等書架変更 寄贈社史受入作業開始
	5	利用者用インターネットPC1台追加 全28台(うち1台は青少年用) 2007/5/24
	6	社史寄贈のダイヤモンド社へ感謝状
	7	CD-EYES50 更新
	7	移管 中之島から中央へ 27冊 2007/7/11
	7	デジタル情報室 インターネット使用時間一人一回一時間 待ち無しの場合継続利用可 2007/07/23
	7	日本薬業新聞廃刊に伴いバックナンバー(1946~2007.6.12)寄贈受
	7	第1回ビジネスセミナー「ネットショップをはじめてみませんか・3」 2007/7/25 87名 石尾千恵氏(株式会社チェリッシュ代表取締役) 北口祐規子氏(大阪府中小企業支援センター サブマネージャー)
	7	メールマガジン 50号 2007/7/4
	8	書庫移動の前作業 2号庫2階にあった消耗品費購入雑誌等(週刊金曜日、週刊ポスト等)廃棄
	9	書庫移動 (5、3門増加分確保のため) 3号庫2階の新書・文庫を2号庫2階へ 3号庫1階の4門を3号庫2階
	9	調査ガイド 大阪のビジネス支援機関 2007/9/7
	9	開架雑誌業種別リスト発行
	10	業界新聞寄贈依頼(集中的に作業実施 157社へ依頼) :2007/10/1 現在業界新聞 158タイトル
	10	第2回ビジネスセミナー「企業買収時代の日本経済」 2007/10/27 72名 坪井賢一氏(株式会社ダイヤモンド社取締役雑誌編集局長)

年	月	事項
	10	大阪経済・労働白書説明会(大阪府立産業開発研究所と共催) 30名 2007/10/29 須永務氏(大阪府立産業開発研究所主任研究員) 田中宏昌氏(大阪府立産業開発研究所研究員)
	10	第93回全国図書館大会 22分科会 「大阪府立中之島図書館のビジネス支援について」事例発表 2007/10/30
	11	マイドームおおさか開館20周年記念 「中小企業サポートフェア」に参加(専用ブース) 2007/11/1
	11	産業開発研究所より社史123冊寄贈受 2007/11/1
	11	経営者・ビジネスマンが知っておきたい知的財産権の基礎知識 (大阪府立特許情報センターと共催) 54名 2007/11/1 今井由喜夫氏(大阪府立特許情報センター特許情報活用支援アドバイザー)
	11	旧大阪女子大学より椅子48机8貫い受け デジタル情報室電源席8席分更新 2007/11/8
	12	なかのしまとしゃかのしんぶん(小冊子版)発行(以後随時) 2007/12/5 現在業界新聞241タイトル
	12	中小企業新事業活動促進法に基づく経営革新 (大阪府商工連合会と共催) 24名 2007/12/10
	12	第3回ビジネスセミナー「超入門! わかりやすい決算書の読み方・使い方」 67名 2007/12/12 松中吉喜氏(中小企業診断士)
	12	ダイヤモンド社寄贈社史受入作業終了1098冊(整理のため中央へ順次送付) 残り分社史 府立中央図書館希望分646冊送付 鳥取県立図書館希望分407冊送付 全国の府県立図書館に寄贈希望よびかけメール送付 2007/12/12 2007/12/28 現在 17府県371冊送付
2008 (平成18)	1	デジタル情報室利用者延べ10万人を超える 2008/1/7
	1	新聞博物館新聞ライブラリーより大阪日日新聞(合本製本済)83冊寄贈受け 2008/1/17
	2	第4回ビジネスセミナー「日本と関西のビジネス環境の現状と展望」 65名 2008/2/16 吉本澄司氏(日本総合研究所関西経済研究センター所長)
	2	日本合成繊維新聞 合本製本済20冊、縮刷版28冊寄贈受け (昭32.11.13～廃刊まで) 2008/2/14

テレビ

年	月	事項
2004	4	NHK かんさいニュース1番 2004/4/13 「ビジネス図書館に変身」「図書館に大学院オープン」
2007	7	読売新聞 CS放送「G+」 読売ザKANSAI 2007/7/3 ビジネス支援 ダイヤモンド社からの寄贈社史
2008	2	NHK大阪放送局地上デジタル放送のデータ放送 2008/2/4～11 大阪府立中之島図書館ビジネスセミナー～日本と関西のビジネス環境の現状と展望

Web マスコミ関係

年	月	事 項
2004	4	asahi.com IT時代の図書館「大阪・中之島図書館、4月に世紀の改装 ビジネス支援に重点」 2004/1/1 http://www.asahi.com/information/db/it_library1e.html
2007	6	asahi.com コミコミ口コミ「図書館はネット時代の情報コンシェルジュだ」 2007/6/15 http://www.asahi.com/komimi/TKY200705280362.html
2007	6	日経関西コンシェルジュ「公共図書館をビジネスに活用」 2007/6/15 http://kansai-concierge.nikkei.co.jp/kansai-special/index.asp?wrt_cd=6257&bk_p_no=0

新聞

年月日	新聞名	事 項
2004/1/1	朝日新聞 朝刊 1面	ビジネス支援への改装
2004/7/29	大阪日日新聞 20面	ビジネスセミナー(記事)大阪の中小企業だからこそ。今！(H16.7.28)
2004/10/1	読賣新聞 夕刊 不明	ビジネス支援(記事)ビジネス支援を実施している図書館の紹介
2004/11/22	毎日新聞 朝刊 9面	ビジネスセミナー(案内)経営にすぐに役立つ『知的財産権(H16.12.7)
2004/12/8	大阪日日新聞 20面	ビジネスセミナー(記事)知的財産の活用で事業に活力を！(H16.12.7)
2005/1/18	大阪日日新聞 20面	ビジネスセミナー(案内)ベンチャーで起業する(H17.2.2)
2005/8/7	毎日新聞 朝刊 7面	ビジネスセミナー(案内)創業のための基礎知識を教えます！(H17.8.20・21)
2005/10/19	日本経済新聞 夕刊 12面	ビジネスセミナー(案内)夢をかたちに！～熱い思いが仕事を創る(H17.11.22)
2005/11/2	日本経済新聞 夕刊 15面	ビジネスセミナー(案内)夢をかたちに！～熱い思いが仕事を創る(H17.11.22)
2005/11/6	朝日新聞朝刊 23面	ビジネス支援課の業務紹介
2006/1/30	日本経済新聞 朝刊 27面	図書館業務としてのビジネス支援
2006/3/22	大阪日日新聞 21面	ビジネス支援 ビジネス支援に関する中之島図書館のコメント
2006/8/15	毎日新聞 朝刊 9面	ビジネスセミナー(案内)大阪経済の現況と今後 - 阪急阪神統合の効果と阪神タイガース(H18.9.2)
2006/8/18	日本経済新聞 (京都・滋賀)	ビジネスセミナー(案内)大阪経済の現況と今後(H18.9.2)
2006/9/3	大阪日日新聞 20面	ビジネスセミナー(記事)大阪経済の現況と今後 - 阪急阪神統合の効果と阪神タイガース(H18.9.2)
2006/9/9	朝日新聞 朝刊 25面	ビジネスセミナー(案内)創業に知って得する法律(H18.9.27)
2006/10/6	産業経済新聞 朝刊 25面	ビジネスセミナー(記事)ネットショップを始めませんか・2(H18.7.26)
2006/11/11	朝日新聞 朝刊 33面	ビジネスセミナー(案内)集客観光都市大阪(H18.11.18)
2006/12/4	金属産業新聞 5面	ビジネスサポートフェア(案内) ビジネスサポートフェア in 中之島図書館(H18.12.7～)
2006/12/7	産業経済新聞 朝刊 9面	ビジネスサポートフェア及びビジネス支援(記事) ビジネス支援を中心とした中之島図書館の紹介

年月日	新聞名	事 項
2006/12/8	大阪日日新聞 20面	ビジネスサポートフェア(記事) ビジネスサポート in 中之島図書館の様子(H18.12.7~)
2006/12/13	人事通信 1面	(大阪府広報) ビジネス支援サービスのご案内
2007/2/19	金属産業新聞 5面	ビジネスセミナー(案内)フィルムコミッショナーの仕事(H19.3.17)
2007/3/20	大阪日日新聞 19面	ビジネスセミナー(記事)フィルムコミッショナーの仕事(H19.3.17)
2007/6/21	讀賣新聞 夕刊 6面	ダイヤモンド社よりの社史 5000 社分寄贈
2007/7/5	朝日新聞 朝刊 25面	ダイヤモンド社よりの社史 5000 社分寄贈
2007/7/9	日本経済新聞 夕刊 12面	ビジネスセミナー(案内)ネットショップを始めてみませんか・3(H19.7.25)
2007/7/14	朝日新聞 朝刊 29面	ビジネスセミナー(案内)楽しく儲かる? ネットショップのホントのそこ(H19.7.25)
2007/8/3	薬事日報 9面	「日本薬業新聞」寄贈
2007/10/4	日本経済新聞 朝刊 35面	ビジネスセミナー(案内)企業買収時代の日本経済

盲ろう者へのパソコン支援

杉田 正幸（中央図書館）

1. はじめに

2001（平成13）年に厚生労働省が行った身体障害者実態調査結果では全国に「推計盲ろう者数」は13,000人いると言われている。その内、大阪府（大阪市を含む）の数は全国盲ろう者協会の推計で900人と言われている。

視覚と聴覚の両方に障害を持った人「盲ろう者」は他の障害者以上に情報障害、コミュニケーション障害がある。普段、なにげなくテレビやラジオから入ってくる情報や新聞や本・雑誌などから入ってくる情報は盲ろう者のほとんどが自ら取得することができず、通訳・介助者を通じて得る方法が中心となる。また、コミュニケーションについても手話、点字などを手で触って読み取る通訳方法を主体とし、その際には個々に通訳者を介しておこなうことが必要である。

大阪府立中央図書館では2001年から盲ろう者へのパソコン支援（個別指導）をおこない、2003年度から盲ろう者対象のインターネット講習会を開催し、多くの盲ろう者の情報障害が克服できるよう現在も継続中である。

2. 盲ろう者の種別と情報環境

盲ろう者は、1) 全く目が見えなく耳が聞こえない「全盲全聾」、2) 全く目が見えなく聴力が弱い「全盲難聴」、3) 視力が弱く全く耳が聞こえない「弱視全聾」、4) 視力が弱く聴力が弱い「弱視難聴」の4種類に大別することができる。全盲全聾の場合は目からも耳からも情報が入らないため、点字による情報摂取、手書き（手の平にひらがな、カタカナなどの文字を書きコミュニケーションをとる方法）、触手話（手話を手で触って通訳を受ける方法）を使うなどして情報を得るしかない。点字の場合、紙の点字を手で触れて読むことが一般的であるが、盲ろう者の場合はプリスタ（後述）及び指点字を用いることが多い。指点字とは通訳者の指を点字タイプライターのキーに見立てて、キーを打つように盲ろう者の指の上を叩く方式で、左右の人差し指、中指、薬指の6本に対応させる。

障害が多少軽度で、視力がある場合は拡大文字を見ること、少し聞こえれば音声による情報摂取が可能である。

視覚と聴覚に重度の障害のある盲ろう者はパソコンの画面に表示されている内容を見て確認することは困難である。弱視の人の場合は画面の情報を拡大するソフトを用いることでパソコンを使うことができる。全盲者の場合はパソコン画面を見ることができないので点字ディスプレイを

用いてパソコン画面の内容を点字で確認する方法がとられる。

一部の盲ろう者は1990年代の前半、MS-DOS環境でパソコンを使っていた。MS-DOSはCUI（キャラクター・ユーザー・インターフェース）という文字中心の情報であったため、文字情報を点字に変換し、点字ディスプレイに出力しやすかったので、比較的盲ろう者が使いやすい環境であった。点字を頼りにワープロで文書を書いたり、パソコン通信で電子メールの交換、データベースへのアクセス、掲示板へのアクセスなど、盲ろう者が自ら他者とコミュニケーションがとれ、情報発信ができることの意義は大きかった。

Windows 3.1やWindows 95の発売以降、文字中心だったパソコン環境がGUI（グラフィカル・ユーザー・インターフェース）と変わり、視覚的な判断や仮想的な操作が必要となり、これらシステムの点字表示の開発が遅れたこともあり、盲ろう者は暫くの間、パソコンを使えない環境になった。しかし、Windowsの点字出力や画面拡大の開発も進み、2000年頃を境に盲ろう者がパソコンへアクセスすることが再び増えてきた。最近では電子メールを中心にインターネット検索、ワープロなどそれぞれの目的に応じたパソコンの利用が徐々に増えている。

当館では、日本障害者リハビリテーション協会より2000年に盲ろう者支援用のパソコン、点字ディスプレイ、各種ソフトウェアの貸与を受け、2000年度には国のIT講習会の予算でパソコン、点字ディスプレイ、各種ソフトウェアを導入し、障害者へのパソコン支援の環境整備に努めた。

3. 盲ろう者へのパソコン個別支援

2001年8月に、盲ろう者の通訳・介助をしている方から相談を受けた。「盲ろう者でこれからパソコンを使いたい人がいるのだけど、点字ディスプレイなどを実際に触って試せるところがなく、大阪府立中央図書館にはそのような環境が整っているというふうに聞いた。これまでに他で機器を触らずに説明を聞いたりしたが、本人は理解できず、分からないので実際にいろいろと触ってみたい。」とのことであった。当館では盲ろう者への支援をしたこともなかったので、最初はどのように支援をしたらよいのか分からず躊躇したが、とりあえずは環境も整っているので引き受けた。それからおよそ1年間、その方はほぼ毎週、図書館に通ってきた。最初は点字ディスプレイの種類の説明、使い方、パソコンのキー配列の説明、電子メールの使い方などパソコンの基礎について指導をおこなった。毎回、パソコンが得意で点字も分かる触手話通訳者と盲ろう者が一緒に来られ、こちらの説明を触手話通訳を受けながらおこなった。また、手話では分かりにくい部分はブリスト点字速記用タイプライタを用いて、点字で通訳し、紙テープに記録した。その点字のメモを毎回、持ち帰って家で復習された。1年経ち、ある程度、点字入力でパソコンが

使えるようになり、パソコン、点字ディスプレイを購入され、自宅で電子メールなどを使うようになった。自宅でも使えるようになったことなどから、この支援はおよそ1年で打ち切った。

その後、個別支援ではおよそ15名の盲ろう者への支援をおこない、現在も7名の盲ろう者の個別支援を継続している。

表1 主な個別支援内容

1. パソコンの基本操作
(パソコンの立ち上げ・終了、
キーボードの配列の説明、キーボード練習)
2. 点字入力(6点入力)の説明と練習
3. Windowsの基本的な操作
4. 電子メール
(送受信、アドレス帳、添付ファイルなど)
5. ホームページの閲覧
6. ホームページの検索
7. 点訳ソフト
8. 画面拡大ソフト
9. その他、盲ろう者に利用可能な機器、
ソフトウェアの説明

写真1 ブリスタ



ブリスタは6つのキーの組み合わせで点字を入力する盲ろう者用の通信用点字速記タイプライタ。打った点字は左側から紙テープで打ち出され、盲ろう者はその点字を触って通訳を受けます。

4. 盲ろう者向けインターネット講習会

当館では2001年から盲ろう者へのパソコン個別支援を実施してきたが、盲ろう者用機器(点字ディスプレイ)やソフトが充実していることや盲ろう当事者や盲ろう団体からの講習会への要求が強かったことから2003年度から盲ろう者向けインターネット講習会を開催した。初年度は11名の応募があり、大阪府内に住む4名の盲ろう者が受講した。盲ろう者には事前にパソコンの利用状況やコミュニケーション方法、点字の触読能力についてなどを直接お会いして確認した。講習会は4日間(計20時間)で、点字ディスプレイを使っでの電子メールの体験、ホームページ閲覧の体験、6点入力を使った文字の入力を中心におこなった。受講者にはパソコンのことがある程度分かる触手話通訳者または指点字通訳者を配置した。1回目の講習は手探りであり、問題点も多かった。

- 1) こちらで通訳者を選んだため受講者にあった通訳者を準備できなかった。

2) パソコンの画面情報が全て点字で出力できないなど、盲ろう者にあまり使いやすい環境を構築できなかった。

3) 点字があまり読めない受講者もいて、画面拡大など、複数の方法に対応せざるを得なかった。

4) 通訳に時間がかかるため、1回の講習でできる内容は極僅かで、4回の講習では十分ではなかった。

しかし、全国の公立図書館で初めて重度の障害者へのパソコン講習をおこない、その結果として盲ろう者がパソコンを使うきっかけとなり、受講生から一定の評価をいただいた。

2004年度は前年の反省から点字の読める盲ろう者に対象を絞り、通訳者も本人が推薦した人に来ていただいた。その結果、講習の質も一定に保つことができた。

2005年度は、初級の講座に加えて中級講座(5時間を2回、計10時間)をおこなった。それまでの電子メールを中心とした講習から、ホームページ検索の基本を学習するなど、講習の幅も広げた。

2004年度までは視覚障害者用のソフトウェアで、ある程度盲ろう者に使いやすいものを使用したが、点字表示や画面拡大がうまくいかない部分もあり、使いにくい部分も多かった。しかし、2005年度からは盲ろう者に使いやすいメールソフト、ネット検索補助ソフトなどを使用することで、効率的な指導をすることができた。

2006年度から初級講座と中級講座を各年で開催することとした。2006年度は初級、2007年度は中級講座をおこなった。以下、最近2年の講習会の概要を記す。

2006年度初級講座

2006年度は点字が読める盲ろう者でパソコンの基礎(電子メール)を学習したい人を対象として初級講座を開催し、大阪府と周辺の地域から3名の盲ろう者が参加した。

講習内容：点字ピンディスプレイを使っての電子メールの体験、ニュース閲覧など

その他、盲ろう者が使うと便利なソフトの紹介

1日目：自己紹介、盲ろう者のパソコン環境、キーボード練習、電子メール体験

2日目：ボイスポッパー(盲ろう者に配慮したメール、ニュース閲覧ソフト)でメールの送受信

3日目：ボイスポッパーでメールの送受信とニュースの閲覧

4日目：ボイスポッパーでメールの送受信とニュースの閲覧、インターネット体験

2007年度中級講座

2007年度は点字が読める盲ろう者で、電子メールができる程度の人を対象として中級講座

を開催し、大阪府及び近隣府県の盲ろう者4名が参加した。

講習内容：点字ピンディスプレイを使っての電子メールの応用、ホームページ閲覧、インターネット検索、最新の小型の点字情報端末の紹介など

1日目：自己紹介、ボイスポッパー（盲ろう者に配慮したメール、ニュース閲覧ソフト）でメールの送受信、ニュースの閲覧

2日目：サーチエイド（ネット検索補助ツール）を用いてインターネット検索（国語辞典、駅から時刻表、姓名判断など）

3日目：サーチエイドを用いてインターネット検索（Googleを使って調べたいページへアクセス）
ブレイルメモポケット（16マス表示の小型の点字ディスプレイの紹介と体験）：点字での文書作成、電卓など機能の紹介

4日目：サーチエイドを用いてインターネット検索（高速バス検索、テレビ番組（ドラマ）検索、辞書・宿泊検索、ぐるなびなど）

ブレイルセンス、シンクブレイル（小型の携帯情報端末の紹介と体験）：ワープロ、メール、ウェブブラウザ機能を中心に説明）

2006、2007年度の講習会は受講生1名に通訳者が2名ずつ付いた。通訳は手話を手で触る触手話が中心であったが、一部は、目の前で手話通訳（弱視対応手話、接近手話）と指点字通訳であった。最近2年間の受講者7名ともそれなりに点字を読むことができたため、ほぼ共通の内容で講習を進められたが、点字の読み速度には多少の差があった。弱視聾の3名に関しては大きなディスプレイ（19インチなど）を用いて画面拡大との併用をおこなった。

受講者の感想など：

- ・盲ろう者に使いやすい電子メールソフトを体験できてよかった。
- ・新しいソフトや機器を体験できてよかった。
- ・メールは自分で使うけど、インターネットは難しく使っていなかった。今回の中級講習でそれを勉強できたのはとってもよかった。
- ・4回の講習会では時間が足りなかった。せめて6日とか7日ぐらいの講習期間が必要。
- ・通訳者の人もパソコンが分かる人だったので、とってもよかった。
- ・テキストに具体的な操作など分かりやすく書かれていたので、後で復習しやすかった。



写真2 講習会 全体写真

講習会でサーチエイドを使ってインターネット検索の説明をしています。

机にはノートパソコン、点字ディスプレイ、外付けキーボードがあります。

受講生1名に触手話及び接近手話通訳者が2名ずつ付いています。



写真3 触手話通訳

強度の弱視聾の人が手話を手で触って通訳を受けています。

盲ろう者の多くは触手話での通訳が主となります。



写真4 点字ディスプレイ

全盲ろうの人がパソコンの画面の情報をパソコン手前の機械に表示される点字を読んで確認しています。

このディスプレイにはパソコン画面1行分(46マス)の点字が出力されます。



写真5 パソコンの画面拡大

弱視聾の人がパソコンの拡大画面(128ポイント)を目で確認しています。

光がまぶしいので暗闇の中で講習を受けています。

5. 考察（盲ろう者のパソコン支援の現状と問題点）

（１）盲ろう者とのコミュニケーション： 盲ろう者にパソコン支援する場合にもっとも問題となるのが盲ろう者とのコミュニケーションである。触手話、指点字などの通訳が必要で、個人指導の場合、指導者のコミュニケーション能力が問題となる。また、講習会の場合、通訳者の通訳技術とともにパソコンに関する知識、盲ろう者が利用するソフト、ハードの知識が求められる。それら両方を兼ね備えた人材の養成が今後求められるが、当館の講習会での通訳者のほとんどはそれらの両方を兼ね備えた人にきていただいている。しかし、そのような人材は少ないのが現状で、毎回、同じ人に頼まざるを得ない。また、コミュニケーションにおいてもパソコンの操作と通訳を両方受けることは難しいので、必要に応じて盲ろう者とのサインでコミュニケーションを図ることが必要である。具体的には、盲ろう者が正しくパソコン操作をしている場合は盲ろう者の背中に「○」を書き、間違えた操作をしている場合は「×」を書くなど、講師・通訳者と受講される盲ろう者の間で前もって決めておくことよい。

（２）盲ろう者の特性とパソコンへのニーズ： パソコン指導の際に個々の盲ろう者の特性の把握が重要で、それによりパソコン指導の方針を立てる。盲ベースの人なのか、聾ベースの人なのか、残存視力・視野、残存聴力、点字が読めるかなどを事前に調査し、計画を立てる。その上で、盲ろう者へのパソコンニーズがコミュニケーションの習得なのか、情報入手であるのか、情報発信であるのかを詳しく聞き、その指導方法を決定する必要がある。個別指導の場合、それぞれのニーズに応じていけるよう対応していくことが望まれる。

（３）点字や日本語の習得： 盲ろう者がパソコンを使用する際に点字や日本語の習得が重要である。特に全盲ろうの場合、パソコンへのアクセスは点字以外に方法はない。そのため、点字の習得が必要で、盲ベースの人は比較的問題とならないが、聾ベースの人の場合、この習得が問題となる。聾ベースの人は漢字を形で覚えており、また表意文字である手話言語を用いているために、基本的に漢字がなく、表音文字である点字の習得には困難をもっており、特に表音文字からの漢字変換は大変難しい。

（４）講習会の必要性： 盲ろう者にパソコン講習会を開催しているのは各地の盲ろう者当事者団体、都道府県が設置するITサポートセンター（東京都など）（盲ろう当事者向け講習会や個別支援）、日本障害者リハビリテーション協会や全国盲ろう者協会（ボランティアや指導者向けの研修）など一部である。当館が2003年度から盲ろう者向けの講習会を開催していることは盲ろう者へのコミュニケーション支援、情報受発信、盲ろう者の社会参加の機会を増やすという点から重要である。特に図書館という情報提供施設が重度の障害のある人も含めてサービスをすることは意義深いことと考える。

(5) 講習会後のフォロー： 盲ろう者にとっては講習会などみんなが集まって同じ目的で参加することに意義を感じている。しかし、講習会が終わり、そのまま支援がないとパソコンも使わず、せっかく覚えたことも忘れてしまう。当館では講習会を修了した盲ろう者への継続的な個別支援をする中で個人のニーズを把握し、適切なサポート・支援をおこなうことができていると考える。またパソコン購入やその後の支援についてはパソコンがある程度できる通訳・介助者に協力いただき、自宅でのサポートをお願いしている。図書館での支援だけでは難しいので、福祉制度などをうまく活用し、支援をしていくことが重要である。

(6) 機器やソフトの問題： 盲ろう者に使いやすいハード、ソフトが現状では少ない。現在ではWindows Vistaを点字や拡大で利用することが困難であり、そのような開発も不十分である。Windows XPパソコンも今年の夏以降入手困難となる中で今後の盲ろう者へのパソコン支援方法を再検討する時期がきている。

6. まとめ

2001年からの盲ろう者へのパソコン個別支援、2003年度から2007年度まで5年間の講習会をおこない、電子メールやホームページ閲覧などを中心とした支援を実施してきた。受講した盲ろう者からも一定の評価をいただき、何度も講習会に参加する人や継続的に個別支援を受けている人がいるのはその成果の一つと考える。

講習会については講習内容、使用機器、通訳体制、支援者の問題などがあり、最初の2年間は十分な支援をおこなうことができなかつた。しかし、講習会、個別支援を通じて開発者に協力することで、盲ろう者に使いやすいハード・ソフトの研究・開発にも協力することができ、盲ろう者への支援を少しずつであるが進めていくことができた。

今後、当館が多くの盲ろう者への支援をすることで、盲ろう者のパソコンを利用したコミュニケーションの獲得と情報障害の克服につながればと考える。さらに全国には多くの盲ろう者が住んでいるが、盲ろう者へのパソコン支援をしているのは東京の日野市立図書館が盲ろう者への個別支援をしている程度であり、講習会として開催しているところは全くない。住民に身近な施設(図書館)が盲ろう者へのパソコン支援などを通じて、盲ろう者のコミュニケーション障害、情報障害を少しでも改善できるようなサービスを今後、展開し、どんな利用者にもサービスをおこなう図書館を目指していく必要がある。

参考文献

- 1)「大阪府立中央図書館 盲ろう者にIT講習 今後に期待広がる」、『点字毎日』活字版 307(点字版 4182) 2004年3月18日(点字版2004年3月14日)3頁(点字版10頁)
- 2)「(ルポ最前線を行く)盲ろう者のインターネット講習会」、『点字毎日』活字版 311(点字版 4186) 2004年4月15日(点字版2004年4月11日)8頁(点字版31-34頁)
- 3)「大阪 盲ろう者向けIT講習会 ニュース閲覧に達成感」、『点字毎日』活字版 356(点字版 4231) 2005年3月10日(点字版2005年3月6日)11頁(点字版11頁)
- 4)『盲ろう者生活実態調査報告書』平成16/17年度 全国盲ろう者協会、2006年、137p
- 5)『平成18年度盲ろう者向けパソコン指導者等養成研修事業報告』 全国盲ろう者協会、2007年、93p

大阪府立図書館における 政策立案支援サービスの現状について

日置 将之（中央図書館）

はじめに

大阪府立図書館では、2006（平成 18）年 4 月より府職員や府議会議員の政策決定等に必要資料・情報を提供する、政策立案支援サービス（以下、「P-support」という）⁽¹⁾をスタートさせた。同サービスの実施状況は、大阪府立中央図書館発行の『要覧』で報告することになっており、2006（平成 18）年度についてはすでに報告済みである⁽²⁾。しかし、この報告は申込件数と登録件数のみとなっているため、P-support の現状を伝えるには不十分と考えられる。そこで本稿では、サービススタート時から 2007（平成 19）年 12 月までの実施状況について、『要覧』で扱っていないデータを中心に報告するとともに、現時点での課題について述べる。

なお、P-support がスタートするまでの過程については、「みんなの図書館」2006（平成 18）年 8 月号⁽³⁾ですでに報告しているため、本稿では省略する。

1. サービスの概要

1.1 レファレンス

レファレンスを含むすべてのサービスは、社会自然系資料室の専用窓口で電子メール・FAX・電話・来館により受け付けている。レファレンスは、質問の主題に応じて中央図書館の各主題室と中之島図書館に振り分けており、各主題室から直接回答している。

1.2 複写

料金は徴収していないが、複写枚数が 50 枚を超える場合には依頼者に用紙の負担をお願いしている。複写業務は P-support 担当職員が行い、逡送便（府庁内文書配送システム）で依頼者に送付している。なお、中之島図書館で所蔵している資料の場合は、同館の職員が複写・送付を行っている。

1.3 貸出

従来から行なわれている府内図書館等に対する協力貸出の規則を適用し、グループ（係）単位で貸出登録を受け付けている。貸出冊数は10冊までで、期間は30日間となっている。資料の確保・配送準備はP-support 担当職員が行っている。配送方法については、出先機関まで資料を届けることが可能な遞送便が利用できなかったため、中央図書館と中之島図書館を週6回往復しているシャトル便のコースを、本庁まで延長して運用している。

2. サービスの実施状況

2.1 全体の状況

2006（平成18）年度の申込件数は257件で、月平均21.4件となっている。2007（平成19）年度については、12月末までの時点で224件となっており、月平均は24.9件である。12月末の時点では、2007（平成19）年度の申込件数が2006（平成18）年度を月平均で3.5件上回っている。

表.1 月別申込件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
2006	14	17	26	28	36	28	27	10	18	15	21	17	257
2007	26	18	27	17	23	17	28	36	32				224

2.2 サービス別の利用状況

サービス別の利用状況は、表.2⁽⁴⁾のとおりである。月平均の比較では、複写とレファレンスの件数はやや減少しているものの、貸出件数は大幅に増加している。利用量の月平均については、複写枚数が微増であるのに対し、貸出冊数は3倍近くになっており、増加が顕著である。

表.2 サービス別の利用状況

	貸 出		複 写		レファレンス	
	2006	2007	2006	2007	2006	2007
件 数	71	89	131	83	71	52
(月平均)	(5.9)	(9.9)	(10.9)	(9.2)	(5.9)	(5.8)
冊数・枚数	133	274	2434	2072		
(月平均)	(11.1)	(30.4)	(202.8)	(230.2)		

3. 利用の傾向

3.1 レファレンスの傾向

サービス開始時から 2007（平成 19）年 12 月までに受けたレファレンスの件数は、123 件である。質問内容は多岐にわたり、府政の課題や取り組みの一端を垣間見ることができ
るため、非常に興味深い。質問内容の傾向としては、法令・判例や各種調査に関するもの
が最も多く、大阪や統計、時事に関するものも多い。

これまでに受けた依頼の一部を、以下に紹介する。

- ・マイレージの「法律上の解釈」、「税法上の扱い」、「会計上の扱い」について知りたい。
- ・外国人、未成年者に投票資格を与えることの是非に関する、論文、判例を探している。
- ・地方自治法 199 条 7 項の解釈について書かれた資料を探している。
- ・日本の人口動向や大阪の産業動向に関する資料が欲しい。
- ・70 年前にあった「大阪府内務部営繕課」は、現在のどの部署にあたるのか、組織の変遷を知りたい。
- ・大阪府立国際児童文学館と国際子ども図書館の設置目的や、機能の違いについて知りたい。
- ・第 38 代大阪府知事、赤間文三氏の顔写真を探している。
- ・1998 年以降の各サミットにおける、財務相会合の関連記事を探している。
- ・都道府県別、月別の電力消費量が分かる資料が欲しい。
- ・山片蟠桃賞候補者の履歴と著作の調査をして欲しい。
- ・内部統制やリスクマネジメントに関する文献、事例を探している。

3.2 利用の多い部局

サービス開始時から 2007（平成 19）年 12 月までに P-support を利用した部局は、以下のとおりである。（利用回数順）

1. 教育委員会事務局（府立学校含む）・・・93 回
2. 総務部・・・・・・・・・・・・・・・・・・69 回
3. 住宅まちづくり部・・・・・・・・・・47 回
4. 商工労働部、都市整備部・・・・・・・・44 回（2 部局同数）
5. 健康福祉部・・・・・・・・・・・・・・・・42 回
6. 政策企画部・・・・・・・・・・・・・・・・36 回

- 7 . 収用委員会事務局 25 回
- 8 . にぎわい創造部⁽⁵⁾ 19 回
- 9 . 水道部 18 回
- 10 . 環境農林水産部 16 回
- 11 . 生活文化部、議会事務局 14 回 (2 部局同数)

このように、多くの部局で複数回利用されていることから、P-support は幅広く利用されていると言えるだろう。なお、これまで一度も利用のない部局は、各種委員会事務局（教育委員会・収用委員会を除く）と会計局となっている。これらの事務局は何れも小規模で、所属職員数が少ない組織である。

3 . 3 その他

その他の利用傾向としては、主査級以上の職員による利用が多い点が挙げられる。これは、実際に政策立案に携わることが主査級以上の職員に多く、情報収集の必要性が高いためであると思われる。

また、同じ課内で複数の職員が利用していることも多い。これは、一度サービスを利用した職員から、課内の同僚に口コミで P-support の情報が伝わっているためではないかと思われる。

4 . 今後の課題

4 . 1 貸出サービスの改善

配送方法については、出先機関まで配送可能な逡送便の利用が理想的であったが、大阪府の規則では文書しか配送できないことになっていたため、実現できなかった。すでに述べたように、シャトル便を利用することで本庁への資料提供は可能になっている。しかし、出先機関には来館か郵送（料金は利用者負担）でしか資料を提供できない状態となっており、本庁と出先機関とでサービスに格差が生じてしまっている。この格差を解消する最良の方法は、やはり逡送便の利用であると考えられるが、これには規則の改正が必要であり、ハードルが高い。そこで当面は、郵送料の館側負担などを検討しつつ、逡送便の利用実現もめざしていきたいと考えている。逡送便の利用実現には、サービスの実績を積み上げ、規則改正に関係する部署へのアピールを強めていく必要があるだろう。

4.2 PRの充実

サービスの利用は着実に増えているが、どちらかと言えば同じ利用者による繰り返しの利用が多い。リピーターの増加は嬉しいことだが、新規利用者の開拓も必要であろう。すでに述べたように、まだ P-support を利用したことのない部局もいくつか存在していることから、今後はこれらの部局に対しても意識的なPRを行っていければと考えている。

4.3 安定した職員体制の構築

利用の増加とともに業務量も増えており、担当職員の負担が大きくなってきている。現在、社会自然資料室の職員3名が他の業務と兼務で担当しつつ、辛うじて運営できている状態である。しかし、今後も業務量が増加するようであれば、担当者を増やすか、担当者が兼任している業務を軽減するなどの措置が必要であろう。

4.4 本庁内へのサービスポイント開設

県庁内図書室（鳥取県）や市政図書室（日野市）など、本庁内にサービスポイントを設置している図書館では、地の利を生かした様々な活動により利用を伸ばしている。また市政図書室では、司書が各職場に直接働きかけることで、行政資料の収集もれを最小限に抑えているとのことである⁽⁶⁾。このように、本庁内へのサービスポイント設置には様々な利点がある。

大阪府立図書館においても、P-supportの準備段階ではサービスポイントの設置を目指していたのだが、人員配置等の事情により実現できなかった。このため P-support は、遠隔地からでも提供可能なサービスが中心となっている。

これまで本稿で報告してきたように、レファレンスや貸出などの、最低限のサービスは P-support でも提供できている。しかし、メールや電話でのやり取りが多いことから、本庁職員との関係はそれほど深まっていないというのが実感である。やはり関係を深めるには、対面でサービスを提供し、お互いの顔と名前を覚えていくことが必要であろう。そのようにして関係を深めてゆけば、自ずと本庁における図書館の存在感が増し、行政資料の収集や行政部局との連携も行いやすくなると思われる。そこで今後は、積極的なサービスの展開によって P-support の有用性を各所にアピールすることで、人員増も伴ったサービスポイント開設を目指していきたいと考えている。

注・引用

- (1) 政策立案支援サービスの英訳である Policy Planning support service を略して、「P-support」とした。
- (2) 大阪府立中央図書館「政策立案支援サービス(件数)」10頁、『要覧2007』大阪府立中央図書館、2007年
- (3) 日置将之「大阪府立図書館の政策立案支援サービスについて」21頁～29頁、『みんなの図書館』352、教育史料出版会、2006年
- (4) 2006(平成18)年度は、複数のサービスを同時に申し込まれた場合、受付番号を同一にしていた。このため、申込件数(257件)と各サービスの合計件数(273件)が異なっている。なお、2007(平成19)年度はサービスごとに受付番号を付与している。
- (5) にぎわい創造部では、国際交流、サミットの準備、関西国際空港、大阪国際空港関連事業、観光振興・国際経済交流などを担当している。
- (6) 清水ゆかり「地方資料の収集と提供 日野市立図書館市政図書室の実践から」945頁～947頁、『図書館雑誌』96-12、日本図書館協会、2002年

白崎禮三と瀬川健一郎

『織田文庫』蔵、作之助宛書簡をめくって

高松 敏男（元中之島図書館）

「虚無の相貌を点検し了り、^{チン}瀝青色の穹窿を穿って、エデンの樂園を覗かんとする卑劣を放棄した時、詩人は、最初の毒を飲まねばならない」。 「今は降り行くべき時だ」と。

これは大正 15 年 11 月、同人誌「山繭」が富永太郎の 1 周忌を記念してだした追悼号に、小林秀雄が送った一節である。そして小林は、富永の裸像をいっそうしっかりと見据える。

「彼は、その短い生涯を、透明な衰弱の形式に定着しつゝ、二十五で死んでしまった」

「私は、花の様な衰弱を受けた」と、たった一行の凝縮した言葉に刻みつけて……。

その富永には、小林秀雄、中原中也、河上徹太郎、そして年下に大岡昇平ら恵まれた友人がいた。富永の存在はこれら友人に語りつがれることにより、我が国唯一の象徴詩人として、時と共に輝やきを増した。

この東の詩人に対して、その人生の出発点において、「最初の毒」を飲んだ詩人として、もう一人西に白崎禮三がいる。彼も決して友人に恵まれなかったわけではない。昭和 6 年 4 月に第三高等学校甲類に入学するや、同級の織田作之助、瀬川健一郎、1 年上級の青山光二らと因縁めいた強い絆で結ばれていく。そしてつきあいのよい白崎は、仲間とことごとく行動を共にし、あっという間に「フランス象徴詩派の流れに没入する」、「不羈無頼の文学青年に変貌」(1)。あげく出席日数不足と落第を繰り返し、果ては退学し、その後はひとまず東京暮しもするが、やがて病のために郷里の敦賀に帰省。所謂、シャートオブリアンの「未だ生活せざる以前にすでに悩める疲労と倦怠」を持つ男として、1 冊の詩集の出版を夢見るが、「海風」第 6 号に『詩集闇の波』の予告が出ただけで、念願は果たせず終る。「咽喉の痛みで神経が疲れ、(中略)眠ってばかりある」、「煙草がすへるやうになったら会をう」という言葉を、織田作之助宛に残して 30 才で世を去る。

そんな白崎禮三の存在をぼくが知ったのは、昭和 30 年 9 月に青山光二の『青春の賭け』（現代社）の出版を見た時からであったが、その後、特に注目することになるのは、織田作之助の実姉竹中タツ氏が大阪府立中之島図書館に寄贈された織田の旧蔵書の中に、白崎の織田宛書簡が 14 通も保管されていたことによる。おりしも無頼文学研究会に所属し、『無頼文学辞典』の項目中、「白崎禮三」、「瀬川健一郎」、「富士正晴」などの執筆依頼を受けていたことゝも重なり、昭和 52 年 8 月に「織田文庫」が一般公開された機会に白崎の書簡

全部に目を通す。するとその中の 1 通に、瀬川健一郎氏との友情を確認しえる次のような一文が綴られているのに出会う。

「瀬川応召のこと無論通知はなかった。それはいゝが、どうも予想外のことでは何か寂しい。無事に帰ってくれゝばいゝが、見境なしにしぼられてゐるだろうと思ふと妙に悲しい。」(昭 17.12.22 付、織田宛)

これは瀬川氏も知るはずもない手紙の文面であるから、発見した者がすぐに伝える必要があった。が、そう思いながらも、結局念願を果たしたのは、数年後の昭和 55 年 3 月、中之島図書館発行の“図書館だより”「なにわつ」に、『白崎禮三詩集』の紹介文を掲載した直後になってしまう。

白崎の書簡のコピーと、『なにわつ』の 2 点を同封し送付したところ、折り返し次のような返信が高松宛にとどく(2)。

拝啓

いい気候になってきて気持も明るくなりますが、ご多忙のこと存じます。お忙しいなかを図書館だより誌 ご恵送下さいましてありがとうございます。お礼申し上げます。

白崎禮三詩集はまことにありがたいもので、富士君に感謝しています。織田の友人たちが作らなければならないのに、富士君に作ってもらって恥ずかしいことです。このことは富士君にも申し上げておきました。白崎の詩の一つ一つに思い出があって、当時を思い出しますが、ぼくは白崎の詩に傾倒していました。いい友人でしたし、応召のとき手紙を出さず通知をしなかったとすれば、白崎にまことにすまないと思います。どうして通知をしなかったのか、自分でもよくわかりません。白崎をかなしませたことを詫びたい気持ちです。 白崎のこと、織田のこと(三高時代)は早く書きたいのですが、なかなか書けません。その原型は織田の本の解説で三十枚ほど書きましたが、五百枚位書きたいと思っています。昭和六年から十一年までです。

お礼申し上げるのがおそくなりました。しばらく歯医者(大阪)に通ってしまして、やっと終わったところです。

ご自愛を祈り上げます。ありがとうございました。

敬具

瀬川 拝

書簡で綴られている「応召云々」は、この時より40年近くも昔にさかのぼる話である。その間、昭和48年1月20日には、白崎の願もかない、手紙に綴られているように富士正晴が私版で『白崎禮三詩集』（青山光二、富士正晴編 タイプ版 非売品）も刊行されている。（「嶽水会雑誌」発表の詩から4篇、「椎の木」から24篇、「海風」から26篇、外に青山光二「略年譜」付）巻頭に「故白崎禮三の詩稿の散逸をおそれて」、「とりあえず小部数作り贈る」という文句をそえて。

それにしても、『織田文庫』に残された14通の書簡を読んで、深く心を揺り動かされるのは、綴られた白崎の肉声であり、生ざまである。最初の昭和16年（月日不詳）の東京淀橋区大久保百人町二・六 渡辺方から、野田村丈六の織田宛書簡（「読物と講談」の用箋を使用）では、「海風は頑固な雑誌にしたい」と決意のほどを綴り、さらに同17年9月16日の書簡でも、「大阪文学九月号見た。表紙が非常にいい、これでは中味が表紙負けする。」「小説やっと十枚書いた。序が終わったしいよいよ本題五十枚位にはなるだろう」と意気込んでいる。が、病状が徐々に悪化し、郷里の敦賀に戻った頃から、文面も次第に変わっていく。

「今咽喉をいためてあるのでこれが癒ってからにする。結核ではないと思ふが咽頭の粘膜がただれてゐる 煙草がすへず何もかも手持無沙汰だ」（織田宛、昭18.9.8）

「会って話出来るまでになつてゐないのだ。粘膜がただれてゐるので一食一食がかなりの苦痛なのだ。（中略）實際厄介な病気になつたものでこの苦痛は人にはちょっと想もつかないらしい」（同18.11.22）

そして昭和19年（29才）末には、友人とも恩師とも会うことを拒否し、寝たままとなる。翌年1月20日、繰り返すが30才、若すぎる死であった。

青山光二は「略年譜」の昭和6年（17才）の部分で「禮三をして詩人の宿命を自覚せしめる契機となつたものに」、「武生市での、遠縁にあたる年上の、有夫の女性との恋愛・失恋事件があるが、詳細はすでに知る由もない」と特に書き加えていることに、富永太郎の人生を重ねて戦慄を覚える。

(1)青山光二「白崎禮三略年譜」より引用。

(2)消印、判読不詳。昭和55年4月と記憶する。

中之島図書館所蔵 一枚摺物仮目録 2

佐藤 敏江(中之島図書館)

いつの時代も、ジャーナリズムと時の権力との相克は避けられない。近世の出版史において、山東京伝、蔦屋重三郎等の筆禍事件は有名であるが、出版統制は時事を扱った一枚摺にも及んでいる。

貞享元年(1684)・元禄 11 年(1698)・同 16 年(1703)・正徳 3 年(1713)と、くり返し時事的報道の読売(瓦版)、或は時事に取材した書物の板行を禁止する触書が出された。以降瓦版 = 読売は幕府から目の敵にされる。享保 7 年(1722)には、大岡越前守等による、書物に奥付の記載を義務づけなど、今日に至る迄の出版取締りの基本法となった出版統制令が出された。寛政 2 年(1790)松平定信の出版取締りに関する触書の効果をあげるため、見せしめとして摘発されたのが、前述の蔦重と京伝であった。以後幕府は「当分之儀」「猥成儀異説」「浮説之儀」を一枚絵や書物にすることを徹底して取締り、同 11 年に“華美成一枚絵”の彫刻を、また文化の初めには火事の読売さえも禁じられる程であった。

文政になり、災害事件に限り読売発行が黙認され、またペリー来航、安政の大地震等により読売の発展期を迎える。こうした発展の背景には、寺子屋の増加による識字層の増大、庶民の情報への関心の増大、地方の書籍商の発達、時代の急激な変化等が考えられる。当時の人々の情報への関心が、今日の“歴史認識”のよすがとなっているといえる。

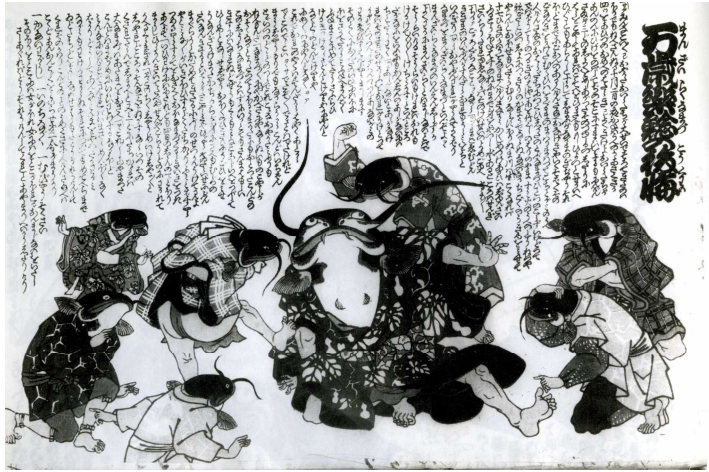
今回は当所蔵の保古帖(貼り交ぜ帖)の中から「当分之儀」「猥成儀異説」「浮説之儀」に関する報道、お蔭参り、巷の噂等の社会雑報類を取上げた。以下主なものをあげてみる。

嘉永 7 年(1854)9 月 18 日のロシア船ディアナ号の大阪湾出現は、ペリーの神奈川沖来泊、プチャーチンの長崎来航に次ぐものであったが、その異様と、幕府の警護のものものしさは多くの読売の出版へと繋がった。

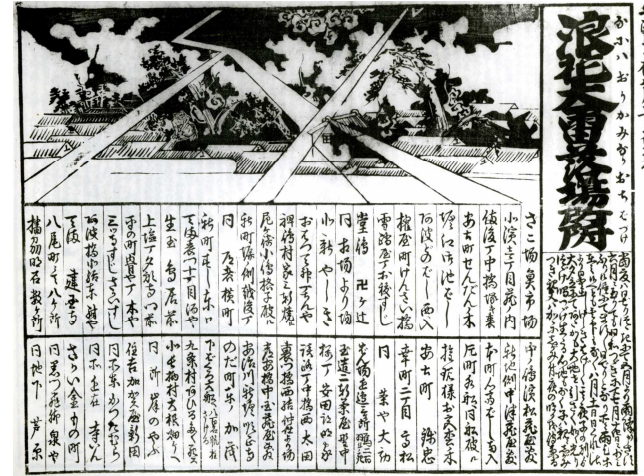
大阪で人気の高い大塩平八郎と大塩の乱、その背景となった飢饉は、救荒書というジャンルをうみだした。本冊には、大塩平八郎の屋敷付、御役録等が収載されているが、事件そのものに結びついた出版物はみられない。現存する大塩関係の文書類の多さから考えると、報道規制によるものと推測される。

火災・水害・地震等の災害報道は、地元の人用であると共に、遠近の親戚知己への報告用でもあった。地域により違いがあり、例えば火災報道では、江戸が文字ばかりであるのに対し、大坂は焼場を赤く塗った図に簡単な説明を付した物が多いという。

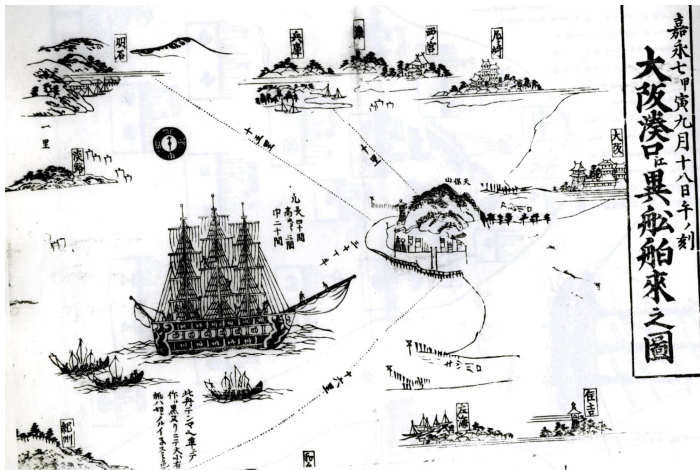
江戸期における御蔭参りは、慶安遷宮翌年に集団参宮が始まり、以来宝永二年、明和八年、文政十三年と六十年毎に大集団の参宮が行われたが、一枚摺が盛んに出たのは、文政十三年のお蔭参りであった。このお蔭参りは阿波を筆頭に四国一円、大坂京都に及び、全国へと広まった。「武江年表」によると、一枚摺は大坂中心であったという。



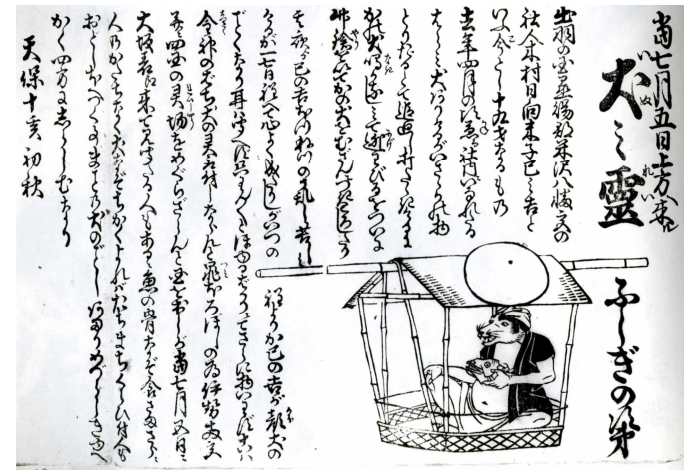
保古帖 5 卷



保古帖 5 卷



保古帖 4 卷



保古帖 5 卷

時事報道

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
1-4	戦争	(大坂卯年ノ図写)	(元和元乙卯年板) 嘉永四年	大坂御陣辻売板行	28 × 40.5
5-3	戦争	(阿倍野合戦配置図)	刊		37 × 47
5-10	戦争	[大坂布陣図]	刊	織田信長对本願寺	38 × 52
20-123	戦争	(合戦年表)			20 × 27
16-31	皇室	人皇百二十二代内裏御即位之図 [扇面]			29.5 × 47.5
16-32	皇室	御即位二付五万石以上御大名御賀 [扇面] 御進献之分	弘化四年丁未九月		21.5 × 47.5
5-15	皇室	人皇百二十二代内裏御即位之図 [扇面]	刊		22 × 49
11- 1	皇室	(御即位大礼図)		御絵図所 京極第二條 林治左衛門吉永開板	34.5 × 46.5
5-109	幕府	[江戸城見取り図]		元御殿跡明地明和九年二月廿九日以降...	36.5 × 52 彩色
5-20	幕府	四界太平北釜ケ原御狩之図		東都: 東山堂梓 略絵図入	34 × 50
14-77	幕府	四界大平北釜ケ原御狩之図			32 × 46
6-73	幕府	(四界大平北釜ケ原御狩之図) 部分		上総国葛飾郡小金原	35 × 25
4-46	褒章	絵本天加護孝行実録 新板(絵びら)			20.5 × 14.5 破損
5-96/97	褒章	吉原佐野槌屋せい抱遊女黛の誉		(安政二年) 乙卯初冬二日大地震	18 × 24.5 2枚彩色
3-44-47	褒章	賞妓録 - 本京橋町塗師屋治助抱へ飯焚女さく/瓢箪町倉橋屋万次郎代利吉左衛門抱へ傾城初花	己未孟春	山川正宣作	19.5 × 12.5
15-47	褒章	天地之性人為貴人之行莫大於孝 - 中村屋民助娘とらへ褒美	嘉永七甲寅年六月	信成舎施印	31 × 41
20-79	褒章	忠勤/孝行/貞節未代嘸	嘉永七甲寅八月大新刻		34.5 × 45.5
19- 4	褒章	孝行処女未代嘸 - 大坂二本町: 又兵衛支配借家民助娘とら	嘉永七寅六月	大坂二本松町	35 × 47.5
2-7	刑罰	(元禄板刑罰獄門図)		しんせいがかくび	22 × 16.5 彩色

時事報道

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
4-13/14	心中	[天保九年御評判の心中番付(部分複製)並びに墓碑建立の由緒書]	文政十一戊子年三月	浪華 黄葉園主人(野里梅園)誌	23.5×30
4-16/17	心中	[赤根や(半七)豆腐看板写]			21.5×80
4-19/20	心中	乍恐口上(三勝半七相对死届)	元禄八年十二月七日	庄兵衛千兵衛印 笠戸 左衛門/渡辺為右衛門殿	22×63.5
3-17	敵討	[江戸復讐略録]	丑十一月二十八日	河内郡上根本村孝七妹たか 敵:与左衛門	24×32
4-68	敵討	大坂中の島において敵討之次第	亥六月二九日夜	妻ふき多五郎と密通に付、夫田川得左衛門敵討	24×32
5-112/113	敵討	高名功名手柄鏡・忠孝仇討鏡	弘化三年	御陣ヶ原:熊倉傳十郎 本庄茂平治	38×52
11-29	敵討	加州高岡町にて敵打之次第	天保九年戊五月十三日	敵:坂本彦三郎 討手:上田中大夫倅近藤仲之丞	23.5×32 彩色
11-30	敵討	[大坂中之島にて敵討之次第]	天保九年戊七月朔日朝	伊予不義密通 敵:土岐十平/主人の妻 討手:土岐十平主人	23.5×32 彩色
13-17	敵討	敵討略記 陵雲山崇禅寺	正徳五年十一月	敵:生田傳八郎 討手:遠城治左衛門/安藤喜八郎	33×45
10-53	敵討	義士夜討旧地之略図			22.5×33 彩色
1-96	書状	[高田屋嘉蔵より中村屋伊七郎宛書状]	六月十日	国後島にワロシヤ船に兄嘉兵衛乗船の件	17×44
2-55	人物図	キハダンスアナン之像		欽差大臣国王副使海軍統帥右督	27.5×21 彩色
2-56	人物図	大合衆国人上官(アーダムス)肖像之写	嘉永七寅孟春	[アーダムス肖像] 神風館紀於呂香図	27.5×20.5 彩色
3-92~95	人物図	[嘉永六年六丑年六月二日相州三浦郡浦賀湊北亜墨利加州之舩四艘至来同月九日久里浜上陸人物之図併解説]	安政二卯年四月写	東都:谷文一画	27.5×77 彩色
11-31/32	人物図	琉球人来朝行列図 付来朝の次第	天保十三壬寅年	御免板元:北濱寺丁日本屋:播磨屋長兵衛 賣弘 高麗橋寺丁日本屋:播磨屋九兵衛	35×94
20-164~168	人物図	[唐人行列図]		松雲堂板	17.5×237 彩色

時事報道

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
5-26/27	年表	異国往来並漂流年表 二編		文永四～嘉永七年	38×52 2枚
5-27	異国船	ヲロシヤ国船之略図	嘉永七甲寅	寅九月十八日大坂川口天保山沖におろしや船漂着	37×50
5-30	異国船	大坂湊口江異船舶来之図	嘉永七甲寅	嘉永七甲寅九月十八日午ノ刻	31.5×45
5-33	異国船	〔おろしや国船図〕		嘉永七寅九月十八日ハツ時大坂天保山沖	17×25
5-34	異国船	〔おろしや船図〕		九月十八日ヲロシヤ當沖へ漂着ス	18.5×26 彩色
10-8	異国船	南京永茂船之図	文化十三丙子年三月入津		22.5×30
5-62	異国船	スト - ンボ - ト之図		写真之梓新奇発行印	32.5×46.5 彩色
5-35～36	防衛	御代静謐凱陣鑑 天保山海陸御固附		人名・紋入 大坂御城代土屋采女正等	15.5×68 2枚
5-31	防衛	[天保山御固配置図]	刊		50×37
5-32	防衛	海岸御固御人数附			23×34
5-37	防衛	富士の巻狩陣取の図		嘉永七寅九月十八日安治川口目印山	38×52 彩色
5-49	防衛	海岸御固御配置人数図	[嘉永七年]	銅板	15.5×22.5
6 - 204	防衛	甲州御身延山参代御下向御行列略図	嘉永七甲寅年九月廿四日大阪御着	紀伊国屋保兵衛板	36×49.5
8- 71/73 /74/77/ 78/80/81	防衛	天保山海陸御固附			15.5×23
8-69	防衛	御代静謐凱陣鑑		(袋・題簽様)	15.5×11.5
8-93	防衛	諸候御固御武徳鏡并御引取行列之図 - 異國船退 附	當二月十六日	(袋・題簽様)	17×12
5-54/55		伏接来札知	刊	(大俄羅斯国上宰相子也利羅徳公閣下宛)	19.5×26.5 4枚
6 - 161	大坂	異船早々逃帰是誠神国御恵〔札〕	きのと卯のとし	浪花 暁鐘成戯作	36×6.5
8-65/66	防衛	海陸御固泰平鑑 [下田沖外国船]			34.5×44.5 33.5×42 彩色
6 - 212	詩文	時萬延改元 日本退散異国船	はぬる字のちからもつよしひのもとの 大皇国には何かなふへき	春燈印有	18×13

行政

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
5-75	役所	御代官所休日	嘉永三年刊		18×24
15-70	役所	勅書写	明治十七年七月七日		28.5×21.5
15-78～81	役所	[大阪史編纂趣意書并賛助依頼文]	明治三十四年十月	大阪市長: 鶴原定吉 3丁	24.5×14.5
15-84	役所	軍事公債応募申込書	明治廿七年十二月	窓口: 日本銀行大阪支店	28×40
15-87/88	役所	大阪府告示	明治五壬申四月	大阪府	34.5×63
15-89	役所	築港寄付受領書	明治六年五月	大阪府権知事渡辺昇より安土町四丁目鹿田清七宛	19×51.5
11-16/17		[大名行列図]		酒井左衛門丈様/松平隠岐/松平讃岐	23.5×62.5
13-23/24		大名行列図		酒井左衛門江尉/松平壱岐守/松平讃岐守	22×33 2枚
20-169/170		御改革大坂御開葉〔行列図〕	天保二年		36.5×97
5-83	書籍	京都室町相州鎌倉応仁武鑑			35×47
5-84	書籍	豊臣武鑑			34.5×46
4-3/4	書籍	御役録	申八朔改	大坂南久太郎町四丁目 西二入 書林: 神崎屋二郎板	29.5×51
4-18	書籍	武鑑 22/23丁		黒田甲斐守長重・松平安芸守綱長・浅野土佐守長澄・浅野内匠頭長矩等	14.5×21
4-71	書籍	浪華御役録		御城代: 松平右京太夫 御城番: 戸田大炊頭・遠藤備前守等収載	28×40
14-71/72	書籍	大坂役附	[延宝～元禄頃]	天野屋理兵衛入	8×19
1-52/53	書籍	[元禄武鑑 高家衆之部17・18]		「吉良上野介」有	8×17 2枚
2-13～23	書籍	[本朝部武林系禄図鑑] 部分 跋・1～6・22・23丁	元禄十六年序	(大岡紀伊守)	15.5×21 10枚
2-30～32	書籍	大阪鑑	文政九年以降	大塩平八郎: 与力・吟味役・唐物取締定役・盗賊改	33.5×52.5

行政

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
2-30～32	書籍	御役録 紋入り 屋敷配置図	文政十亥年	大坂書林:神崎屋金四郎板 大塩平八郎	28×53
11-10/11	書籍	御役録	文政十二より	与力御役付 諸御用調役・目付・地方役・盗賊改: 大塩平八郎	29.5×55
2-30～32	書籍	御役録 紋入り 屋敷配置図	天保八年酉八朔改正	天満書林:神崎屋金四郎板 元大塩格之助屋敷跡	29×57
1-22	書籍	大坂袖鑑 (部分:14・15丁)	(天保)	東御組与力衆名附に「大塩格之助」有	7×29 2枚
1-48	書籍	御役録		三万石:田沼主殿守 御若年寄:松平伊賀守	7×15
1-45	書籍	[大阪御役人録部分]		「糸割府銅 大塩喜内」有	7×28
6-72	書籍	[御役録]		江戸馬喰町二丁目:萬屋亀右衛門	34.5×47

風説類

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
5-24	鼠害	石州那賀郡濱田御城下窮鼠之一説	安政二卯八月大新板		28 × 39
4-118	魔よけ	くたべ〔出現〕		越中国立山薬種塚	17 × 23.5
4-119	魔よけ	ス力屁〔出現〕		越中かき山いまき谷尻が洞	15.5 × 23
5-4	戯書	欲といふ獸貧乏の国からいけどった一名金あらしと云	鶴屋板	一勇斎国芳画	33 × 46 彩色
5-82	戯書	諸珍事大寄世間噺	嘉永七寅歳		48.5 × 36
4-21	噂	[松の古木にこうもり異常発生]		於)天満西寺町なら村御寺内	16.5 × 23
4-42	噂	[山城之國にて百姓女房馬兎出産]		山城之國嵯峨大徳寺前	16 × 23.5
4-67	噂	[ふしぎのけだもの出現]		八幡州明石	24 × 17
4-69	噂	当七月五日上方へ来ル犬之霊ふしぎの次第	天保十亥初秋	出羽国	23 × 32.5
4-90	噂	安政三年辰三月異童子実記		(播州印南郡増田新田出柄村 大工平兵衛倅千代松 一眼中瞳三つ有)	39 × 28
4-91	噂	大女	[安政二年刊]	肥後国天草郡城崎村百姓多平娘三人 - 天保十二生十六歳・弘化三生十一歳・嘉永二生八歳	39 × 25
5-79	噂	古今稀成変生男子	安政2年五月	牛込若宮町八幡前:遠州屋清五郎店亦蔵娘さと	37 × 26
5-85	噂	西横堀西州寺銀杏女の形に見える事	天保十四年五月		32 × 23
4-121	噂	[木より雨降る]	四月八日	(なんば村西の丁札の辻西へ入)	16.5 × 23
10-9	噂	[堺手嶋の浜に御轡臺等打ち上る事]	文政十三年寅七月廿二日		24 × 33
10-17	噂	阿波国鳴門に霊牛出生		牛主:治郎右衛門	45 × 34.5
11-54	噂	丹波の國に於て一夜の内に山沸き出る次第	弘化四未の年正月大新版	南華写	34.5 × 47
15-45	噂	此頃町々うはさをちよと忠九の抜文句			35 × 47.5

風説類

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
5-25	噂	[浅草に八代三桝の再生猫図]		いたきあけよく似た猫とながむれはにゃふとなくもお まれかわりか チトセ	24 × 37.5 彩色
15- 3	噂	江戸東海道東国荒珍事圖	安政四年	安政三年丙辰八月十八日より	35 × 48
8-112	病気	[ほうき星と半日ころりの事]	写	浪天学家南本町順天堂福田塾施印	25 × 17
8-113	病気	[流行病の事]		午八月何某施印	25.5 × 11.5
11-21	備忘録	天保八年酉のとし中のめづらしい事おほへて置たい 忘まい沼津見立	天保十年亥の年正月大新版		34 × 45.5
2-45	見立	変化名の見立角力 ばけものの名一覧			33 × 45
15-46	見立	変化名の見立角力			34.5 × 45
20-53	見立	安政五年歳中珍事見立角力			48 × 33.5
20-167	見世物	天王寺象のみせもの		付)伊予ぶしかへうた 生瀬戯作	17.5 × 24.5
14- 3	見世物	紅毛来船ハルシヤ国産駱駝	[未ノ歳六月下旬より]	書林株元 伏見町:順意堂 町:玉屋 兵衛 板〔於〕難波新地側	32 × 45
14- 4	見世物	剛猪山嵐 - 蘭名ステーケルハルケンという	天保三年以降		32 × 45
14-45	見世物	[天王寺象の見世物]	嘉永二酉二月より	いよぶしかへうた 生瀬下作 一鷹画	18 × 27.5

災害 - 火災・水害・地震・病気・その他 -

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
5-99	災害	地震出火細見記 [引札]		江戸四里四方近郷近在	18×12.5 彩色
5-100	災害	慶長以来聖代要廼盤寿恵		不 堂蔵板 江戸大地震大火	50×38
2-12	火災	寛政上町焼	寛政元年乙酉極月廿二日	寛政元年極月廿二日 こめや町・南久宝寺	25.5×34 彩色
2-41/42	火災	[大坂北新地辺火災図]			33.5×45 朱入
6-1/2	火災	外神田佐久間丁2丁目火事	天保五年甲年二月七日刊		46×62 3色摺
11-22	火災	[大阪大火]	天保五年	天保五年七月十日夜子ノ刻より出火	32×43
13- 1	火災	大阪大火之略記	天保五年	天保五年七月十日夜子の刻出火	32.5×46
6-69	火災	大阪大火 天満川崎より	天保八酉年	天保八酉二月十九日	35.5×48.5
11-24/25	火災	大阪大火 図付	天保八酉年	天保八年酉二月十九日辰中刻出火 天満川崎より	35×47.5 彩色 図35×47
13- 2	火災	大阪大火	天保八酉年	天保八酉二月十九日辰中刻出火	33×46
2-54	火災	高野山大火之図	天保十四卯年	天保十四卯年閏九月二日丑之刻出火	27×44.5 朱入
11-34	火災	高野山大火之図	天保十四卯年	閏九月二日丑之刻出火	32×43.5
4-157	火災	武蔵大火略図	弘化三丙午正月十五日 (刊)	江戸本郷丸山辺より出火	26×40.5 朱入
20-38/40	火災	(江戸出火図)	弘化三年正月		31×46
10-10	火災	大阪天満大火	弘化三年	弘化三年十一月二日夜九ツ時分出火	34.5×46.5
12-1	火災	大阪天満大火	弘化三年	弘化三十一月夜九ツ時	32.5×46
20-144/145	火災	[信濃国火事図]	弘化四丁未年三月廿日		39×87 彩色
4-72	火災	京大風大火		正月晦日朝七ツより 千本通～鴨川・七条	24×34

災害 - 火災・水害・地震・病気・その他 -

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
5-28	火事	御行列之御略図 (京都の火事カ)	嘉永七甲寅	四月六日午の刻出火翌七日卯半刻火鎮り申候	33.5×48
5-48	火災	平安城火災年表	嘉永七寅四月		23×33
8-101	火災	江戸大地震出火	嘉永七寅年	十一月四日五ツ半時震	23.5×48
20-28	火災	新吉原地震并出火之図	安政二卯年	十月二日夜四ツ時	38×52 彩色
5-105	火災	江戸大雨風津波雷出火之図	安政三丙辰八月廿五日		38×51.5
19-62	火災	大阪大火極細吟本しらべ	安政五年	午二月廿五日未上刻	40×35 彩色
19-58	火災	江戸大火極本しらべ	安政五年	十一月十五日寅上刻神田佐久間町より出火	36.5×48 彩色
19-60/61	火災	江戸大火本しらべ	安政六年	未二月廿一日夜丑上刻	36.5×70 彩色
4-152~154	火災	火之用心 大坂今昔三度の大火	文久三年癸亥十一月大新板	享保九辰年大火金屋妙智焼といふ、天保八酉年大火嶋ノ内部 文久三亥年大火細本見調	48.5×76 彩色
5-86	火災	江戸大地震	十月七日	江戸屋平右衛門	24×17.5
5-87	地震	関東江戸大地震 並大火方角場所附	安政二卯歳	安政二卯歳十月二日夜	36×49
5-100	災害	慶長以来聖代要廻盤寿恵		不 堂蔵板 江戸大地震大火	50×38
6-5	火災	道頓堀さか町なんば新地ねぬもの番組	刊	4月21日夜出び	33.5×48
6-99	火災	大坂中船場出火略記		子二月三日出火	26×37
4-124	火災	火難盗難除まじない		三月二十四日は庚辰年庚辰の月庚辰日辰の刻にあずきめしと生のわかめを恵方に供え下がり家族で食す	16.5×11.5
9-17	火災	火事之時加勢出申絵図		淀川～道頓堀川 谷間筋～淀川	35.5×52
19-73/74	火災	火除火用慎			36×12.5

災害 - 火災・水害・地震・病気・その他 -

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
2-34/35	水害	[摂河洪水図]	享和二年壬戌六月二十八日	大岡尚賢誌 吉田作治郎図	53.5×78 彩色
13-19	水害	川出本水心蔵七ツ目茶屋場	(享和二年六月/…36年)	(河内大水)	23×44.5
5-47	水害	大阪川口大つなみ混雑記-摂津大地震 二編	(嘉永七寅年)	嘉永七寅十一月五日暮六時	37×49
8-104	水害	聞書諸国並大阪大地震つなみ	(嘉永七寅年)	嘉永七甲寅年十一月	32×46
8-105	水害	大阪川口大つなみ混雑記 摂津大地震二編	(嘉永七寅年)	嘉永七甲寅十一月五日暮六時	32×45
20-13	水害	大阪大津波の図	(嘉永七寅年)	嘉永七甲寅十一月四日	36.5×24 彩色
15-1	水害	近郷近在江戸大風雨出水場所分	安政三年年	安政三年八月廿五日夜五ツ半時	34×48
5-105	水害	江戸大雨風津波雷出火之図	安政三丙辰八月廿五日	安政三丙辰八月廿五日	38×51.5
20-12	水害	東海道遠州路奥州蝦夷松前江戸大雨風大津波出火	安政三辰年	安政三辰八月廿五夜出火	36×47
20-81	水害	江戸大雨風雷津波之次第	安政三辰年	安政三辰八月廿五夜之夜	34.5×47
5-100	番付	慶長以来聖代要廼盤寿恵		不 堂蔵板 江戸大地震大火	50×38
12-24	地震	京都大地震之次第	(文政十三寅年)	七月七日七ツ時大地震	23×33
12-26	地震	大地しん忠臣蔵九段目抜もん句	(文政寅のとし七月しん板)	(京都大地震二附)	33×45
6-9	地震	信州より書簡之写 上田宿大地震	(弘化四年)三月廿四日刊		31×43
6-10	地震	信濃国大地震之事	弘化四丁未年	弘化4丁未年3月24日夜四ツ時	25×34 彩色
5-46	地震	摂津大ぢしん		嘉永七寅十一月四日五ツ半時震	46.5×49
8-100	地震	浪花大地震の次第並他所		嘉永七寅年霜月四日朝五ツ半時より	33×47.5
8-102	地震	摂津大阪近辺早引方角附大地震二附大津波次第		嘉永七年寅年十一月五日	33×47
8-103	地震	摂津大ぢしん		嘉永七寅十一月四日五ツ半時震	32×46

災害 - 火災・水害・地震・病気・その他 -

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
5-86	地震	江戸大地震	十月七日	江戸屋平右衛門	24 × 17.5
5-87	地震	関東江戸大地震 並大火方角場所附	安政二卯歳	安政二卯歳十月二日夜	36 × 49
5-91	地震	江戸大地震 新焼場附	安政二年十月二日	(歌舞伎番付仕立) 山本留女板家	38 × 52.5 彩色
15-2	地震	安政改正泰平盤石圖会	安政二卯年十月二日夜四ッ時		35 × 48
5-96/97	地震	吉原佐野槌屋せい抱遊女黨の誉		乙卯初冬二日大地震	18 × 24.5 2枚彩色
5-56	鯉絵	地震方々ゆり状之事 (なまず + 瓢箪図入)			23.5 × 30.5
5-89	鯉絵	万歳楽鯉の後悔			25.5 × 38 彩色
5-92	鯉絵	どらが如来世直しちよぼくれ		ちよぼくれ	37 × 26 彩色
5-93	鯉絵	骨抜どうせうなまつ大家破焼		こんどのだいじしんいえくらやいた…	26 × 38.5 彩色
5-95	鯉絵	両四時角力取組		地震は二日の亥の刻 焼止は三日の巳の刻	38 × 25.5 彩色
5-98	鯉絵	[ことぶき万歳楽]			16 × 11 彩色
4-158	地震	夜直地震後教		井関作	18 × 25
5-69	地震	[御祈祷案内状]		地震津波鎮向後諸人為安穩御祈祷執行 住吉	18 × 16
5-94	地震	持 長者泣競		こんどの大じしんはぜんだいまもん…	38 × 25.5 彩色
5-99	出版	地震出火細見記 [引札]		江戸四里四方近郷近在	18 × 12.5 彩色
8-112	病気	[ほうき星と半日ころりの事]		浪天学家南本町順天堂福田塾施印	25 × 16.5
8-116	病気	此節流行の悪病除妙薬		調合所大手筋折尾町川崎四郎兵衛	16 × 11
8-118	病気	はやり病の用心		なにがし施印	15.5 × 40

災害 - 火災・水害・地震・病気・その他 -

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
8-113	病気	[流行病の事]	午八月	何某施印	25.5×11.5
8-115	病気	除疫病御薬虎頭殺鬼雄黄圖	戊午八月	道修町施業	12.5×10.5
20-84	病気	江戸流行病死人葬高	安政五年八月朔日より九月二日迄		37×49
20-85	見立	世間流行三時ころり代咄種忠九抜文句見立画合	安政五年午八月上旬より大はやり		39×48
20-8	見立	半日頓病忠臣蔵九段目抜文句	未六月初り八月最中		37×49
2-51/52	災害	(年代記)部分 六丁	延宝六年板貞享三寅二月吉日改開板	吉野屋五兵衛 本屋弥兵衛	8×34.5 3枚
15-8	竜巻	京都洛西珍事の次第	嘉永元申歳七月	大雨大舞風・・・	24×34
5-24	鼠害	石州那賀郡濱田御城下窮鼠之一説	安政二卯八月大新板		28×39
5-104	雷	浪花大雷落場所附	安政三丙辰年	安政三丙辰八月十一日夜子刻	36×49
15-3	災害	江戸東海道東国荒珍事圖	安政四年	安政三年丙辰八月十八日より	35×48
20-53	見立	安政五年歳中珍事見立角力			48×33.5
20-81	風雨	江戸大雨風雷津波之次第		安政三辰八月廿五日之夜	34.5×47

飢饉・大塩関係

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
5-88	飢饉	[江戸御救小屋配置図]			36 × 49
12-89	見立	飢饉山困窮寺開帳略縁起	天保八年酉五月新版	幽谷齋算彦述	31 × 46
20-119	見立	飢饉山困窮寺開帳略縁起	天保八年酉五月新版	幽谷齋〔撰述〕	34.5 × 47
1-49	施行	[大塩平八郎施行引札]	[天保八年]	河内屋喜兵衛・新次郎・紀一兵衛・茂兵衛四書肆	28 × 14
11-27/28	施行	浪花施行鑑 為御救	天保八酉年		35 × 46 2枚
12-28	施行	京都ほどこしかゞみ 二編	[天保四年巳十二月]	書林:勸善懲惡軒	33 × 45
12-29	施行	米高直二付大坂市中へほどこし名前録 前編	天保八酉の年新版		33 × 45
12-30	施行	米高直二付大坂市中江ほどこし名前録 後編	天保八酉のとし新版		33 × 46
12-90・91	施行	浪花施行鑑 -為御救	天保八酉年	豊年屋米安心齋板	64.5 × 46
15-43	施行	浪花施業鑑	嘉永四年亥三月大新版		35 × 47.5
20-19	番付	浪花持丸ほどこし鑑	天保四年巳ノ極月新版		34 × 45
20-20	番付	米高直二付縁の有人々へほどこし日記 初編		書林:心齋橋塩町 秋田屋源兵衛板	35 × 47.5
20-115	施行	浪花施行鑑	嘉永四年亥三月大新版	惣高合巻万千六泊七拾八×四百五十武文	36 × 49
5- 58	救荒書	萬代不朽救世狼飯伝		楠里亭主人小林其樂著 心齋橋博勞町北江入東側:石蔵堂 河内屋長兵衛板	32 × 43.5
12-87	救荒書	萬代不朽救世粮飯傳		大阪心齋橋博勞町北江入東側:石倉堂 河内屋長兵衛板	31 × 42
20-21	救荒書	米相庭七拾目ト成様めしかゆをたく傳		浪花武田門人 武田一郎〔等〕撰	36 × 48.5
11-21	見立	天保八年酉のとし中のめづらしい事おほへて置たい 忘まい沼津見立	天保十年亥の年正月大新版		34 × 45.5
1-19	米相場	[米極高値相場付写]	[天保七酉歳]	大阪道島米市場前:京屋徳三郎印	14 × 37

飢饉・大塩関係

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
1-21	米相場	[米相場] 落札	丁酉六月十三日	堺嘉印	17×17
5-71	米相場	御冥加ヲよるこぶむかし咄	嘉永四亥歳九月板	天保四年己八月～十年亥三月迄をしるす	37.5×48
6-4	米相場	有がたい御治世末代ばなし	天保十亥年大新板		34.5×49
6-102	米相場	有がたい御治世末代ばなし	天保十亥年大新板	浪華 松川半山画 彫工:宇之助	34×48
11-20	米相場	有がたい御治世末代ばなし	天保十亥年大新板	新板	34×45.5
12-84	米相場	米高	[天保五午仲夏新板]		33×45
11-23	番付	諸国豊稔附	天保五年午八月大新板	これにもれ候諸国豊作の次第は二編・三編追々出し申候	34×45.5
20-17	番付	諸国豊稔附	天保五午年八月大新板		34×43.5
15-42	番付	諸国大豊作米穀石数競鑑	嘉永四亥年八月大新板	大坂谷町平野町北:松屋弥兵衛板	47.5×34.5
15-106	番付	諸国大豊作米穀石数競鑑	嘉永四亥年八月大新板	大坂谷町平野町北:松屋弥兵衛板	47.5×34.5
12-83	戯書	お米安成萬ざい	大新板	寺町五条上ル: 屋四条寺町西江入:吉野屋勘兵衛	33×45
12-88	戯書	米高巳の冬忠臣蔵九段目抜文句			33×46
1-49	書籍	[大塩平八郎施行引札]	[天保八年]	河内屋喜兵衛・新次郎・紀一兵衛・茂兵衛四書肆	28×14
1-50	書籍	[河内屋新次郎義御吟味につき] 乍恐口上	天保八年酉二月廿四日	北久太郎町四丁目年寄:難波屋伝次郎より(大塩平八郎施行に関連)	23.5×34
1-22	書籍	大坂袖鑑(部分:14・15丁)		東御組与力衆名附に「大塩格之助」有	7×29 2枚
2-30～32	書籍	大阪鑑	文政九年以降	大塩平八郎:与力・吟味役・唐物取締定役・盗賊改	33.5×52.5
2-30～32	書籍	御役録 紋入り 屋敷配置図	文政十亥年	大坂書林:神崎屋金四郎板 大塩平八郎	28×53

飢饉・大塩関係

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
2-30~32	書籍	御役録 紋入り 屋敷配置図	天保八年酉八朔改正	天満書林: 神崎屋金四郎板 元大塩格之助屋敷跡	29 × 57
4-3/4	書籍	御役録	申八朔改	大坂南久太郎町四丁目 西三入 書林: 神崎屋 二郎板城代: 大久保加賀守忠真 大塩政之丞(川 役)・平八郎屋敷地	29.5 × 51
11-7/8	書籍	大塩平八郎屋敷附			29.5 × 55
11-10/11	書籍	御役録	文政十二より	与力御役付 諸御用調役・目付・地方役・盜賊改: 大塩平八郎	29.5 × 55
11-10/11	書籍	御役録	文政十二より	与力御役付 諸御用調役・目付・地方役・盜賊改: 大塩平八郎	29.5 × 55

お陰参り

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
12-10~15	流行	宝永二乙酉年御影参宮施行人数書	天明八年以降の注有	宝永二年三月朔日より京・大坂伊勢路への抜け参り	23×33
8-1	絵	[おかげ参図]	文政十三寅年		34×49
8-9	絵	いせおかげ参の図	寅之年大新板	歌川国丸画 大阪北堀江市場：綿屋喜兵衛版	39×53 彩色
8-64	絵	[おかげ参図]	文政十三年		17.5×4.5 彩色
12-5~9	絵	宝永二乙酉年御影参流行御奇瑞記録并絵図	文政十三庚寅年	宝永年間に板行「宝永千載記」と題す	23×33
6-68	諸芸	座付狂言おかげまいり伊勢物語	卯之歳見世極り役者附	座本：浅尾 筑後芝居	36×48.5
8-30	諸芸	おかげかへ哥扇づくし 二上り			10×13.5
8-32	諸芸	おかげかへ哥なのは 二上り			9.5×13
8-35	諸芸	おかげかへ哥ゆかりの月 二上り			9.5×13
8-2	諸芸	諸国おかげ参いろはうた	文政十三寅年大新板		34×48
8-12~15	詩文	有楽歳旦			12.5×8.5 4枚彩色
8-16~21	詩文	おかげ落はなし		近丸作	9×13 6枚 彩色
8-22~26	詩文	有楽歳旦			12.5×8.5 5枚
8-29	詩文	御影帖詠草募集		松聲菴連風集者 西横堀大坂屋佐市	17.5×15
8-3/4	出版	太神宮御影参即興おとし咄 全壹冊	文政十三年庚寅閏三月		66×15
8-5/6	出版	おかげ道中嘶栗毛 全部二冊			96×18.5
8-7	出版	太神宮御影参 初編一組 太神宮御影参 二編一組		講元和国屋泰平 世話人豊年屋万作	38×52
8-28	出版	[新板御影参り]口上		本屋新作	17×24
8-3	出版	大神宮御影参二編			18×13.5

お陰参り

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
8-33	出版	永代大々御樂太神宮御影参 初編一組		講元和国屋泰平 世話人豊年屋万作	18×13
8-34	出版	御影参宮三方荒神 前編	文化十三庚寅新版	黒人蛭成戯作 柳斎重春狂画	18×13,5
8-36	出版	御蔭手本袖神蔵 全二冊		嶋堂	22.5×22
8-37	出版	おかげまいりいせものかたり全二冊[引札]		都文固梓	22×17
8-62	戯書	伊勢参宮誠の道しるべ	文政十三庚寅閏三月		28×41
8-39	戯書	おかげまいり諸行古事附	文政十三寅大新版		48.5×34
8-41	戯書	日本元祖天照太神円		本家参詣所勢州山田:雨宮斎拝製 大阪元弘所内 平野町松屋町東へ入:日中軒神明	34×48.5
8-42	戯書	諸国お陰間入大笑	文政十三寅年大新板	南丘凹	34×48.5
8-44	戯書	おかげ二付上開寺あ宝物かい帳	文政寅年三月中旬		34×48.5
8-45	戯書	おかげ参道中の口合新謎	文政十三寅年大新板		34×45
8-46	戯書	おかげ参宮人江御膳こん立	文政十三庚寅新版		34×48.5
11-9	戯書	おかげ参宮人江 お膳こん立	文政十三寅三月	大こくばし道くや作	33.5×46.5
20-117	戯書	おかげ参宮人江御膳こん立	文政十三庚寅三月下旬より		34×46
8-47	尽	おかげとりづくし			36×48.5
11-2	尽	大しん板おかげとりづくし			35.5×45
8-51	尽	おかげ参り虫づくし道中嘸し			34×48.5
8-40	文句	三ヶ津大芝居役者見立おかげ参りのあなもんく	文政十三寅年大新板		34×47.5
8-52	文句	諸国おかげ参太功記十段目抜文句	文政十三寅年大新板		34×48
10-2	文句	諸国おかげ参太功記十段目抜文句	文政十三寅年大新板		34×45

お陰参り

巻 - 頁	分類	資料名	出版年等	著者・発行所等	大きさ
8-53	文句	諸国角力ニ而おかげまいりおどけもんく	文政十三寅年大新板		34 × 47
8-54	文句	おかげ参忠臣蔵九段目抜文句	文政十三寅年大新板		34 × 45
8-55	文句	諸国おかげ参忠臣蔵九段目抜文句	文政十三寅年大新板		34 × 48.5
10-1	文句	諸国おかげ参忠臣蔵九段目抜文句	文政十三寅年大新板		33.5 × 46.5
8-56	文句	諸国おかげ参菅原四ツ目抜文句	文政十三寅年大新板		34 × 48.5
8-57	文句	諸国おかげ参白石嘶吉原の段抜文句	文政十三寅年大新板		34 × 48.5
8-58	文句	おかげ参妹背山三段目抜文句	文政十三寅年大新板		33.5 × 46
8-59	文句	おかげ参妹背山三段目抜文句	文政十三庚寅年大新板		33.5 × 48.5
8-60	文句	諸国おかげ参あこや琴賣段抜文句	文政十三寅年大新板		34 × 48.5
8-27	書簡	おいせよりまいる 御をん地より		封筒・題簽様	18 × 7
8-61	書簡	おいせよりまいる 御をん地より			17.5 × 48.5 2枚
10-54	書簡	勢州長谷川氏来簡之写	四月十二日	はせ河より鳩居堂主人へ	25 × 17
4-48	施行	伊勢参宮おかげのいんねん並ニ施業のわけ	文政十三寅年(来る卯年)		21 × 15
8-48	施行	諸国おかげ施行次第	大新板文政十三寅年三月はじまり		33.5 × 46
8-63	施行	おかげ参り施行	[文政十三年]	書林永寿軒	34 × 47.5
8-38	賽銭	新板見立道中通用御蔭賽銭		京寺町五条上ル町:通秋田屋藤六板	34 × 48.5
8-49	銭高	伊勢参りの道五十里を六十日の間凡銭高附			47.5 × 34
8-50		日本最上天下随一之御奇瑞	文政十三庚寅五月新刻	長秀画 書林 京なはて古門前:叶家喜太郎板	34 × 48.5

翻刻『梅屋敷の記——名このはな』
翻刻『松島紀行』

『このはな』（甲和二九八） 黒沢翁満書 弘化二年写 一冊（二五・五×一七・五。m）

表紙の書名『このはな』、内題『梅屋敷の記』、本文十丁、半丁に六行あて記載。表表紙の裏に、本文とは異なる字で「武蔵忍藩黒澤翁満先生書」と記された付箋、内題の下に

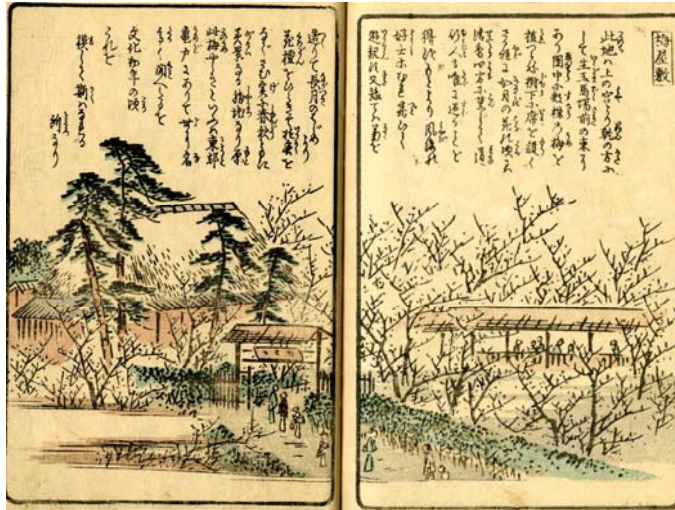
平迺家蔵書の印があり、本文末に、「弘化二年二月十八日 翁満記」と記されている。

弘化二年二月、奇しくも大坂で会した四人の風流の士、小倉藩の大坂留守居役として赴任していた西田直養、武州忍藩大坂蔵屋敷勤仕の黒沢翁満（葎居）、因幡藩士として大坂在勤中の小林大茂、紀州藩士加納諸平（柿園）が、当時の梅の名所である梅屋敷へ船路で寒梅に出かけ共に過ごした一時を後の思い出にするべく、西田直養の発案で黒沢翁満がものした作品である。

舞台となった梅屋敷は、「摂津名所図会大成」、「浪華の賑ひ」等によれば、東都亀戸の梅屋敷を模して、文化年間に造ったもので、上之宮より乾の方、生玉馬場の東（現在の upper 町六・七丁目辺）にあり、園中に梅を植え、樹下に席を設け、如月の花の頃は清香四方に満ち、風流の好士が群れ集い遊観、また秋には菊観で賑わったとある。後年、平坦なつくりの同屋敷の北方に、地に高低をつけた新梅屋敷が出来たことから、旧梅屋敷と呼ばれた。明治三十六年頃は華城第一の梅の名所であったが、日露開戦の二三年後には、山口銀行主の山口吉郎右衛門氏本邸となり、大正期には忘れさられてしまった。



〔浪花百景一梅屋敷一〕（貞信画）



「浪花の賑ひ」より 梅屋敷（松川半山画）

〔松島紀行〕（甲和一二八五） 〔西山宗因〕著 寛文三年写 一冊（二五・五×十
八・五cm）

本書は、『松島紀行』と題したが、表紙・本文中には、書名・著者名共記載されていない。
表題紙（白紙）一丁、本文十四丁、半丁に八行あて記載、七丁と一行が松島への紀行文、
後に続く和歌百首の冒頭に宗因が名を記載、本文末に「干時寛文三年蠟月五日書也」とあ
る。

宗因の奥州紀行は、「奥州紀行」「奥州塩竈記」「陸奥塩竈一見記」「松島一見記」
「陸奥行脚記」等内容に異同を伴った作品となり、八木書店の『西山宗因全集4巻―奥
州紀行―/二巻―連歌篇二―』に翻刻して収載されている。本書は、その内の東京大学史
料編纂所「西山宗因筆歌書」（宮津三次郎氏旧蔵宗因自筆本影写）、学習院大学所蔵の宗
因自筆「西山宗因陸奥行脚記」と同系統の作品と思われるところから、同書に追加する意
味で翻刻を試みた。

参考文献

「撰津名所図会大成」 暁鐘成著 松川半山画 柳原書店 昭和五十一年刊 三七八/一
〇七

「浪華の賑ひ―梅屋敷― 暁鐘成編 松川半山画 河内屋喜兵衛 安政二年刊

「浪花百景」〔一名 浪花土産〕―梅屋敷― 長谷川貞信画 綿屋喜兵衛刊 三七八/五

三六

「浪花百景―梅やしき― 中井芳瀧画 立風書房 昭和五十一年刊 ぬ/一七八

「浪花百景 いまむかし」 大阪城天守閣編刊 二九一・六三/四八一N

「浪花自慢―別名風流画口合浪花名所道案内― 櫻亭似螻撰 松川半山画 三七八/一四二

「保古帖 十五巻・大坂嘉永二酉花鳥記」 〇四五/一六〇

「大坂繁昌詩」 田中金峰著 紀律堂蔵版 慶応三年刊 二三七・七/六八

「大阪と博覧会」 第五回内国勸業博覧会協賛会編纂 明治三十五年刊 八〇七/三三五

「上方」三十号―三十年前の大坂東郊（寺川信著）― 上方郷土研究蚊会編刊 雑四六八

「写真集 なにわ今昔」 毎日新聞社 昭和五八年刊 三七八/九二一

「西山宗因全集 二巻 四巻」 西山宗因著 八木書店 二〇〇六年刊 九一八・五

／一八N

凡例

本文は底本を忠実に翻刻することを原則としたが、通読の便を考慮して、句読点を施した。

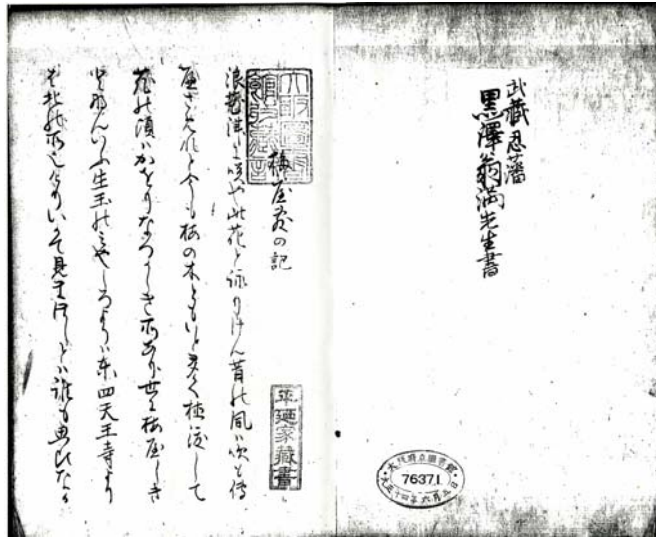
底本にある旧字体はそのままとしたが、一部活字のない物は通行の字体とした。

底本にある振り仮名はすべてそのままとした。

特殊な合字・異体字・連字体などは通行の字体に改めた。

底本が虫損により、判読困難な場合は「□」で示した。

反復記号「ヽ」「ヾ」「ヿ」「ヸ」「ヷ」「ヶ」「ヵ」「ヴ」「ン」「ヲ」「ヱ」「ヰ」「ヱ」は底本のまま、漢字のくり返しは「々」で表示した。



「梅屋敷の記」



「松島紀行」

『梅屋敷の記——名このはな』

大阪府立中央図書館

安達 明子

宇円田 陽子

小笠原 弘之

北川 敬子

佐久間 素子

高崎 秀美

日置 将之

佐藤 敏江

八木 美恵

大阪府立中之島図書館

このはな

武蔵忍藩 黒澤翁満先生書

梅屋敷の記

平廼家藏書

浪花津に咲や此花と詠りけん昔の風は吹も傳へさめれと、今も梅の木ともいと多く植渡して、花の頃はかをりなつかしき所あり。世に梅屋しきとなんいふ。生玉のみやしるよりは東、四天王寺よりは北の所也けり。いかて見まほしとは誰も思ひなからに、猶打のとめられて遇しかちなるを、ことしくうけの三年というきさらきの十日八日、西田の直養かもとよりせうそこして、まのあたりかたらふへき事なんある。かならず今日をすくさてとやうになんいひおこせたるを、なその事そとてゆきて見たれば、あるしけふは加納の諸平と小林の大茂か爰にしもくなるを、おなしくはかいつらねて梅見に行んとなん思ふはいかにといふ。はやく思ひつる事をいと嬉しとなん聞みたるに、諸平きにけり。大茂はあしわけ小船にて、とみにはえなんとせうそこしたりければ、さらはあとよりおひしきぬへくちきりおきてゝ、いとあわたゝしうみたりたち出たるは、申の時にも猶おくれたるへし。すさともこれかれみたりよたりみて、その門の前より舟にのりてとさ堀をさかのほらす。舟人いへらく、時はいたうおくれたり。さす方は遠し。おん船はてなん程には、日も暮なんとすらんといひて、いとわひしと思ひたるを、すさともけしきとりていそかすもかし。直養はやう心しらひして、ひわりこ、つかさね、さゝえやうのものよういしたれば、船の内に取りちらして、酒のみものくひつゝ、何くれの物語りす。をりしも、今日はひなくもりとかや、古ことおほえて、いとゝ霞める空のけしきに、さゝ波よする川風の岸の柳をゆら／＼と吹なひけたるなど、いはん方なし。むつふるとちかかたみに酔ては、いとゝ心に残

す事なう、さえのかた歌の、かたわれたけく打かたらふ。いみしう面白し。船は西のよこ堀を南にをれて、道頓堀を東にやる。けに舟人かいへりけるやうにはてたれば、やかてくれにけり。そこより火ともして、ゆふやみは道たとくしなと打すしゆく。かやはかくるゝとおとろかし顔に、えならぬ風の吹すさふは、近つきやしたると嬉しきに、いと大なる門ありて、竹垣ひろらかにしめくらしたり。これなんさす所也ける。もろをり戸めきたるをおしひらいていれたり。くらければさたかならねと、たてもぬきも二まちにも猶あまりたらんと見ゆる庭に、梅ならぬ所もなく、近き梢はうす白みて、やみにも色の見えすしもあらず。香は空たきのやうになんみちくたりける。直養

さきつゝく梅のひかりにやみの夜もたそかれ時の心地こそすれ
なといふく猶奥深う下かけをあゆめは、やり水に棚はしわたして、石とも多たてたり。所々の小柴垣、とうろの姿さへいみしうえんにて、あくらたつものこゝかしこに並ひ、あつまやたつものなとも見えたり。もやにはひさしあり、はなちん傳あり。けうらをつくしたるまらうとゐ、ひとましめて人々のほる折にあひて、大茂もきつきぬ。めつらしうくはゝりたれば、物語ともく又改りてたのし。時に大茂

川風のはやきかをりのなかりせは水上遠き梅を見ましや

となんおくれたる心なるへし。いみしうそうそきたる女とも二人、へいし、かはらけもて出たり。つほけしり、さらやうの物までも、いとなん清かりける。われも人もひた物のみて、いたく酔たり。直養かいへらく、かうつとへりけるよたり、まると大茂は今浪花人のやうなれと、おのかしゝの故郷をいへは、まろは豊国の道の口也。大茂はいなは也。諸平は紀、翁満はむさし、四方四国なるも、ちきりあやしからしやはとて、

ぬは玉の夜はあくとてもよもやまのものかたりをそなすへかりける

といふをうけて、諸平、其四方の国の四人か酒をのむ事も、おとらすまさらず、かたみに上にたゝん事かたく、下にたゝん事かたくなんあるへきといへは、人々とよみて、はどうちわらふ。女ともくいたうみたれて、昔梅の花のをとめになりて、夢にかたらひし古事も侍りとかや、かすならねとも、今やうひとかなてまひさふらはまし。きんたちうたひてたまはらしやなど、やうくにくつし出たるを、大茂手かきて、あなかまたまへ。おもとたちはしはし北おもてにゆきたれ。爰にはいとなんやくましきを。といへは、しゝまく口おほひたるもをかしと見るに、きんたちは世の人にも似すおはしますかな。ひるこそ千五百ともなくまうき侍れと、誰かはよるの梅見にき侍らましとわらふ。直養いなとよ、心もて見んに夜なれはとて、何かははた此物いふ梅の花は殊更にも夜こそはと打たはふるゝ

に、女どもは其心をえぬ成へし。諸平かたへより、くほの名をは何とかいふつらたり、けふくなど打すして、諸聲にわらへとも、猶其心をえしらねは、何事をいふらんなと思ふらん顔持してひきそはみをり。それをかしていとゝわらふ。大茂女の袖をひかへて月まちてゆかせと人のかこたてもやみに残さんそのゝ梅かは

いさとて東おもてのさうしおしあけたれは、いつの程にかみまの月たかうなりぬ。人々おとろきてはし近う立出て見るに、今唯今いこま山の峯をはなれて、霞める空よりほのゝしう梅の梢に影さしたるけしき、いはん方なう、花の色の見えそめては香さへそはれる心地して、いとゝ唯ならぬ夜のさま也。直養

香はかりと思ひの外にうれしきは梅のほつえの春の夜の月

大茂

くみかはす霞もしはし空にきえて梅かえわくる月をみるかな
おのれも

大かたはおほろにかすむ月かけのなと梅にのみさやけかるらんなと詠ちらしてなほ見捨かたけれど、夜も更ぬ也。今はまかりなんとて人々おりたつ。あるし花の枝ともふさやかにたをりて、家つとにとて出したり。やかてすさにもたせたれは、道のおひ風猶えんなるもをかし。舟のとまにさしたるをみて大茂

ふきそへしを船のとまの梅かえにかけうかみてもおくる月かな
となんいへりけれど、誰も酔てよます成ぬ。さこそあれと、ひるの残りは猶忘かてにとうてしめたり。酒にしみなんといふもあれは、猿にかもなと爪はしきするもありて、いとゝ帰さはみたれにけり。酔のすさひにおもひよりて、浪花人ふたりかいふやう、今日の事のちの思ひ出くさにせはやとなんおもふをとて、諸平にはしかきせさせて、おのれに道の記せよといふ也。いたく酔たれはよろつ忘れたるをとわふれと、ゆるさねはいかゝはせん。さらはとてありつる、かくやよみしなど、したならず。はしに舟人の聲にて、おん船はてゝさふらふとなんいふ。

弘化三年二月十八日 翁満記

「松島紀行」

大阪府立中央図書館

小笠原 弘之

山田 瑞穂

大阪府立中之島図書館

佐藤 敏江

高萩 綾子

爰にひとりの翁あり。身はいやくて四の民にもましらす、形は釈義に似て精舎にも住せず。林下に心をおきなから、塵裏に恥るしれものなり。つくはの道を道として、其ともからを友とす。四方の国々に嘯き所々にあそふ。東の方に心さしける時はやよひの初になん。本より住所求るにしもあらず。身をうき草のさそはるゝ方もなくて、心の行所に任せて春過秋来り。すてに文月廿日余日には、陸奥なこそその関を越て何かしの城下にいたる。此地西北にめぐりて、みな山なり。山すくよかならずして茂林青々たり。南に川あり。日夜東流して葵海にのそめは、東吳万里の船を繋、ゆをひかなる壯観なり。なこそその関、さはこの御湯、野田の玉川、緒絶橋、小川の橋、岩城山、此城外一二里の間にあり。をのく興ある所なり。玉川の水上に山庄の地有。菊を東籬めく南山の柁時を多たり。茸かり、川逍遙のたよりよき所なり。海のつらには苦屋かたの休所あり。大河も垣根二なかれ、湖水門外にめくる。子陵かいとなみにことよせて日を暮し、夜を明す。さなから仙客にことならずして、斧柄も朽ぬへし。

世をつくす我所かせ下紅葉

やうく八月、いさよひの比、千賀のしほかまちかきにはあらねと、都よりたに思ひ立へきをとよほしおふせて、同行をさへたかひにければ、道すから口すさむ。つふやきて相馬中村を過て名取川、仙臺河、宮城か原の萩の盛いとさらなり。

宮城野を都のさかは花もなし

けふ十六日にや。また朝霧のほとに彼浦につきぬ。聞ならく六十余國の中々「に」詞に絶たり。川原のおとゝの昔も思ひ出られて、彼朝臣のこゝによらなん。なかめし蜚の小舟に乗て霧の籬の嶋かくれなくさしめくる。

浦山はいつくはあれとあま小舟かゝる所のあきの夕きり

塩竈や色ある月のうす煙

嶋かくすそれも霧の籬哉

扱、松嶋のたゝすまひ、やうかはりて、いたりふかきくまく見所おゝし。其夜はあまの苦屋にやとりて、

松嶋の夕へを秋のゆふへかな

月にかせ雄嶋の蟹の袖枕

明れは廿二日、空よくはれたり。また一葉にさをさして、をしまか磯、何某の嶋、残る方なし。よのつねの松の枝さし、岩のかたち、すへて言つくすへうもあらず。天飛鷹の声友よふ衝、さなから画図にむかふかことく、又詩聲を聞に似たり。やうく遠寺の鐘夕照をとろかし、遠浦帰帆もよほしかほなり。興に乗して来り。今日のたのしみ何にたとへん。跡の白波帰さは信夫の郡、二本の松、三春など言渡をへて、又岩城に帰り入ぬ。爰に又日比有て、長月の末に、

千々の秋よしやわかれば命哉

有明のつれなやたつた独旅

笑草をさへとめ置て、此度ハ白川の関にかゝりて、

遠く聞秋風わくる関路哉

下野国あしと言所に、西行法師のよめる清水なかるく柳あり。

時雨にも少時とてこそ柳陰

かせや時雨なすの笹原露もなし

神無月の初、武蔵国にいたりぬ。爰にも知人おほく、こなたかなた一日二日と過ゆくに、雪霽かちなる空には老の出たちもいかにそや。春待つてなど言に留られて、師走の空にもなりぬ。京の人来りあひて、物かたりつゐてに、やつかれかむすめ、文月の比うせにけるとふらひを言に、不計聞つけたる心地ともかくもおもひわかす。今迄つけさりし故郷人も覺束なく、夢にやあらん、偽にもやと萬におもひわくかたなし。いにし春、老の別をこそ心ほそう思ひしに、かくさかさま成愁にしつむハかへすくつれなき命にこそ。

かゝりける別れをしらて老か身の命はかりをおもひつるかな

からうして故郷のふみに、

あわれこのわかれを言もなくさめん人さへ旅におもふかなしさ

忍草の生ひたつを見ても、子はまさる覽とこそおもひやらるゝ。やみのうつゝは夢かとのみ、なみたに暮ゆく年の名残さへいとかなし。

打捨てこはなそ老の歳の暮

かくて年改り、明ゆく空、四方のけしきもいちしるし。天か下しろしめす御所なれば、御門くよりはしめ、民の家あまで松たてわたしたる。千年のかけにさし出へきならねと、世をいわひ、身をことたつ日なれば、

御代の春四方の本たつ東かな

むさし野や今朝は霞もなひく世の行末遠き春は来にけり

世間のとかに、花やかなる月日にそへても、心のやみはるゝかたなし。旅の空にしあれは、一僧を供養する事もなし。たゞ身つから念珠の序につゞり出たる句、百の数に及ぶ。ねかわくはあさかなる言種ながら唱る御名の力にひかれて、五障の罪をかるめ、九品の花ひらくるたよりともなれかしとなん、佛前にさゝけ奉るものならし。

宗因

春やあらぬさめぬや去年の秋の夢

露になれにし月かすむ袖

草枕旅に花咲花ちりて

跡ははるけき山路くらしつ

絶くの人けも里も見ゆる野に

舟わたすらし竹ふかきかけ

川口の涼しさそふる日は入て

雨落ると水上のくも

一しきり風に木葉や乱るらん

遠きもちかくなれる鹿の音

かりねする麓の庵の月更て

鳴子引手の寒き小山田

露霜の行かふ空やはやからん

あはれいつくをかりの古郷

うきはたゞ春ともしらぬ左遷に

うらゝなるにもあらいその波

霞分いそく清見か関くれて

駒つからかし歩よりそする

袖をもる雪打はらふ度くゝに

庭につみ置かけの山柴

身をはかつ賤か住居にならして

なにかうき世に又はかへらん

ねかふこそ往生るへき御国なれ

あさはかならぬ契たかはし
見そめしはふりわけ髪の末かけて
床しや深き窓のよそをひ
ねぬる夜の夢にも梅やかほるらん
やゝ明かたの園のはつ蝶
小雨せし名残は露のあたゝかに
打出る野の春は珍らし
音たちて氷のひまのさゝれ水
里はなれなる沢田あらすな
呉竹のふしみの道は草ふかみ
山松の葉を落すしたかせ
月影や雪にまかへて鳴からず
枕わひしく明すふゆの夜
片敷もなこやかならぬ麻被
うつゝにつらきいにしへの夢
君かいにし朝の雲のなかめして
空も泪の雨やそふらし
限有時をかなしむ花さかり
したふ佛はけふの二月
墨染の夕の山やうす霞
繪によく似たる春を見る峰
かさなれる岩ほそひへし瀧落て
上つせ清き此よし野川
夏はたゝなかれていつら夕被
月にはれのく天の八重雲
七夕にかせる扇の風たちて
露更る夜のこすおろしてよ
来ぬ人にむしの音さへやよはるらし
しのひしものを恋草の色
落としも覚す袖の泪にて

つれくときく須磨の浦波
我ことや友まとはして鳴千鳥
分る芦原の夜道わひしき
あかつきの煙となして帰る野に
いくさの跡は民のやもなし
時しらぬ田は草村にうつもれて
またさし柳枝も茂らす
たゝへぬる水も少き池の面
霧の籬の見入寂しき
誰ふるす舎里に月の残る覽
千度礎の声そうらむる
秋更る風につけても物おもひ
もろき栴にまさる色人
一時雨そのま計のうき別
いつちゆきての道の山さと
石はしる清水をむすふ門前
夕日かくれにおそき蟬の音
苧しほにそよめく麦の秋見えて
かよふ野守か栖しるしも
跡はたゝ有と計の三の道
御法にしかしもろこしの文
同しくは世をいとふ身を苔衣
おもふ心の奥の山すみ
花まちて幾有明の寢覚せん
ゆふつけ鳥やさそふうくひす
いとはやも関の此方に年越て
都の人のけはひのとけし
道すから旅をなくさめよむ歌に
野山の夕浦のあけほの
秋にうつる心や春をわするらん

子あるちきりもよそけ身にしむ
しれものゝことかたらひて露泪
立らるゝ名を月も憐め

なかれ木と成し行衛をいかゝせん

谷川ひゝく五月雨のころ

雲ふかき山ほとゝきす跡絶て

あふちましりの林しけしも

里ひたる社を祝ふかたはらに

引をうしとや野飼捨けん

をのかとち童遊ぶに打みたれ

夜半にまろはす雪そえならぬ

朝速ひらく戸さしの寒き日に

おもむく道の末の根風

こくふねは比良の湊を目にかけて

波のうへもや暮残るらん

花の色を俤にして行水に

おしむ弥生の日数ほとなき

干時寛文三年臘月五日書也

おわりに

大阪府立中央・中之島両館では、近世から明治にかけての資料を所蔵しており、仕事の中でそうした資料を扱う必要がある事から、他機関からの出向職員を含む職員有志による勉強会を開催、テキストは中之島図書館所蔵の大阪に関する資料とし、近世の資料の解読と共に、大阪や古典籍に関する知識の獲得をめざしている。長年続けているが、その時々により構成メンバーが入れ替わっているため、今回は二段階に班分けし、大阪に関する資料二点をとりあげる事とした。

梁元帝『金樓子』にみる魏晉南北朝時代の集書と整理

光田 雅男（中之島図書館）

はじめに

それから其の前に一寸支那の書目といふものは、いつ頃から出来たかといふことを申上げて置きたいと思ひますが、これはもう図書館の事に御関係の方は、どなたも御承知のことでありまして、現存して居る目録では漢書の芸文志が一番古いといふことになつて居ります。（二）

一九一三（大正二）年、図書館協会大会協賛事業として当時の大阪府立図書館が開催した和漢書目展覧会において、東洋史学者の内藤湖南は「支那の書目に就いて」という題目の講演を行っている。引用したのはその冒頭、中国の現存する最古の目録が『漢書』の芸文志であることを述べた部分である。

目録を作成する際に最も利用される、経・史・子・集の四つのカテゴリーを持つ四部分類は伝統的な漢籍の分類方法であり、時期的には魏晉南北朝時代に誕生し、唐代の『隋書』経籍志の編纂によつて定着したものとされている。しかし、内藤湖南が示した最古の目録『漢書』芸文志では、まだ四部分類を目にすることはできない。湖南の講演では、ここから分類の歴史を説き起こしていくこととなる。

ところで、ひとつ注意しておかなければならないのは、四部分類は単に書籍の管理運営上の観点からのみ利用されたわけではなく、学問の総体を表すものとして、近代以前の東アジアの知識人から多くの関心を集めてきたという点である。

清代の学者王鳴盛が「目録の学は、学中第一の緊要事」であると述べたように（二）、一つの学問を究めようとすれば、それが知の体系の中でどの部分に位置しているのかを把握していなければならず、手にしたテキストの良し悪しを判断できる目をも持たなければならぬ。つまりは、「目録学」の知識が絶対に必要になってくるのであった。したがって、四部分類は書籍の管理者の間だけで通用するものではなく、一般の知識人にとつても習得しておくべき必須の知識として存在してきたのである。

もつとも、分類法の持つ影響力が大きかったことは、それぞれの学問分野を深化させる方向に対してはそれを促す力となったであろうが、学問の枠組を固定化させる要因ともな

ってしまったものと考えられることもできる。一旦構築された知の体系のもとでは、その枠外に「逸脱」してしまうような発想は生まれにくくなってしまふ。だからこそ近代に入り、西洋の学問が大量に流入するようになるまで、四部分類はその権威を保ち続けることが出来たのであろう。

しかし、このことは翻って見れば、その体系の中で生産・蓄積されてきた「漢籍」というものを扱う上では、現在においても、やはり四部分類が一番収まりが良いということにもなるであろう。大阪府立中之島図書館では、和書との混配という事情もあり、漢籍についても書架分類上は十進分類法である「大阪府立図書館十進分類法」によっているものの、書誌分類上は『大阪府立図書館蔵漢籍目録』のごとく四部分類を採用しているというもの、こうした理由によるものであったろうと思われる。

本稿で扱う梁の元帝『金楼子』が編纂された魏晋南北朝時代というのは、目録学史上では劉向・劉歆父子の『七略』より『隋書』経籍志による四部分類の定着へと至る過渡期であり、研究上重要な時代の一つであると考えられる。

しかしながら、従来の研究においては、扱べき史料が『隋書』経籍志の総序と、梁の阮孝緒『七録』の序の二点しか存在していないという制約が大きく、わずかにその概略を述べることで精一杯となっていた。とりわけ、内藤湖南が「今日では、漢書芸文志より隋書経籍志までの間には、書籍の目録として詳細に書名を書きあげたものは残っていない」としていたように(三)、目録の実例を窺い知ることができなかった点も問題となっていた。しかし、実は梁の元帝『金楼子』中の「著書篇」では、自著のみという限られた点数ではあるものの、それらを四部に分類して書誌情報を記録しているのであって、「詳細に書名を書きあげたもの」の内容を知る大きな手がかりとなる存在なのである。その点が、従来の研究では十分に認識されてこなかったように思われる。

本稿では、この『金楼子』の中でも特に書籍に係る記述からなる「聚書篇」と「著書篇」の二篇を取り上げることで、魏晋南北朝時代の集書活動と整理活動について、若干の考察を試みるつもりである。

『金楼子』の著者である元帝蕭繹は、梁の初代皇帝である武帝蕭衍の第七子であり、侯景の乱を平定した後に梁の第三代皇帝となった人物である。なお、即位前の王号の「湘東王」で呼ばれることもしばしばある。

魏晋南北朝時代でも特に劉宋以降の王朝については、短命な王朝の続く乱世だったこともあって、累代の名門貴族の上に寒門軍人あがりの皇帝が君臨するという図式をとることが多かった。そのため、華やかな「貴族社会」とされるのとは裏腹に、皇帝の一族自体には文化的素養が必ずしも備わっていないことも多かった。しかし、蕭繹の場合にはその父であり、即位以前には『宋書』の編者沈約らとともに「八友」の一人にも数えられていた武帝蕭衍や、兄で『文選』を編纂した昭明太子蕭統、自らのサロンで「宮体詩」という詩風を作り上げた簡文帝蕭綱など、当代随一といっても良い文学一家の中で生まれ育っていた。蕭繹自身も学問を好み、若くして眼病のために片目の視力を失って以降も、一日中、左右の者に順番に書物を読み上げさせていた。たまたま蕭繹が居眠りをしていたことを良いことに、担当者が内容を読み飛ばしたりでもすれば、必ず目を覚ましたと伝えられている。

蕭繹が非常な集書家であったことは、後述する「聚書篇」の内容からもうかがえるが、それ以外にも、侯景の乱後に建康の文徳殿の蔵書七万余巻を荊州の地へと移送させる措置を取るなど集書に努めており、「故に江表の図書、斯れに因り尽く（蕭）繹に萃まる」という状況であったという（四）。

一方で、その過剰なまでの書籍への愛着は、彼を奇矯な行動に走らせることもあった。即位の三年後、西魏の大軍が江陵に押し寄せるといふ国家存亡の非常事態に直面しても、折からの『老子』の講義を中断せず、最後には蕭繹も聴講者も軍服を着たまま講義を続けたという。その結果、蕭繹の梁は西魏に滅ぼされることになるのだが、その最中、彼は舎人の高善宝に命じて自らの蔵書十四万巻に火を放たせ、自らもその火に赴こうとしたところを止められたという。後になって、なぜ蔵書を燃やしたのかと問われた蕭繹は「書を読むこと万巻にして、猶お今日有り。故に之を焚けり！」と答えたという（五）。なお、この事件については隋の牛弘の上表中に見られる書籍の不幸の歴史、いわゆる「蔵書五厄」の一つとして、始皇帝による有名な焚書などと並んで挙げられている（六）。

以上のごとく、良い面にせよ悪い面にせよ、いずれにおいても梁元帝蕭繹は書籍に対し

て常軌を逸するほどのめり込んだ人物であったということが出来る。その蕭繹の著書の内の一つが『金楼子』である。

第二章 『金楼子』の史料性格

『金楼子』は、その序文に「常に淮南の手に仮するを笑い、毎に不韋の人に託するを嗤う」とあるように、ここでは反面教師的な意味ではあるが、『呂氏春秋』や『淮南子』を意識して書かれている。それはつまり、『金楼子』自身の性格がそれら二書と同じように様々な思想や内容を総合的に集めた書物であることを意味している。実際、『四庫全書』では子部雑家類に上記の二書とともに「金楼子六卷」として収められているのである。

ただし、現存する『金楼子』は蕭繹の著したそのままの形で伝わっているわけではなく、一度散佚した後に、残された条文を再び集めることで復元を試みた輯佚書であり、そのことが『金楼子』の史料としての性質を複雑なものとしてしまっている

『四庫全書総目』の記述によれば、宋代頃まではまだ欠落したところもなく出回っていたものの、明代末頃には完全に散佚してしまっただけである。したがって、『四庫全書』に収められている『金楼子』は、いわゆる永楽大典本であり、その基づくところは元の至正年間の刊本だろうという(七)。

もう一つ、現在まとまった形で見ることのできるものとして、鮑廷博『知不足齋叢書』に収められているものがあり、今は知不足齋叢書本と呼んでおく。この知不足齋叢書本『金楼子』については、大阪府立中之島図書館でも所蔵している(八)。両者については、同じ時期に作られた別系統のテキストであり、互いに異同もあるという(九)。

このように、現存する『金楼子』は完全な形の足本ではなく、原書とどの程度違っているのかも推測しがたい史料となっている。目録学の分野のみならず、これまで『金楼子』という史料が研究の材料とされることの少なかつた要因として、この不安定さが大きな影を落としていることは間違いないであろう。

しかしながら、たとえ足本ではないとしても、もともと史料的な制約の大きい魏晋南北朝時代ではあり、政治的にも文化的にも大きな影響をもった人物の著作であることを考慮するならば、全く看過してしまつてよい史料であるとも思われない。加えて『四庫全書総目』では、「興王・戒子・聚書・説蕃・立言・著書・捷対・志怪の八篇、皆首尾完整す」と

しているように、この八篇に限っては一定の信頼性を認めているのも事実なのである。とりわけ後に詳述するように、「聚書篇」が結果としての蔵書ではなく、過程であるはずの集書を記録しているという特殊性、目録学史上の史料不足を補う存在である「著者篇」の価値を考える時、『金楼子』を史料として活用していくことには、やはり十分な意義があるものと思われるのである。

第三章 「聚書篇」にみる元帝の集書活動

知不足齋叢書本『金楼子』巻二に収められている「聚書篇六」は、著者蕭繹の書籍収集活動の記録である。

同篇末尾の文章によれば、「吾、今年四十六歳。聚書自り来四十年、書を得ること八万卷」とあり、彼が西魏の軍隊に捕らえられて亡くなる一年前、承聖二（五五三—西暦。以下同じ）年に記されたものであることが分かる。篇の冒頭、「初め閣を出でて西省に在るに、敕旨を蒙りて五経の正副本を賚わ」った時というのが、彼が湘東郡王に封ぜられた天監十三（五一四）年、七歳の時のことだとすると、それから三十九年ではほぼ四十年の数と合う。以下、全文を紹介することはあまりに煩雑となるので、適宜注目すべき箇所の内容を取り上げ、書き下し文の形に改めた上で解説を加えてみたい。

初め閣を出でて西省に在るに、敕旨を蒙りて五経の正副本を賚わる。琅琊郡と為りし時、敕を蒙りて書を給さる。並びに私に繕写する有り。

蕭繹の書籍収集は、父である武帝の敕により五経を賜ったことに始まるが、後に貰った書籍とともに、書き写しを行ったという。言うまでもなく、中国で印刷の技術が登場するのは唐代、一般的には宋代に広まったとされており、蕭繹が生きた梁代において、書籍を得る方法としては書き写すことがほぼ全てなのであった。「聚書篇」中にも「写」という字を、この後何度も目にすることができ。

東州と為りし時、史・漢・三国志・晋書を写し得たり。又、劉選部孺家、謝通直彦遠家の書を写す。又、人を遣わして呉興郡に至らしめ、夏侯亶に就きて書を写し得たり。

「東州」は不明だが、劉孺の蔵書を書写したのは、劉孺が輕車湘東王長史・領會稽郡丞の肩書きで蕭繹の幕僚として活躍していた際と思われるので、おそらくは蕭繹が会稽太守であった時のことを指すのであろう。「史」は司馬遷『史記』、「漢」は班固『漢書』、「三国志」は陳寿『三国志』であるが、「晋書」はもちろん唐代に成立した正史の『晋書』ではなく、それ以前に行われた諸家の晋書の内のいずれかであろう。さらに、呉興太守であった夏侯亶の蔵書を得た時のように、わざわざ人を派遣して書写させってもらうこともあった。

揚州と為りし時、呉中の諸士大夫に就きて起居注を写し得たり。又、徐簡肅勉の起居注を得たり。

「起居注」とは皇帝の言行を記録した書籍であり、『隋書』經籍志では後漢獻帝以来の起居注を四十点ほど挙げている(十)。徐勉については、従来の起居注が煩雑であるところから、編集を加えて『流別起居注』六百巻を作ったことが本伝に見える(十一)。

前に荊州に在りし時、晋安王子時に雍州に鎮したれば、啓して書写を請う。比ごろ 90
応に蜀に入らんとすれば、又書を写し得たり。又、州民宗孟堅を遣わし、都の市に下して書を得たり。

「荊州に在りし時」というのは、蕭繹が荊州刺史となった普通七(五二六)年頃のこと。現在と変わらず、引越しの際などは、普段書庫の奥深くに蔵されている書籍を手取るチャンスだったのであろう。また、宗孟堅を派遣した際のように、出来合いの書籍を購入するという集書方法も無くはなかった。ただし、やはり圧倒的に書写や譲渡によるものが多いようであり、「聚書篇」ではその他に購入したという例は少なく、逆に書籍を集めるための方として「購入」というものが意識されることは極めて少なかったであろうことがうかがわれる。

安成煬王湘州に於いて薨じたれば、又人を遣わして就きて書を写し得たり。

安成煬王機が湘州で亡くなったのは大通二(五二八)年のこと。本伝によれば、安成煬

王機については性格に問題があったものの、豊富な蔵書を有していたことが知られ、そうした関係もあつてか、蕭繹は彼の詩賦を編集して序文も書いてやったというほどの仲であつたようである(十二)。

又、招提琰法師衆義疏及び衆經序を得たり。又、頭陀寺曇智法師陰陽卜祝冢宅等の書を得たり。

蕭繹が集めたのは経書や史書などの四部書だけではなく、仏書もそうであつた。それと
いうのも、彼の父である武帝蕭衍は稀代の崇仏皇帝としても有名で、同泰寺をはじめとし
た仏寺の造営、自ら皇帝の身分を捨てて三宝の奴となる「捨身」を大々的に行つてもいる。
さらに、本来儒教的儀礼をこそ最も体現すべきもののはずである外交儀礼の場においても、
仏教的色彩を濃厚に取り入れた式次第を執り行つていたという記録も残っているほどの仏
教信者なのであつた(十三)。

又、江州江革家に於いて、元嘉前後の書五帙を得たり。又、姚凱の処に就きて三帙を
得たり。又、江録の処に就きて四帙を得たり。足して一部と為し、合わせて二十帙
一百一十五卷。並びに是れ元嘉の書にして、紙墨極めて精奇。

そもそも、いつごろ誰の蔵書を書写して手に入れたかという記録を丁寧に記載しているだ
けでも、集書を始めた当時から蕭繹が几帳面に記録をつけていたことを窺わせるのだが、
この部分以降、さらに巻数についても詳しく記している部分が登場する。元嘉は劉宋文帝
時代の年号であり、「元嘉の治」として社会が安定し文化が栄えた時代として記憶されてい
る。ここで手に入れているのは、あらためて書写したものではなく、元嘉時代の写本その
ものであるために、出来栄えの素晴らしさを特筆しているのであるが、蕭繹の頃にどう
にか手に入れられる写本の現物としては、この元嘉頃が上限であり、極めて貴重なものだ
つたということもあるのであろう。

又、蘭左衛欽、南鄭従り還りたれば、又写し得たり。蘭の書、往往にして未だ江を渡
らざる時の書、或いは是れ此の間の製作にして甚だ新奇なり。張湘州纘の経餉書の樊
光注爾雅の例の如き是れなり。張予章縮の経餉書の高僧伝の例の如き是れなり。范鄙

陽胥の経餉書の高誘注戦国策の例の如き是れなり。隱士王纘の経餉書の童子伝の例の如き是れなり。

蘭欽は軍人としての事蹟を持つ人物であり、南鄭を中心とした漢中地方を大同元（五三五年）年に領有することに成功している。その蘭欽がもたらした書籍については、「未だ江を渡らざる時の書」、つまり長江以北、華北の地で伝わってきた書物であることが貴重なのであった。北朝と南朝、互いに異なる王朝が分立した魏晋南北朝時代においては、物資の流通が制限されていたため、自らの地域に伝存していない書籍を手に入れることは容易ではなく、それだけにそうした書籍への関心は常に高まっていた。中でも、北魏の孝文帝が南齊に「借書」を求めた例は、南齊朝廷に大きな議論を巻き起こしたことを含めて記録が残っている（十四）。なお、多くの場合、情報漏洩の心配があるとしてそれらの求めは実現しなかったのであり、さらに一層書籍への渴望を高めることとなった。一方で、沈約『宋書』がいち早く北朝に伝わっていたことを示す記録もあって（十五）、大上段な「借書」以外にも書籍の入手ルートがいくつかは存在していたであろうことを思わせる。その内の一つが例えば南北の国境付近で行われた「互市」であり、例えばこの蘭欽の例のように領有権の交代をもたらした軍事行動によるものであったのであろう。なお、蘭欽については鮮卑族であって、北魏から梁に降った人物であろうとする説があり（十六）、おそらくその通りなのであろう。だとすれば、蕭繹が蘭欽から手に入れた書籍は単純に南鄭を領有した時に入手したもののだけではなかったのかもしれない。

法書は初め韋護軍叡の餉数卷、次に又殷貞子鈞の餉を得たり。爾る後に又范普を市に遣わして法書を得たり。又、潘菩提を市に使わして法書を得たり。並びに是れ二王の書なり。

法帖については市での購入も行っており、そちらはいずれも王羲之・王献之父子の書跡であったという。殷鈞は本伝によれば、宮中秘閣の四部の書の校訂を行い、目録を作ったとされている（十七）。

吾今年四十六歳。聚書自り来四十年、書を得ること八万卷。河間の漢室に侔しきも、頗る之を過ぎたりと謂へり。

「河間」は前漢の河間献王劉徳のことで、集書に励み、その個人蔵書は宮廷の書庫にも匹敵するほどであったという。蕭繹自身は、自らの蔵書をそれに勝るとも劣らないものとして負っていた。

以上、かなり省略した形での紹介とはなったが、それでも蕭繹の集書活動が始まりから終わりに至るまで、かなりの多岐に渡っていること、それが逐一記録されていることを確認することができた。

そもそも、結果としての一大蔵書コレクションを強調するような記録自体は少なくない。後世登場する様々な公的・私的な蔵書目録に課せられた目的の一つも、それであったであろう。しかし、『金楼子』のように、その過程である集書活動についての詳細な記録というのは極めて少ない。

蕭繹がこの「聚書篇」を記した理由は、やはり第一は自身の所有する蔵書への自信・自慢であったろう。ただし、ただそれだけではなく、四十年間様々な人々との交流を通じて集め続けた一つひとつを記すことで、書籍を集めることがいかにたゆまぬ努力の結果であるかを示す意図もあったものと思われる。その点で「聚書篇」は、梁代における書籍の有様的一端を示す貴重な史料であるとともに、梁の皇帝である蕭繹の、書籍を媒介とした公的・私的な人間関係をも連環的に表現したものであったということができるだろう。

第四章 「著書篇」にみる梁代分類目録の実際

漢籍の分類方法として、今日でも一般的に目にするのできる「四部分類」が定着したのは、『隋書』経籍志によるものであるが、その登場は三国時代にさかのぼる。経籍志の総序によれば、魏の秘書監荀勗が『中経新簿』を著し、「分ちて四部と為し、群書を総括した」とあり、甲部に「六芸、小学」を、乙部に「古諸子家、近世子家、兵書、兵家、術数」を、丙部に「史記、旧事、皇覧簿、雜事」を、丁部に「詩賦、函讚、汲冢書」をそれぞれ収めたとされている。そしておそらく、この『中経新簿』のもととなった鄭默『中経』でも、すでに四部分類が採用されていたものと考えられているのである。

その後、劉宋の元嘉八（四三一）年には謝靈運が六万四千五百八十二巻を収めた『四部

目録』を、南斉の永明年間（四八三～四九三）には王亮と謝朓が一万八千一十卷を収めた『四部書目』を、梁に入っては任昉・殷鈞の『四部目録』などが、四部分類を採用した目録として編纂されてきている。

しかし、これらと同じ魏晋南北朝時代には、劉向・劉歆『七略』以来の「七」部分類に回帰しようとする動きもあり（十八）、劉宋の王儉『七志』では經典志、諸子志、文翰子、軍書志、陰陽志、術芸子、凶譜志に附篇として道書、仏書を取るという形式を採用し、梁の普通年間（五二〇～五二六）にも阮孝緒が『七録』にて經典録、記伝録、子兵録、文集録、技術録、仏録、道録という七部分類を用いた目録を編纂している。つまり、蕭繹の生きた梁代には、新たに現れてきた四部分類と、伝統的な回帰を目指す七部分類が併存する形で使用されていたことになる。

本章で扱う知不足齋叢書本『金楼子』巻五「著書篇十」は、元帝蕭繹の編纂した書物全六百七十七卷を甲乙丙丁の四部及び仏書に分類したもので、蕭繹個人の著述目録となっている。したがって、掲載する書物の総数からすれば、既述の蔵書目録などには及ぶべくもないのであるが、目録自体の形式は著述目録であろうと蔵書目録であろうとそう変わるものではないであろうし、蕭繹自身の性格も影響して分野が偏ることなく四部全てに書名が掲げられている点などもあって、この『金楼子』著書篇は、目録学史上最も揺れの大きな時代に作られた上、内容をうかがい知ることのできる唯一の目録であるという、極めて高い価値を有する史料なのである。

以下、同篇の目録部分を各部分ごとに紹介する。なお、引用文中の（ ）内は原注であるが、蕭繹による自注と、知不足齋叢書本の注が混在しており、知不足齋叢書本の注については「案、云々」という形式で始まっている。これらの注については、筆者の判断により適宜句読点を付した。

著書篇十（案昭徳読書志，金楼子目録有著書篇。永樂大典金楼子，聚書篇後有自連山三秩至已上六百七十七卷云云。今案其文，蓋係著書篇正文，脱其篇目，因誤与聚書合為一篇。今分為著書篇。大典又別載金楼子著書篇五条。其二条，与芸文類聚所載梁元帝孝子伝序・懐旧志序相出入，而首尾殘闕，文亦互異。知原書具載序論，非僅目録。今遍考諸書，凡可補者，悉付於後。庶存其大略云。）

連山三秩三十卷（金楼年在弱冠，著此書。至於立年，其功始就。躬親筆削，極有其勞。）

金樓秘訣一秩二十二卷（金樓纂。即連雜事無奇也。）

周易義疏三秩三十卷（金樓奉述制義，私小小措意也。○案梁書本紀，義作講，三十卷作十卷。）

札雜私記五秩五十卷（十七卷未成。）

右四件一百三十二卷甲部

最初の甲部には、現在の経部に対応する書籍四件を載せている。篇名部分に付された知不足齋叢書本の注によれば、『永樂大典』ではこの著書篇の目録部分については、もともと聚書篇の後に付されていたという。しかし内容を確認すれば、これが蔵書目録でないことは明らかであるから、同注のように著書篇の文章が誤って聚書篇に混入してしまったものと考えて間違いないであろう。こうした事情もあつてか、それぞれの部に掲載されている巻数の合計が最後の総数と一致しない場合もあるなど、現在目にするところの著書篇が、蕭繹の記したもののそのままというわけではないようである。もともと、梁代の分類目録の有様をうかがうという本稿の目的においては、それは大きな障害とはならないであろうから、今はその問題は置いておく。

なお余談であるが、梁代当時の書籍はいわゆる卷子本の形態をとることが大半であり、「秩」とはその巻物を布で纏めた際の個数を表している。著書篇に掲げられている秩と巻数の関係を見ると、『金樓秘訣』の一秩二十二巻という唯一の例外を除いて、その他は全て最大でも十巻で一秩となるよう収納されていた様子をうかがうことができるようになってくる。

注前漢書十二秩一百一十五卷

孝徳伝三秩三十卷（金樓合衆家孝子伝，成此。）

忠臣伝三秩三十卷（金樓自為序。○案隋書経籍志，有頭忠伝三卷梁元帝撰。）

丹陽尹伝一秩十卷（金樓為尹京時，自撰。）

仙異伝一秩三卷（金樓年小時，自撰其書，多不経。）

黄妳（案，梁朝有名士，呼書卷為黄妳，即見本書雜記篇。原本黄訛王，謹校正。）自序一秩三卷（金樓小時，自撰此書，不経。）

全徳志一秩一卷（金樓自撰。）

懐旧志一秩一卷（金樓撰。）

研神記一秩一卷（金楼自為序，付劉毅纂次。）

晋仙伝一秩五卷（金楼使顔協撰。○案梁書顔協伝，協所撰晋仙伝五篇。）

繁華伝一秩三卷（金楼使劉緩撰。）

右一十一件二百一十一卷乙部（案右件，僅二百二卷。）

二つ目の乙部には、現在の史部に対応する書籍十一件を載せる。ただし、巻数は実際には二百二巻となり、九巻分の不足である。なお、一件目の『注前漢書』が正史類であることを除き、他は概ね史部の中でも伝記類に属する書物であると考えて良いであろう。中でも、『仙異伝』『研神伝』『晋仙伝』については、東晋の干宝『搜神記』をはじめとする魏晋南北朝時代のいわゆる「志怪」の風潮を受けたものであり、いかにも蕭繹の生きた時代を反映した著書であるといえよう。

孝子義疏一秩十巻（奉述制旨，并自小小措意。○案梁書本紀，武帝有老子講疏，元帝有老子講疏四巻。今自注云，奉述制旨。則孝字即老字之訛，義字即講字之訛。但巻数不同。未敢輒改，附識於此。）

玉韜一秩十巻（金楼出牧渚宮時撰。）

貢職図一帙一卷

語対三秩三十巻

同姓名録（案梁書本紀，作古今同姓名録。）一秩一卷。（金楼撰。）

式苑一秩三巻（金楼自撰。○案梁書本紀，有式賛三巻。苑字疑訛。）

荊南志一秩二巻（金楼自撰。）

江州記一帙三巻

奇字二秩二十巻（金楼付蕭賁撰。）

長州苑記一秩三巻（金楼与劉之亨等撰。）

玉子訣一秩三巻（金楼付劉緩撰。）

宝帳仙方一秩三巻

食要一秩十巻（金楼付虞預撰。）

弁林二秩二十巻（案隋書經籍志，弁林二十巻，注蕭賁撰。）

菓方一秩十巻

補闕子一秩十巻（金楼為序，付鮑泉東里撰。）

譜一秩十卷（金樓付王兢撰）

夢書一秩十卷（金樓使丁覬撰。）

右一十八件一百六十卷丙部（案右件，僅一百五十九卷。）

三つ目の丙部には、現在の子部に対応する書籍十八件を載せる。ただし、この丙部も実際の巻数は一百五十九巻で一卷不足である。

さて、この丙部で確認しておきたいのは『荊南志』と『江州記』の二点である。書籍の中身まで確認することは現在では出来ないため、絶対の確証は持てないものの、その書名からしておそらくこの両書はいわゆる「地方志」に当たるものと思われる。しかし、仮に地方志であるならば、現在の四部分類においては子部ではなく史部の中にこそ収められるべきものであり、『隋書』経籍志においても、『山海経』を初めとする一百三十九部の地理書を史部に掲出している（十九）。

実は、地理書がまとまって登場するのは、「地域」というものに目が向けられるようになった魏晋南北朝時代に入ってから以降のことであり、目録学上でも、この新しい資料群をどのように扱うかについては変遷が見られるのである。『金樓子』の執筆と最も時代的に近い阮孝緒『七録』では、史部に対応する記伝録の中に土地部として収めているものの、時代を遡って劉宋の王儉『七志』では、図書（図入り本）と地域を扱う「図譜志」という部をわざわざ新たに設けるといふ措置を取っている。『金樓子』においても、地理書はまだ定まった場所を与えられていないかのごとく、子部の中に籍を借りる形になっているようである。

最終的に『隋書』経籍志が地理書を史部に収めたのは、大きな影響を与えたとされる阮孝緒『七録』によるものかとも思われるが、それはともかく、こうした点からも、『金樓子』著書篇が魏晋南北朝時代の目録学変遷の跡を留めた著述目録であることが了解されるだろう。

安成煬王集一帙四卷（案梁書，安成康王秀子機襲封。諡曰煬。所著詩賦数千言。世祖集而序之。原本訛作煬帝王集。係鈔写訛舛，謹校正。又隋書経籍志，安成煬王集五卷。）
集三秩三十卷（案梁書本紀，文集五十卷。隋書経籍志作五十二卷。又有梁元帝小集十卷。疑作此書時，方三十卷，非訛也。謹校。）

碑集十秩百卷（付蘭陵蕭賁撰。○案隋書経籍志，梁元帝撰，雜碑二十二卷，碑文十五

卷。此作百卷。疑至隋時，已失其全。謹校。）

詩英一秩十卷（付琅琊王孝祀撰。○案隋書經籍志，有詩英九卷，注謝靈運集注。又云，梁十卷，不著姓名。疑即元帝此書。謹校。）

右四件一百四十四卷丁部

四つ目の丁部には、現在の集部に対応した書籍四件を載せる。安成煬王機については、蕭繹との仲の良さが知られ、機が亡くなった時にはその蔵書を書写させて、蕭繹自身の蔵書に組み込んでいたこと、前章で触れた通りである。

内典博要三秩三十卷（案梁書本紀作一百卷）

已上六百七十七卷

仏書については、四部の枠外という扱いで一件を載せている。部に名称が付けられていないことから、「五部」ではなく、あくまで四部の付篇という位置付けであったと考えるべきであり、蕭繹が著書篇で四部分類を採用していたことに異論はないであろう。

以上のごとく、四部分類と七部分類が併存していた魏晉南北朝という時代の中で、『金樓子』の著者である蕭繹が四部分類を採用していたことは、本章の記述から確認することができた。もっとも、著書篇についてはあくまで個人的な著述目録であったが、公的にも蕭繹が書籍を四部で分類させていたらしいことは、顔之推「觀我生賦」の自注に侯景の乱を平定した後のこととして「王司徒表して秘閣旧事八万卷を送らんとすれば、乃ち詔して比校せしめ、部分して正御・副御・重雜の三本と為さしむ。左民尚書周弘正・黄門郎彭僧朗・直省学士王珪・戴陵は経部を校し、左僕射王褒・吏部尚書宗懷正・員外郎顔之推・直学士劉仁英は史部を校し、廷尉卿殷不害・御史中丞王孝祀・中書郎鄧蓋・金部郎中徐報は子部を校し、右衛將軍庾信・中書郎王固・晋安王文学宗善業・直省学士周確は集部を校するなり。」とあることから分かる（二十）。また、同じく梁代に任昉らによつて編纂されたのも『四部目録』なのであった。

したがって、梁代に『七録』などの七部分類を採用した目録が編纂されたとはいっても、特に公的な地位にあるものについては、『金樓子』著書篇のように四部を採用することが多かったものと推測される（二一）。また、七部分類への回帰を目指した王儉『七志』や阮孝

緒『七録』にしても、劉歆『七略』の旧態をひたすらに墨守したのではなく、史書の扱いをはじめとして、その時代の現状に合わせる努力を行っており、内実は四部分類に近い形式を持つものでもあったのである(二二二)。こうしたことを考慮するならば、『隋書』経籍志編纂時にも四部以外の分類方法を採用する余地は、すでにほとんど無かったものと結論付けることができよう。

なお、『金楼子』著書篇において、四部全てに書物が偏りなく掲出されている最大の要因は、蕭繹という人の有する二つ理由があった。一つは、『金楼子』自体が持つ雑書的性格と同様、蕭繹自身も幅広く浅い知的関心を抱いていたということ。これは魏晋南北朝時代の文人が持つ特徴の一つでもあった。今一つは、誰かに編纂を命じたものであっても自身の「著作」とすることのできる、皇帝・宗室の王子という特殊な立場によるものであった。実際に、著書篇に挙げられている三十八件の書籍のうち、十一件については誰に編纂させたものか明記されている。他に『忠臣伝』では「金楼自ら序を為す」とあって、つまりは序文以外は別人が編纂したものと考えられるし、『長州苑記』の場合のように劉之亨らとの「共著」となるものもあった。したがって、もし現代的な感覚から判断したならば、著書篇に見られる書籍の内、三分の一程度については蕭繹はよく見てもせいぜい「監修者」どまりなのである。もっとも、仮に蕭繹の号令がなかったならば、それら三分の一の書籍は、当時において存在すらすることがなかったであろうことも、また確かなことであつたらう。

おわりに

本稿では、魏晋南北朝時代の集書と整理活動について、梁の元帝蕭繹の自著『金楼子』の記述を辿ることで確認していく作業をおこなった。

集書活動については、逐一を詳細に記録した聚書篇の内容が、「魏晋南北朝」という時代的な限定を外したとしても、他に類例を見ることの少ない貴重な史料であることを示した。また、書籍の売買という事象のまだ少なかった当時において、書写というほぼ唯一の手段による収集を行うためには、公的なものも私的なものも含めてパーソナルな繋がりがいかに重要であったかも確認することができた。

整理活動については、四部分類と七部分類の間で揺れていたとされる魏晋南北朝時代の目録学上の問題を、著書篇による著述目録の実際を確認することで、少なくとも梁代にはすでに四部分類が大きな力を持っていたであろうことを示した。

本稿で扱ったのは現存する『金楼子』の中でも僅かに「聚書篇」「著書篇」の二篇のみであったが、史料の不足を補うものとして、同書がいかにも有効なものであるか、前章までの考察を通じて示すことができたと思う。とりわけ『金楼子』という書物は、魏晋南北朝の中でも一級の文人であり政治家でもあった蕭繹が著したものであり、その価値は決してこれまで等閑視されてきたほどには低くはないはずである。一書の中に様々な内容を含む、その雑書的な性格ともあいまって、史料としての信憑性も含め、今後色々な観点からさらに深く読み込まれる必要があるものと思われる。

注

- (一) 『内藤湖南全集』第十二卷（筑摩書房、一九七〇年）「支那の書目に就いて」
- (二) 『十七史商榷』卷一・史記一
- (三) 前掲『内藤湖南全集』第十二卷「支那目録学」
- (四) 『隋書』卷四十九・牛弘伝
- (五) 『資治通鑑』卷一百六十五・元帝承聖三年十二月の条。ただし、巻数については『南史』卷八・梁本紀下に「十余万卷」とあるなど異同が見られる。
- (六) 『隋書』卷四十九・牛弘伝
- (七) 『四庫全書総目』卷一百一十七卷・子部雜家類一
- (八) 『金楼子』六卷（『知不足齋叢書』第九集・六十五〜六十六冊）
- (九) 詳しくは、鍾仕倫『《金楼子》研究』（中華書局、二〇〇四年）参照。
- (十) 『隋書』卷三十三・経籍二
- (十一) 『梁書』卷二十五・徐勉伝
- (十二) 『梁書』卷二十二・太祖五王伝
- (十三) 『西陽雜俎』卷三・貝編に、東魏の陸操が梁を訪れた時のこととして、武帝が菩薩衣を着て仏の礼拝を陸操とともに行ったことが見える。
- (十四) 詳しくは、吉川忠夫「北魏孝文帝借書考」（『東方学』第九十六輯、一九九八年）参照。
- (十五) 『魏書』卷五十三・李孝伯伝附李豹子伝に「劉氏偽書」を取り上げており、その中に「張暢伝」

があることが分かるため、劉宋の歴史を著した沈約『宋書』のことと考えられる。

(十六) 榎本あゆち「帰降北人と南朝社会―梁の將軍蘭欽の出自を手がかりに―」(『名古屋大学東洋史研究報告』十六、一九九二年) 参照。

(十七) 『梁書』卷二十七・殷鈞伝

(十八) ただし、『七略』の分類を受け継いだ『漢書』芸文志によれば、「七」部の内、「集略」は総論に当たる部分で、『七略』自体は実際には六部分類であった。

(十九) なお、同所に「荆南地志二卷(蕭世誠撰)」というものが見える。あるいは著者は「蕭世誠」の誤り、つまり蕭繹のことで、ここに掲げる『荆南志』と同一のものであろうか。

(二十) 『北齊書』卷四十五・文苑顔之推伝

(二一) 『隋書』卷三十三・経籍二に見られる簿録中でも、書名から四部分類を採用したと判断される目録が多いことを確認することが出来る。

(二二) 詳しくは、前掲『内藤湖南全集』「支那目録学」及び井波陵一『知の座標 中国目録学』(白帝社、二〇〇三年)等を参照。

※ なお、参考資料中、鍾仕倫『《金樓子》研究』及び『名古屋大学東洋史研究報告』十六については、平成二十年一月現在において大阪府立図書館未所蔵のものである。

編集後記

「大阪府立図書館紀要」第 37 号をお届けします。

当紀要をホームページ上で公開するようになったことを鑑みましても、近年の高度情報化社会への変化は著しいものがあります。その変化に対応した府立図書館のサービスについての報告、一方長い歴史のある府立図書館ならではの所蔵資料の研究など、府立図書館の幅広い活動をお示しできれば幸いです。

なお、当紀要に記載された著作物の著作権は執筆者に属し、その著作の使用に関しては大阪府立図書館が著作権者の了解を得ています。

編集委員（ は編集長）

中之島図書館 山田 正 前田香代子 仙田英一郎 森田俊雄 佐藤敏江 藤井弘子
中央図書館 田中秀一 前田章夫 山元真樹子 佐久間 艶子

大阪府立図書館紀要 第 37 号

2008 年 3 月 31 日

編集・発行

大阪府立中之島図書館

〒530-0005 大阪市北区中之島 1 - 2 - 10

大阪府立中央図書館

〒577-0011 東大阪市荒本 5 7 - 3

<http://www.library.pref.osaka.jp/>

< 無断転載を禁ずる >